
てんだーぶるー。～せかいがきれいでありますように。

雛月詩音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

てんだーぶるー。くせかいがきれいでありますように。

【Nコード】

N1333E

【作者名】

雛月詩音

【あらすじ】

色んな理由から保健室に集まる女の子たちが、虚弱体質な友だちの恋のために頑張るお話です。コメディだったり、シリアスっぽいシーンもあったり。

第一話（前書き）

作中、若干のガールズラブ描写があります。苦手な方はご注意ください。

第一話

はう、おなかいたいです……。
ようやくトイレから脱出できました。うう、三十分も経ってますし。

今日は慢性ごろごろ型^{モート}でしたから。トイレに行ってもスッキリしないという点で、慢性ごろごろ型はだいぶ厄介な部類に入る腹痛モードです。いつまたおなかのキカン坊共が暴れ出すか分からないので、トイレ三十分の激闘をくぐりぬけた今とて全く安心できません。いつものこととは言え、わがおなかの不甲斐なさには呆れるばかりです。だめな子です。

「……はふう」

ため息つきながら、わたしはよろよろと歩き始めました。

目指す先はわたしたちの憩いの場。そこにさえ辿り着ければ、ひとまずの安心が得られるのです。

けれども、

「うつつ」

おなかを襲う鈍い痛み、わたしは思わずうずくまりたくなります。今日のはちよつとタチ悪いようです。むう……。

心配です。ちゃんと辿り着けるでしょうか。現在地・トイレ前から目的地である憩いのあそこまでは、校舎の端から端へ延びる廊下を渡り、さらに一階分の階段くだりというハードワークをこなす必要があります。弱つたいまのわたしに、果たして無事やり遂げられるかどうか。

しかし やらねばならない。

とどまっても事態は進展しないのです。ひとは挑戦によって進歩してきたのです。歴史の必然です。前進あるのみです。前のめりで死ねよです。

ゆえに、わたしは大いなる第一歩を

「はうゝ、」

踏み外してがくりと膝をつきました。

とゆうか、前進必須が歴史の必然ならば、ひとは一人では生きて行けないというのが社会の理ですし……。いまのわたしは孤独、留守番中にトイレのドアノブが外れたかのように心細い気持ちでいっぱいです。

どうしよう。

「さ、さくらちゃん、大丈夫？」

と思っていたら、天上から救いの声が降ってきました。

すこし細くて、やわらかい感じの、この声は。

「し、白ちゃんですか？」

「う、うん。おなかいたいのか？」

「ええ……。ちよつと油断しました」

「えつと、立てる？ 肩貸そうか？」

そうして欲しいのは、やまやまなんですが……。

わたしは、顔を上げました。

見慣れた女のこがわたしを心配そうな面持ちで見えています。その肩はとても細くて頼りなく、脱力気味のわたしがよりかかれれば二人もろとも倒れてしまいそうなほどです。

「さくらちゃん、無理しないで」

「そ、そう、ですね」

いつもならば遠慮するところなのです。

でもいまは状況がよろしくなかった。おなかいたいんです。心の余裕なしです。そんなところに優しい言葉をかけられたら、心が揺らぐのも当然です。背に腹は代えられませんし……。

だから、気付けばわたしは口に出していました。

「た、助けてください」

白ちゃんはうん、と笑顔で頷いてくれました。

「えつと……どうすればいいかな」

「すこしだけ寄りかかせてくれれば、大丈夫です」

「こう？」

「うん、いい感じです。白ちゃんのほうも、負担になってませんか？」

「大丈夫。もう少しだけ寄りかかっても大丈夫だよ」

「はい……」

白ちゃんの細やかな心配りが、心に……というよりおなかに染み渡ります。だいぶ楽になりました。持つべきものはともだちです。友情ばわーで腹痛マイナスごじゅっぱーです。友情ばわー。甘酸っぱい響きです。恥ずかしいときの気持ちにも似ています、とゆうかまんまです。

「もつとゆっくりがいい？」

「いえ、ちょうどいいです」

つらかったら声に出さなくてもいいよ、と言ってくれます。うう、やっぱり白ちゃんはいいいです……。

わたしは白ちゃんに支えられて長い廊下を渡りきり、階段を何とか降りることに成功しました。

そして到着した、わたしたちの憩いの地。

それは保健室です！ むやみにテンションが上がります。もう安心です。

白ちゃんが横引きの扉をがらりと開きます。

「失礼します」

中にいた白衣の先生が振り向いて言いました。

「やあ、いはな衣花、……とハザか。今日は調子悪そうだね」

保健のあさかわ浅川先生です。

「薬いる？」

「いえ、だいじょうぶです……」

「そか、あんまり無理しないようにね。ゆっくり寝ていきな」

「はい」

返事もそこそこに、わたしたちはベッドに向かって歩きます。心配そうな声をかけてくれた浅川先生には申し訳ないのですが、

衰弱し切った今のわたしには何より休息が必要なのです。

もうゴールすなわちベッドまでは数歩の位置。早く、横に、なりましょう。

視界の先で、ベッドを囲うカーテンが、窓からの風にゆるくそよいでいます。

白ちゃんがそれを開けてくれて、「あ」一声あげて固まりました。わたしも白ちゃんのちいさな体ごしにベッドを覗きます。

「……空気読めです」

思わずそんなことを呟いてしまったのは、そこにひとが寝ていたから。

タオルケットにくるまってすやすやと、よだれ垂らして寝ている女のこ。

「ああ、そこ、相坂^{あいさか}が寝てるんだ」

先生の言う通り、わたしのベッドを奪って寝ている不屈き者は相坂^{さか}涙未ちゃんでした。

「起してどかそうか？」と、先生は言ってくれますが、

「いえ、だいじょうぶです……」涙未ちゃんならば遠慮問答、一切無用。

「さ、さくらちゃん？」

わたしの行動に驚いた白ちゃんが声をあげますが、わたしは早く横になりたいのです。

「うー、」

とか唸りながら、寝ている涙未ちゃんの体を押し出します。外へ、外側へ。軽いからわたしの力でも何とかいけます。こにやろう早く落ちろです。

どしーんというよりはずるずるだらーという感じで、涙未ちゃんはベッドからずり落ちていきました。ざまあみやがれです。

「る、涙未ちゃん……」

白ちゃんの呟きを後ろに、わたしは勝ち取ったベッドに潜り込みます。

そつとあおむけに体を横たえ、ほつと一息。

そして保健室の天井を見上げました。

そこは真つ白でまっさら。空気まで、何だか漂白されているような気がします。

背中にはやわらかなシーツの感触。それがゆつくりとお腹の痛みを吸い取ってくれます。痛みに眩んでいた視界がすうっと元に戻っていつて、ようやくわたしは落ち着きました。

「はふう」

ごろりと寝返り。せかいは四分の一回転。

横倒しになった身長体重計。

大小さまざまな薬瓶の並べられた棚。

流し台と湯沸しポット。

大きな窓には夕陽のだいだい　いつもの、ふつうの保健室。
何となく安心するわたしです。

「落ち着いた？」

じぶんのベッドに上がって体育座りとなった白ちゃんが、声をかけてくれます。

「ありがとう白ちゃん、助かりましたよ」

うん、と頷く白ちゃんは、こんとひとつ、咳をしました。

タオルケットを羽織った背中にはちよつと曲がっていて、肩はびっくりするくらい細く、ときたま出る咳に合わせてちいさな体が揺れています。

白いを通り過ぎてわずかに蒼い顔には、わたしを気遣う表情が浮かんでいました。

白ちゃんは、いわゆる虚弱体質というやつなのです。そのせいでしょっちゅう調子を崩して保健室で休んです。だからさっき、助けてもらうのにわずかな遠慮があったわけですけど……。

ちなみにわたしは腹痛持ちで、同じく保健室常連だったりします。
「横になったおかげで、ずいぶん楽になりました」

白ちゃんの表情がすこし、やわらぎます。青く儂い微笑み。いつ

もの白ちゃん。

「白ちゃんのほうは、調子どうですか？」

「私は、いつも通りだよ」

「……そうですか」わたしはその返事に、ただ笑顔を返します。

「そういえば今日は一人でしたね。一咲ちゃんは？」

「たまたま用事があるって。すぐに帰っちゃった」

「それは珍しい」

そんなふうには話をしていると、

「うう」

ベッドの下からうめき声。涙末ちゃんが頭をおさえながら起き上がってきました。

ていうか起きるの遅っ。ベッドから落っこつたらすぐ目覚めてくださいよ人として。

「んあ……」

寝ぼけた声を出して、左右を見回します。

「……めがね」

めがね、めがねともはや出典不明な伝統台詞を呟きながら、わたしの枕のあたりをまさぐる涙末ちゃん。わたしは顔を撫でられる前にめがねを渡しました。

「あ、ありがとう」めがねが頭の上にあつたら完璧だったのに。

「おはよう涙末ちゃん」

「あ、もみじだ。おはよ」

愛用の下ぶちめがねをかけると多少しゃっきりしたのか、涙末ちゃんはゆるい笑顔でご挨拶。口元にくつついたよだれをぐいぐいぬぐいながら。

「ベッド、もらいましたよ。おなか痛かったので」

「うん。もみじなら許す」

偉そうな涙末ちゃん。あなたのじゃないですし。

「いつから寝てたんです？ 昼休みくらいから消えてましたね。それからずっとですか？」

「うんそう。お昼ごはん食べたなら、なんか眠くなったからさ」

「……今日来たの、いつでしたっけ」

「……いつだったかなあ」

もう覚えてないんですか。三時間目の終わりでしょうが。

「あれ、今って何時？」

「もう三時です。授業も、ホームルームも終了。放課後ですよ」

「そっか。ガツコも終りだね。お疲れさま」

二時間未満しかまともな学校生活を送ってないひとの言っている台詞じゃありません。

「うーっ、眠気も覚めたかなあ」

盛大に伸びをしながら、心底気持ちよさそうな声出されたら何も言えません。

「ふふ、涙末ちゃん、寝癖できてるよ」

白ちゃんが楽しそうに笑って、涙末ちゃんの頭を軽く撫でます。

「んあ、白たん、くすぐりたい」

涙末ちゃんは気持ちよさそうに目を閉じて、されるがまま。

白ちゃんに撫でられる涙末ちゃんは、なんだかペットちつく。イメージ的には逆なんですけど……というか、わたしが白ちゃんを撫でたいです。わたし、白ちゃん、涙末ちゃんのなで連鎖。いいかもです。今は位置関係的にむりなのが悔やまれます。今度わたしが元気なときにでもやってみるとしましょう。

「ふふ、涙末ちゃんの髪の毛、わたぐもみたい」

白ちゃん楽しそう。

「ところでさ」

ふいに、涙末ちゃんが意地悪げな声を出しました。

「白たん、最近先輩の件はどうなのよ？」

「えっ」

驚き目を瞪る白ちゃん。

撫でていた手が引つ込みます。

俯き、見る見る内に顔が桃色に染まっていきます。

見てるこっちが恥ずかしくなるくらい、ものすごい変化です……。
「ううん、相変わらず……だめだめです……」
なぜか丁寧語で現状報告する白ちゃんの体が、すこし小さくなっ
たように見えました。

第二話

白ちゃんは、先輩が好きなのです。

恋というやつです。

でも、今のところ、なかなか進んでいないのです。

「あんまり、会えないし。会えても廊下ですれちがうくらいで、挨拶はしてくれるけど」

「うーむ、そつか。ユーカリ先輩だっけ？」

「ううん、夕足先輩。^{ゆうたり}笹じゃないよ」

いえ笹でもないですが。パンダとコアラが、ごつちゃんに。

夕足先輩。いっこ上の二年生で、生徒会書記。

それくらいの情報しか、わたしは知りません。涙末ちゃんは顔くらい知ってるようですけど、わたしは見たこともないです。

「ちよっと立ち話、してみるとか」

「そつ」声が裏返りそうに。「そんなの、むりだろう」

涙末ちゃんは首を傾げます。

「そういうもの？」

「うん……。だって何、話していいか、わからないし」

「初めて会ったとき先輩に助けてもらったんでしょ？ だったら、その話とかでいんじゃない？」

「でも今さらだし……」

頭を抱えてうつむく白ちゃん。悩ましいですね。接点がないとつらいです。

「もたもたしてると、誰かに取られちゃうかもよ……？」

わざとらしく声をひそめてそんなこと言っても説得力ないです。ないのですが、

「うう……」

白ちゃんはタオルケットをかぶって防御体勢を取ってしまいました。

「先輩のこと、好きなんでしょ？」

うりうり、とにやにやしながらタオルケットバリアーを突つつく
涙未ちゃん。中から白ちゃんのくぐもった悲鳴が聞こえてきます。
ソフトえすえむ。

「で、先輩のどこがいいんだっけ？」

結局、話はそこに行き着きます。これはこれでいつものことだっ
たり。

「うん……」

タオルケットから顔だけ出して天むすになった白ちゃんは、恥ず
かしそうにもじもじと、そして次にぼうつとした目付きになります。
自分の気持ちを見つめる目。夢見るような、ふわふわとした。春風
のような、あったかい。そんな感じの気持ちです。

「先輩はね……」

そして、両の頬を真っ赤に染め、俯きがちに、だけどとても幸せ
そうに口元をゆるめて、先輩のいいところをいつこずつ挙げていく
のです。

もこもこの、綿菓子のような。

焼きたての、アップルパイのような。

女の子のからだは砂糖菓子でできているとか言いますが、白ちゃ
んに関する限りそれは事実と言えましょう。

ちなみに、わたしは甘いものが大好きです。お腹には、よくない
のですが。

はあ、白ちゃんを見ていたら、すこしお腹の調子がよくなりました。
た。白ちゃんはわたしにとっての最高のお薬です。

……冗談ですけどね？

「あんたら、青春してるなー相変わらず」

カーテンの向うから浅川先生の声が聞こえてきます。青春。毎度
ながら、いまいちピンと来ない言葉です。

「せんせもまだまだいけるよ。セーシュン、せーしゅん」

「ははは。あたしはもうだめだよ」

「そんなことないよ。せんせ美人だし」

「ありがとう相坂。そんなこと言ってくれるのはあんただけだ」

「いえいえどういたしましてっす」

ははは、と笑いあう二人。微妙にきわどい会話です。

先生と涙未ちゃんのやりとりを眺める白ちゃんは、もう元の、すこし青白い表情に戻っています。先輩の話をしているときよりも、落ち着いた様子。

穏やかな顔。

たぶんわたしも、似たような顔をしていると思います。

ここは 保健室は、居心地がいいのです。先生はいいひとだし、みんながいますし。

こんな時間が、ずうっと続けばいいなあと、ときどき思います。でも。

「青空つて、きれいだよね」

白ちゃんは窓の外を見て、とつぜんそんなことを呟きました。

「でも、すこし憂鬱」

つられてわたしも外を見ます。

雲ひとつない秋晴れでした。わずかに傾いた太陽が端まで真っ青な空を白く照らす、寒々しい景色。

「せかいが、もうすこしきれいならいいのに」

白ちゃん、ボエマー詩人。

「……そうですね」

わたしは、相槌を打ちます。

保健室のお世話になりっ放しなわたしたち。青空の自由なイメー

ジには、憧れと嫉妬みたいなものを感じます。

テンダーブリー病弱ゆえの憂鬱。

いつも体の調子に悩まされているわたしたちにとって、憂鬱は常にかたわらにあるものです。

保健室の時間が、どれだけ楽しくても。いえ、楽しいときほど、すっと気持ちに入り込んでくるわたしたちの憂鬱。

だから 普通に、楽しいだけじゃなくて。

もうすこしだけ、ちよつとくらい、いいことあるようにって願っても、罰は当たらないんじゃないかと思うのです。

例えば、

白ちゃんが、夕足先輩と、恋人どうしになれますように、とか。
青空を見上げる白ちゃんの、すこし曲がった背中と細い肩を見ながら、わたしはそんなことを思いました。

+ + +

「白たん、いる？」

天気は快晴。きれいな青空が広がる、うららかというにはすこし寒い秋の一日です。

いつものように保健室で憩っていると、すこしだけ開いた保健室の入口、扉の隙間からそんな声が聞こえてきました。

「いや、何してるんですか涙末ちゃん」

ふつうに入ってくればいいのに、こっそり覗きの体勢。何がしたいんでしょう。

「白ちゃんならいせんよ。今日はお休みです」

「そっか」がらりと扉全開。

「白ちゃんに何か用」「うひっ！」

涙末ちゃんは、きゆうに大声を出して立ち止まりました。

その視線の先には、ひとりの女のこがいます。

「……なに？」

仏頂面で文句とただの質問ともつかない声を出したのは、みき未樹
一咲ちゃん。白ちゃんのクラスの保健委員さんです。

「……白たんいないっていうから、てっきりいないと思ったのに」
涙末ちゃんは小声でぶつぶつ言いながら、物陰に隠れるように保健室へと入ってきます。

一咲ちゃんは保健委員なので、白ちゃんがここに来るときはいつ

も付き添っています。逆に言うと、白ちゃんがいないときは、あまり来ません。

まあ、来てもあんまり話さないんですけどね。

「びつくりしたじゃないか、もう……」

まだ言ってますし。本当苦手なんですネ。

涙末ちゃんは、一咲ちゃんをやや恐れています。

なぜなら、一咲ちゃんは、まじめだから。

わたしや白ちゃんと違って、涙末ちゃんが保健室に来るのは寝るためです。そんな理由でベッドを使う涙末ちゃんを、あまり一咲ちゃんはいい目で見えていないのだ、というのが、涙末ちゃん的主張。

それが正しいのかどうかはさておき、実際のところ、けっこう怖い感じ醸してるのは事実かもです。短めに切った髪と、きりりとした一重まぶた。ぴんと伸ばした背筋は無愛想さと相まって微妙な威圧感を生み出しています。本人はたぶん自覚してませんが。

「で、涙末ちゃん。白ちゃんに何か用ですか」

「う、うん、ちょっとね」

わたしは自分のベッドに座って、生徒なのになぜか薬棚の整理などしている一咲ちゃんを横目に見ます。何であんなことしてるんでしょうね。乱れてたから勝手にやってるんでしょうか。まじめだから。

涙末ちゃんはぱたぱた歩いてきて、わたしの隣の腰を下ろします。

そしていきなり横になりました。

「何ですか、寝る気ですか」

「いや、反射的に」あなたいつかのび太って言われますよ。

「今日来たの、五時間目でしたよね」

「うん」

「お昼過ぎまで寝てたんですね」

「そっだよ」

「いつも思ってますけど、だったら学校来なくてもよくないですか

？ どうせ来ても寝てるんですし」本当このひと寝すぎです。

「いや、ぼく皆勤狙っててさー」

「は？」いま皆勤とか言いました？

「ほら、ぼくって成績やばいでしょ？ だからちょっとでもいいことしとこうかなあって」

いや……確かに、遅刻率百パーセントながら欠席率はゼロ、ですけど……ね。

わたしの目から、涙がどつと溢れました。

脳内での話ですが。明らかに皆勤条件を勘違いしてますこのひと。というわけで、ぼくは一日たりと休むわけにはいかないのだ」

こぶしとか振り上げられても。

「いや、あなたの皆勤はどうでもよくてですね」

「何おう、ぼくにとっては重要なことなのに！」
かわいそうなひとです。

「はいはい」

「むう！」

「で、白ちゃんに何の用だったんですか？」

「あ、そうだそれだよ」

涙末ちゃんの表情がすこし、複雑になりました。安心と残念が一緒になったような顔。

第三話

「いやさ、ユーカー先輩、いるでしょ？」

「ええ」白ちゃんの想いびとというやつですね。

「あの先輩がさ、女の子と二人で喋ってたんだよね」

……むう。

「それはべつに、おかしいことじゃないです？」

「いや、場所が問題なのさ」

「ばしょ。どこです？」

「屋上近くの踊り場だったんだよ」

「つまり……あれですか。視線の密室で、二人つきりだった、と」

うむ、と頷く涙未ちゃん。

それは……。

たしかに、一大事かもです。

「見間違ひとか、勘違いとかじゃないですよね」

「しっ、失敬だなきみは！　ぼくはそこまでもうろくしてないんだ

ぞっ

「もうろくとか言ってますんし！？　まあ寝っ放しのひとが言つて

も説得力ないですけどね。脳あんまり働いてないんじゃないですか

？」

「ふふん。脳細胞を休ませてるのさ」

認めてますし。誇らしげな意味が分かりません。

「だいたい、屋上つて。なんであんなところ行っただんです？」

屋上は鍵かかってて、出られないはず。

「いや、屋上に用はなくて。あの辺って余った机とか椅子が積んで

あるでしょ？　だから、いいベッドにならないかなあって」

けっきょく睡眠ですか。

「あんなところで眠れるんですか？」

「どうか。試してみないと分からないよ」

「埃とか積もってそう。喘息になりそうです」

「ううん、そう言われると、ちょっと怖いかも……」

「大体、なんでわざわざ？ 保健室は？」

「たまには静かに眠りたいときもあってね」

「なんですと。」

言うに事欠いて、このひとは。わたしのベッドを奪ってるくせに！

まあ、でも、静かに眠りたいという気持ちは分らないでもないです。

「ときどきは、こっちにも来てくださいよ？」

「うん、そうするつもり。ここはやっぱり居心地いいからねえ」

「そうですよねえ。」

「そうじゃなくて。」

「涙末ちゃん、の寝床なんかどうでもいいんですよ！ それより白ちゃんの話です！」

「自分から突っ込んだくせに！？」

「……そうですね。そろそろ現実を見なければ。」

「すいません。で、誰なんです？ その相手は」

「えっと」すこしの間。忘れかけてるんじゃないでしょうね。「何

てったつけあの、三組の……微妙な茶髪の……」

三組に微妙な茶髪の子は何人もいるので、よく分かりません。

「ううむ……、気になります……」

「うむう」

「よもや、付き合っているのではないですよね？」

「うーん……、楽しそうに話しては、いたけどねえ」

「楽しそう、ですか。」

ひとけのないところで、二人っきりで。

……やっぱり、ふつうに考えて、あやしいです。

もし付き合ってるなんてことになったら、白ちゃんはどうすればいいんでしょう。そしてわたしは……、ええと。どうしよう。

そう、それを考える前に、まず。

「確認です」

「え？」

「先輩が付き合ってるのかどうか、確認しに行かなければ！」

「お、おう」

「さっきって言いましたよね？」

「うん。まだいるんじゃないかな」

「行きましよう。すぐに」

ぱつとベッドから降りて、涙未ちゃんの腕を掴みます。

「わあ、待ってよ、もみじ」

「急ぐのですー！」

出ぎわ、ふと気になったので、わたしはちょっとだけ振り返りました。

「一咲ちゃんも、行きますか？」

なんだかわたしたちのほうを、気にしてたふうでしたので。

彼女は視線を棚に向けたまま、「……」、「すこし間があって、

「私はいいよ。覗き趣味とか、ないから」

「そうですか」まあ、あんまり大勢で行っても逆に不便かもしれません。

でも、覗き趣味って、ちょっときつくないですか？

+ + +

「もし付き合ってるってなったらさ」

わたしと涙未ちゃんは、競歩状態で屋上を目指します。走るのは厳禁です、わたしたち的に。なぜなら疲れるから。

「どうするの？」

「明日は休みます」

「お腹痛くなるから？」

「はい」

ストレス性腹痛です。しくしくモードです。わたしのお腹は、ナ

イーヴですから。

「それで、お家で布団にくるまってどうするか考える?」

「そうですね」考えたくもないですけど。ああ、考えなければなら
ない状況を思うだけでお腹が……。

うずくまりたい。でも、そんな場合じゃないです。

「まあ、ちゃんとしたこと考えるのは、確認してから……にしまし
ようよ、ねっ?」

「そだね。……なんか必死だね」

当たり前です。白ちゃんのことなんですから。

「そういう涙未ちゃんは、どうするつもりなんです?」

「ぼく? うーん……」

腕を組み、あごに手を当てる涙未ちゃん。わざとらしい考えるポ
ーズです。何やらニヤけてきましたし……。

「ゴーモンかな」

「はあ?」

「付き合い続けてゴーモンされるか、別れると言ってゴーモンされ
るか、えらべーってね」

「鬼畜ですね! どっちみち拷問じゃないですか。だいたい具体的
には何するつもりなんです?」

「具体的につて、もみじのほつが鬼畜だね」

哀れみと畏れのまじった目で見られました。理不尽です。

そしてわたしたちは、屋上への階段に到着しました。急いで階段
上ったので、ちょっと疲れた……。涙未ちゃんも微妙に息が荒いで
す。運動不足な二人。

この上に、誰かがいるかと思うと、いやでも慎重な足運びになり
ます。そろりそろりと、無駄に壁に手を添えて、上を伺いながら歩
を進めます。探偵とか、スパイとか、そんな気分。

いや涙未ちゃん明らかにおかしいですし。なんで背中を壁に当て
て両腕真一文字なんですか? 意味分かりません。

物陰から飛び出すときに飛び込み前転しそうな友だちは放置して、

わたしは階上に意識を集中します。

ひとの声が、きこえてきました。女子の声。

やっぱり、まだいました。

わたしたちはいよいよ壁との一体化を進め、床を這うようにして上を目指します。すこしでも近くへ。でも、ばれないように。

「……で、そのときね……」

ついに階段を上りきってしまい、わたしたちは彼女たちと同じ高さ　つまり屋上の入口に到達しました。さいわい、壁と、積み重なった机や椅子が、わたしたちの姿を隠してくれます。

もう話しの内容が分かるくらい、女のこの声ははっきりと聞こえます。わたしたちはすこしの間、その場で聞き耳を立てました。

ときどき。

「……その子が実は、片耳が聞こえなかったってことが分かるんだ」
ドラマか何かの話でしょうか。

女のこの声は確かに、楽しそうです。相手になってるはずの先輩の声は、よく聞こえないのでどんな感じかは分かりません。

「……シヨックだったよ。ただ意地悪してるだけかと思ってたしさ」
弾んだ声が、狭つくるしいその場に反響します。踊るような調子で、その女のこは話し続けています。

なんというか、妙にむずむずする声です……。こういうかんじ、どこかで聞いたことあるような。

「ね、あたしの話、面白い？」

一転、ちよつと声をひそめ、不安そうな調子でそう聞きます。なんか初々しいですね。付き合ってるっぽくない気しますが、付き合い始め、という感じもします。

（よく分かりませんね。覗いてみましょう）超ひそひそ。

（いえっさー）サムアップは余計です。

そろそろと、目が合いませんようと願いながら、顔を出します。壁の影から二人トーテムになって先輩たちを盗み見る、わたしたちです。我ながらあやしい。確かに覗き趣味とか責められても、文句

言えない気がしました。

ともかく、女のこと先輩が、向かい合って机に腰掛けているのが見えます。

（あれは）

女のこの顔が、見えました。

小麦色の肌に、微妙な茶髪。短めのスカートから、自己主張の強い足が伸びています。

（月島、沙耶子さんですね）

（あーそうそう、そんな名前だった）

月島沙耶子さんは、派手な子です。クラスが違うので大した接点がないんですが、体育の時間などは一緒になることがあります。いつも何人かで固まって、大声で笑ってる。軽いノリ。そんなイメージがあります。

正直、意外です。白ちゃんの話から受ける、夕足先輩の真面目で優しいイメージとはズレがあります。先輩はどちらかといえば、白ちゃんのような女のこらしくてやわらかいイメージが似合う系のはず。

（忘れてたよ。個人的にはちょっと、派手系は苦手です）

（わたしもです……）

いつも元気で快活に過ごしてる彼女たちは、わたしにとってまるで遠い世界の住人のようなのです。

何だか、体調で悩んだこととか、なさそうで。

ちよっと近寄りたいたいというのが、本音です。

涙未ちゃんも雰囲気的にはわたしたち寄りですし（だから保健室が居心地がいいとか言うわけで）、苦手だと言うのも、無理もない気がします。

「……でも、最後はやっぱ、死んじやうんだよね……」

月島さんは、何やら哀しい話を楽しげに行く、という器用なことをやっています。彼女が先輩に好意を持っているのは、もう明らかですね。一応、彼女のほうから一方的に、先輩に言い寄っているだ

けという仮説が成立します。

だけど、問題は、先輩です。どう思っているのやら。相変わらず先輩の声がよく聞こえないのが、もどかしいです。先輩がソプラノだったらもつとよく聞こえたはずなのに！

月島さんは、延々とドラマか何かの話を続けています。先輩は基本聞き役なせいか、殆ど喋ってなさそう。わたしはその声を聞き取ろうと必死です。もう今すぐ出て行って目の前で話を聞いてやりたいくらいです。二人の目の前に仁王立ち。そうして付き合いジャッジをしてあげたい。

「あ、もうこんな時間だ。今日、友だちと待ち合わせしてるんだ、あたし」

ああ、話が終わってしまいました。

（やばいです、逃げましょう）

（い、いえっさー）サーじゃなくてマアムでしょうが。

とつと引っ込んで、撤収です。何だか行きよりときどきしました。

第四話

とりあえず、屋上行きの階段のすぐ側で待機です。二人が降りてくるのを偶然そこにいただけですよみたいな感じでやり過ごすつもり。

たったたと軽やかな足音に、と、と、と落ち着いたものが重なります。

「じゃあね、先輩。またね」

「うん。またね」

月島さんが、先に階段を降りてきました。手を振ってます。

「……？」

つと、月島さんと、目があってしまいました。怪訝そう、というにはちよつと厳しめの目つきで、わたしたちを見ています。……ばれてるわけじゃ、ないですよね。

すると、彼女は携帯を取り出して誰かに電話をかけ始めました。

「あ、貴子ー？ 用事終わったから、今からそっち行くからー」

そんなことをでつかい声で言いながら、月島さんは階下へ消えてゆきました。

その様子を、ぼうつと見守るわたしたち。

「結局、よくわかりませんでしたね」

「そうだねえ」

「どうでしょう」

「うーん」

腕組みして考える（ように見える）涙未ちゃんですが、その顔が、だんだんおかしい具合に歪んできました。にやにやと。

「……先輩は、今、ひとり」

「……そうですね」そのはずです。

「これは、チャンスだね」

「何のです？」

「うふふ、拉致、監禁ですよ！」

ラチ・カンキン。

……まじですか？

「監禁で。何する気ですか」

「ちつつち、甘いね、もみじ」ひとさし指が若干うざいです。

「決まってるじゃないか。ゴーモンして、白状させるんですよ！」

またそれですか。あなたゴーモンで言いたいだけと違いますか。

……うわあなんか楽しそう。目光ってますし。

「なるほど、それはいいですけど」よくもないですが。「どこに？」

「保健室でいんじゃない？ ちょうど今日、白たんもないしさ」

「一咲ちゃんがいまずけども」

涙未ちゃん、フリーズ。

「問い詰めてたら、また一咲ちゃん内の涙未ちゃん株が下がりそうですね」

「……いや」

自分で言っておいてなんですが、悩みすぎですし。そんなに一咲ちゃんのこと苦手なんですかこのひとは。

でも、ある瞬間とつぜん、吹っ切れたような笑顔を浮かべました。

「何か問題？」

脳内デリートしましたね。

そんないい顔されると、逆に不安になります。まあ、そこまでいかがわしいことするわけじゃないでしょうし、いいんですけどね。

たぶんですが。

「まあ、拷問とかは置いといて。保健室に連れ込んで尋問するのは、いいかもしれないですね」

あそこなら、そう邪魔も入りませんし。

「よし、その方向で行きましょう。となれば、早速先輩を捕まえねば」

「おうー。で、先輩どこ？」

「もうとつくにどっか行きましたけどね。でも、生徒会室方面へ歩

「いてるんじゃないですか？」

「あ、そだね」

ひょっとして見つからないまま終わるかもと心配したのですが、さいわい、先輩はすぐに見つかりました。

「ちよつと、すいません、夕足先輩」

ゆっくり歩く先輩の背後に、声をかけるわたしです。

「うん？」

振り向いてわたしを見る夕足先輩。

いま初めて先輩の顔をまともに見ましたが、とりたててイケメンさんではありませんでした。まあ、わたしとしては、そのほうが話しやすいて助かるのですが……。イケメンさんは苦手であります……。

しかし、表情は柔らかく、優しげでとっつきやすい雰囲気があります。なるほどこれは、白ちゃんが好きになったというのも、何となくですが分からないでもない気がします。色白で線が細いところも、ポイント低くないです。まあわたしがどう思うかなど、どうでもいいのですが。

「ほら、涙未ちゃん」

本題に入りたいんですが、今すぐちよつと来てくださいとは、言づらい。いきなりですし。だから言いだしっぺに悪役になってもらうことにします。

「んえっ」

なんだか妙に下がった位置にいた涙未ちゃんは、わたしに腕を引っ張られるとへんな声を出して驚きました。

「ほら、用があるんでしょ？ 先輩に」

「う、うん」

背中を押して、先輩の目の前に突き出します。先輩は、ちよつと怪訝そうな感じ。無理もないですけど。

「あ、あの……えっと、ですね」

しどろもどろ。さっきまでの勢いはどこいったですか。

「あの……そのう……」

俯いて、もじもじと、まるで要領を得ない涙未ちゃんです。いま思い出しましたが、このひと、意外と男のひとが苦手なものでした。目を合わせるどころか顔を上げることさえできません。涙未ちゃんはへたれやろうです。

そんなことで、ラチカンキンゴーマンリョージョクだなんて。かたはら痛しです。

「ええと……」

先輩は、困惑の度を深めつつあります。それでも落ち着いた雰囲気気が崩れないのは、さすがというべきでしょうか。

それにしてもこの状況、今から涙未ちゃんが先輩に告白しようとしてるようにも見えなくもなくて、何か微妙です。

「ええい」

辛抱できなくなったわたしは、へたれ涙未ちゃんを押し退け先輩の前に立ちました。仕方ないです。

「先輩、お願いがあるんですが」

「うん、何かな」

先輩の微笑みを見た瞬間、わたしの中で、ヤル気がちよつと萎みました。

「ええと、ですね」ごめんなさいわたしもへたれでしたっぽい。

ええい、やらいでか！ これには白ちゃんの未来がかかっているのです！ わたしがやらずに、誰がやる！

「先輩っ、ちよっ、ちよ……、」

「へっ？」

うわ、そんなびつくり顔は、ちよつと心に痛いです。何言ってるんだらうわたし。

「ええと、ちよつと、保健室に来てもらえませんか？」

普通に言えたです。

「あ、うん……、でも、どうして？」
どうして？

ああ、うん。そうですね。そりゃ、理由、気になりますよね。
白ちゃんがあなたのこと好きなのにあなたが他の女子と二人つきりで話してるから実際のところどうなのですか？
と聞きたいんです、けど。

「ともかく、一大事なのです！」嘘は言っていない、と思います。「
ですよ、涙末ちゃん？」

「え、あ、うん」ぼさつとしてないで何か言っていて欲しいです。

「一大事、だね。白たんの」

「白ちゃん？ 衣花さんの？」

先輩の顔色が、さつと変わりました。おお、白ちゃん、夕足先輩は白ちゃんのことをちゃんと心配してくれていますよ……。

でもちよつと、驚かせすぎですこれは。だって目付きが、こんなに、するどい……。ああ、一大事とか言ったら、そんなふうに思ってしまうのも無理ないことかもしれません。

「あ、いえ。一大事というか、別に白ちゃんの体がどうというわけじゃないです」

休んでますけど、たぶんいつものちよつとした体調不良でしょうし。

「そうなんだ」すこし表情が和らぎました。

「ええ、まあ、別の意味で一大事というか。ちよつと、保健室まで来てもらえればと……」

もう拉致でもなんでもありません。ただ普通にお願いしてるだけです。

「うん、そうだね……いいよ」

「おっ」おお、話のわかるひとです。

「意外にあっさりだね……」

涙未すけめ、何も言えなかったくせに残念そうにするのはやめてください。

先輩を連れて扉を開けた瞬間の、一咲ちゃんの呆れ顔は向う二日くらい忘れないと思います。覗いた上に連れてくるだなんて。信じられない。そう言ってるように見えました。すこし被害妄想っぽいんですけど。

「どうぞ、お座りになってください」先生の椅子を勝手に引きずってきて、勧めます。ただの事務用椅子ですが、座布団とか何気に良質で、座り心地いいのです。いまは先生もいませんし、好き放題です。

で、わたしたちはいつものベッドに落ち着きます。

「お茶は出せませんが……」どこにしまっているのやら。

「いいよ、お気遣いなく」先輩は、どこか遠慮がちに椅子に腰掛けます。

「それで、どうして僕は、ここに呼ばれたのかな？」

「はい、単刀直入に言いますけど」

「うん」

そうは言うものの、ちょっと聞きづらい話です。とはいえここまで連れてきていて、ということでもあります……ここはもう、勢いで。

「先輩、月島さんと、付き合ってるんですか？」

「ううん、付き合ってるないよ」

笑顔でさっくり否定です。

お話し、終了。

……いやいや。

これは、とても重要なことです！ だから、ちゃんと確認せねば。というか大体、こういうことって隠すものじゃないですか。よく分かりませんけども。

「本当ですか？」

「本当だよ」

……むう。

「じゃあ……」わたしの後ろに隠れるようにして、涙末ちゃんが口を出してきました。

「さっき月島さんと、階段の上で話してたの、どうして？」

男のひとが苦手な割に、聞きづらいことをはつきり聞くひとです。

「ああ、やっぱり、見られてたんだね」

先輩の顔に、やましげなところはあります。

「最近、何回か彼女に誘われて、ちょっと話してただけだよ。付き合ってるわけじゃないんだ」

「では何故、ひとけのないところに？」

「彼女の希望で。僕としては、断る理由はとりあえずなかったから、いいかなと思って」

うむう、紛らわしいです。まあ、おおっぴらに話してたとしても、結局同じ騒ぎになってたかもしれません……。

「じゃあ、本当に、付き合っていないんですね？」

「うん、付き合っていないよ」

「そうですか……」

わたしの目には、先輩が、嘘を言っているようには見えませんでした。先輩のことはよく知りませんが、このひとの雰囲気だったら、隠すことが必要になるような付き合いはしないんじゃないかと。そんな気がしました。

それに、白ちゃんの好きなひとです。あんまり疑いたくない気持ちも、あります。

「分かりました」

涙末ちゃんと顔を見合わせ、頷き合います。信じることにします。

「聞きたかったのって、そのこと？」

「ええ」

今度こそ、本当に話が終わりました。すると、すこし恥ずかしい気持ちが出てきます。半ば無理やり保健室に連れ込んで、わたしたちは何を聞いてるんでしょう。いえ、安心はできたので、いいんです。

「じゃあ、僕はこれでいいかな？」

「あ、はい。すいませんでした。お忙しいところを」

「ううん、今日は忙しくなかったから。大丈夫だよ」

やわく微笑んで、立ち上がる先輩です。そして、保健室の扉のほうへ。

終わってみれば、ここに白ちゃんがいればよかったのにと、そんなふうに思います。まあ、問い詰めてる現場はちょっと白ちゃんには見せられないので、仕方ないといえそうですが……。

「あーっ！」

わたしは、素っ頓狂な声をあげました。

みんなが驚いて、わたしを見ています。

「あ、いえ」恥ずかしくなりました。でも、名案を思いついたので仕方ないのです。

第五話

「あの、先輩、お願いがあるんですけど」

「うん？」

「ときどきでもいいので、ここに　保健室に、来てもらえませんか？」

そう、今はまさに、チャンスなのです。

せっかく保健室に連れてくることができたのですから、これからも継続的に来てもらうようにしないなんてありえませんか！

「あつ、そうだね、それ、いいね」涙末ちゃんが同意してくれます。ついでだから一咲ちゃんにも応援して欲しかったのですが、彼女は残念ながら、無言。

先輩は一瞬だけ怪訝そうな表情になったものの、わたしたちの目をちよつとだけ見て、何か理解したような雰囲気を感じました。

「うん、分かった。あんまりしょつちゅうは来れないかもしれないけど、できるだけ」

おお。

断られたらどうしようと思心どきどきしていたわたしは、ほっと息を吐きました。

うふふん、やりましたよ。これで先輩が、ここに来てくれます。

白ちゃんの喜ぶ顔が、目に浮かびます。

あの、甘くて儂い、砂糖菓子のような笑顔が。

「いえーい」

先輩が去った後、わたしと涙末ちゃんは、この度の成功を祝ってゆるゆるとハイタッチ。普通にやると痛いので、わたしたちのは控えめです。

「やったねえ、もみじ」

「これも涙末ちゃんが、意味のわからない理由で校内を徘徊してくれたお陰ですよ」

「いや、ぼくだけじゃ話しかけられずに終わってた。もみじがいてくれたお陰だよ」

「いやいや、涙末ちゃんがいなかったらわたしも勢い足りず、無理でしたよ」

「あーいやいやいや、やつぱりもみじが」

「いえいえ、涙末ちゃんが」

「もみじが」

「涙末ちゃんですよ！」

「もみじだよ！」

「何言ってるんですか！ 涙末ちゃんがラチカンキンとか言い出したのが原因でしょう！しかも肝心なところでへたれてわたしに頼った癖に！」

「なっ、何おう！ せっかくぼくが椅子に縛り付けてゴーモンしようとしてたのに、もみじが口出すから普通に聞くだけになっちゃったんじゃないか！」

「変態ですっ、変態プレイです！ 謝りなさい、先輩に謝りなさい！」

「なんでやってないのに謝らなくちゃいけないんだ！」

「あなたの頭の中で大変なことになった先輩に謝りなさい！」

「いいじゃないか！ 考えるだけなら犯罪じゃないんだから」

「……まあ、それはそうですね」

「でしょ？」

「そういえばわたしもときどき、おかしいことを考えることはありました」

「そうそう。誰にでもあるもんだよ」

「そうですね、問題ないですね」

何の話しか分からなくなってきたので、適当に切り上げます。

わたしはベッドに寝っ転がりました。ともかく、ちょっと気分いいです。こういうときは、お腹の調子もたいへんよろしい。

「よくやる……」

一咲ちゃんの呆れた声も、気になりません。結果オーライですから。

「あんなこと聞いて。先輩もいい迷惑だったんじゃない？」

「それは、そうかもしれないですけど。でも白ちゃんのためです」

「そうだよ。白さんのコイが、これで進展するんだから！」

「それは……そうかも、しないけど」

どこか引つかりのある顔です。まじめですねえ……。

「ところで、もう薬棚の整理は終わったんですか？」

先輩とわたしたちが話してる間、彼女、特に何も作業してませんでした。

「え？ うん」

「まだここに用が？」

ついと彼女は顔を逸らして、すこしちいさく、呟きます。

「……用というか。待ってたのよ」

「え、わたしたちを？」

「……いえ。あなたたちじゃなくて。先生を」

「ああ、そういうことですか。ご苦労様です」

「別に」

おや。ちよつと皮肉に聞こえてしまいましたかね。

「気持ちとは分らないでも、ないけど。あんまり人に迷惑、かけすぎないほうがいいと思う」

「分かってますよ。あんまり調子に乗りすぎないように、気をつけますから」

でも、白ちゃんのことですから、なりふり構ってられないこともあるのですよ。呆れられても、白ちゃんのためになるなら、べつに構わないです、わたしは。

+ + +

ちよつと早めに帰りのホームルームが終わったわたしは、保健室

に向かっています。

先輩に保健室に来てくれるようお願いしてから、二日経ちました。先輩はまだ来てくれません。白ちゃんは昨日も今日も学校に来ていますし、もう早く来てくださいという感じなのですが。

まあ、生徒会の会議とか、あるのかもしれませんが……正直何やってるのかわかりませんが、生徒会って……でも月島さんと話してる暇があるくらいなんですから、保健室に来る余裕がないわけはない、はずです。

ぐるぐる考え、はあとため息をつきながら、外を見ます。

今日も青空。こんな日に白ちゃんの喜ぶ顔が見れたら、素敵なのになあ。

とか思っているうちに、保健室に到着。

「こんにちは」

「よう、ハザ」

浅川先生が椅子に座って足を組み、コーヒーなど飲んでいます。

おいしそう。オトナの味でしょうか。

「なんか、今日は顔色いいね？」

「ええ、最近ちよつとやり遂げたって感じでして」

「ほう、何を」

「それは、秘密です」無駄に意味ありげに笑う、わたしです。

まあ、別にやり遂げてもいいんですが……先輩まだ来てくれないですし。でも呼べたことじたいに妙な達成感を覚えたのは事実です。

ベッドのカーテンをめくると、いつものように涙未ちゃんがすやすやと、ねこのように体を丸めて寝ています。枕元に置かれたためがね。素顔の寝顔。

わたしはすこしの間、彼女の顔を見つめました。

寝顔はかわいいんですね、このひと。

そのせいか意外と男子に人気があります。寝すぎなところが萌え系らしいです。謎。だめな子ほどかわいいという理屈でしょうか。

当の本人は男子苦手なのに、皮肉なことです。

ともかく、わたしが寝られません。

今日も突き落とそうとしてやりましょうか。……でも、あんまり毎回でもかわいそうかも。

仕方がないので、わたしは涙未ちゃんの隣にもぐりこみました。

狭い。でも保健室ベッドは比較的でつかいので、無理なほどではないです。タオルケットを整え、二人のからだにかかるようにします。はあ、やっぱり、保健室のベッドは落ち着きます……。

秋のすこしやさしい空気とか。

放課後の微妙な解放感とか。

静かな保健室に響く、涙未ちゃんの寝息と先生が書類をめくる音とか。

ときどきここにやって来る、太った白ねこがなー言い出すに至って、わたしの意識は急速に眠りへと落ち込んでいきます。この、うとうと感が、最高に気持ちいいです……。

しばらく夢とうつつの境を漂っていると、扉が開く音がしました。続いて、先生と、女のこの声。

「いらっしやい。調子はどう？」

「大丈夫です……すいません、いつも」

「いいよ、気にしないで。ゆっくり休んでいって」

「はい」

とてもとても、聞き覚えのある声でした。

カーテンをめくってみれば、果たしてそこにいたのは、一咲ちゃんに寄り添われてすこし儚げに歩いてくる白ちゃんでした。肌は白く、制服に包まれた細い手足は誰かに支えられていなければ自分自身の重みで折れてしまいそう。

もちろん、実際には、そんなことはありませんけど。

「あ、さくらちゃん。こんにちは」

弱々しく微笑んで、挨拶です。

「今日はせかいが明るいね」

確かに天気よくて、きもちいい日です。

「こんにちは。調子、どうですか？」

「うん、いつも通りだよ」

一咲ちゃんにゆるく支えられつつ、白ちゃんはいつものベッドにあがって、タオルケットを羽織りました。

「ありがとう、一咲ちゃん」

白ちゃんのお礼に、声には出さず、首肯だけで返事する一咲ちゃん。すこしはにこりとすればかわいげが出ると思うんですけどもね。余計なお世話と言われるでしょうが。

白ちゃんと、わたしと、涙未ちゃんと、一咲ちゃん。それと先生の計五名が、だいたいいつも保健室にいるメンバーです。わたしは密かに、この集まりを保健室部と呼んでいます。顧問はいますが、でも生徒数が五名を割っているので保健室同好会というべきかもしれません。

合ってるような、間違ってるような。まあいずれにしても、活動内容が謎過ぎますが。

白ちゃんは、こんこんとたまに咳をしつつ、ベッドに横たわってぼうつとなります。

「最近はこちらと、日によって気温の落差が激しくていやですね」

「そうだね……夜寝るときなんか、とくに気を遣うよね」

「うん、夜暑くて朝寒かったりすると、危険ですね。うっかり布団剥いで寝ちゃった日にはもう、一発でアウトですよ」

「実はこのあいだ、その罨にはまっちゃって」

「ああ、そうだったんですか。それでお休みを」

「うん。私、ちょっと寝相悪いみたいで」

「保健室だと、それでもなかった気もしますけれど」

「家と学校だと、ちよつと違うみたい」

寝る場所によって寝相が違うですか。まあ、落ち着く場所で眠っているときのほうが、からだがよく動くのかもしれない。わたしとしても、学校のトイレと家のトイレではずいぶん勝手が違いますし。

「お互い気をつけましょうね……」

「うん」

病弱トークで、わたしたちの絆は深まります。

「この季節は、普通の人でも体調崩しやすいからねえ」

浅川先生が話に加わってきました。

「まあ、きみらは年季入ってるみたいだから、ある程度は大丈夫だと思っただけ。体調崩しやすいと、普段から気をつけるからね……どっちかというところ、そこで寝こけてる相坂のほうが、あたしなんかは心配だよ」

横向きに寝てるせいでだれ垂れ流しの涙末ちゃんは、何にもかけないで眠っています。今はいい気候なので問題ないでしょうけども、わたしや白ちゃんだったら怖くてちよっと、できないですね。

「まあ、涙末ちゃんは風邪ひかないですよ、きつと」

「どういう意味だい、それ」先生、苦笑い。べつにナント力は風邪引かないって言いたかったわけでは。

白ちゃんはちよっと首をかしげてます。意味がよくわかっていないようです。そのほうがいいかもしれませんけども。

「元気が一番だよ……」

実感のこもった、眩きです。安らかに寝ている涙末ちゃんを、白ちゃんは何か眩しいものを見るような、うらやむような視線でみています。

気持ちには、わからないでもないです……というか、元気が一番だというのは諸手を挙げて同意するんですが、涙末ちゃんみたいに寝てばかりというのはいかななものかと思っています。

「でも心配だから、ちゃんとタオルケット、かけてあげようよ」

白ちゃんは優しいですね。

そう言われたら、わたしとしては従わざるを得ません。……とゆーか、元々わたしが奪ったんですけどね。タオルケット。すると、

「うにゅ」

へんな声を出して、涙末ちゃんが目覚めました。

「……呼んだ？」

「呼んでないです」

「そつふあああああ」途中から巨大なあくびに吸収されました。
「……夢と現実が、ごつちゃになってるんじゃないですか？」

「うーん……そうかも」ぼけっと、自らが作り出したよだれの染みを見詰める涙末ちゃん。

「どんな夢を？」

「えつとね……」よだれ放置ですか。

「なんか、川があつて」

「ええ」

「お婆ちゃんが、向こう岸からぼくを呼んでた」

三途ドリーム。眠り深すぎですし。

「で、そつち見てたら、後ろから呼ばれたような気がね？」

「はあ……それは、よかつたですね」

「あ、信じてないね？ 本当のことなのに！」

「はいはい、お花畑が見えたんですよね？」

「誰が電波だ！」

言つてませんし。なんで怒られなきゃならないんですか。まあ白ちゃんが差し出したティッシュを取つて口まわりのよだれを拭きながらでは、ぜんぜん全く怖くないんですけどね。

そんなわたしたちを、一咲ちゃんは、ちよつと離れたところに座つて見たり。あるいは視線をはずして、外を見たり。彼女はいつも、そんな感じです。白ちゃんを連れてはくるんですが、その後はわたしたちの話しに加わるわけでもなく、帰るでもなく、しばらく保健室に留まります。わたしたちより、先生と話してる時間のほうが長いかもしれません。

さて、そんないつもの保健室風景なのですが、わたしは先輩の件でそわそわしているわけです。

まさか、忘れてるわけじゃ、ないですよ。いやあの先輩に限つ

てそんな。それとも無自覚なじらし上手なんでしょうか。いい加減にしないと、こっちから乗り込んでいますよ。

とか、考えていると。

がらりと、保健室の扉が、開きました。

第六話

「失礼します」

穏やかだけれど、よく通る低い声。

「いらつしやい。おや、夕足？ 珍しいね、ここに来るのは」
正しく詰襟に包まれたからだはすこし細身で。

「ええ、色々とありまして」

その整っていないくもない顔に、優しげな表情を浮かべている。
わたしはほつと、息を吐きます。

ようやく、来てくれました。

「夕足……せんぱい？」

白ちゃんが、隣で、ちいさく呟きました。

そのときの、白ちゃんの表情を　わたしは、きっと、忘れません。
ん。

驚きに目をいっぱい見開いて、白い頬を桃に染め、口もとに手を当てて固まっている。わたしの位置からなら見えます、その手の裏側で、彼女の口が、うれしさにゆるんでいるのが。いつもすれ違いでしかなかった好きなひとが、いま目の前にいる「幸運」。それだけで、白ちゃんは、しあわせになれると分かります。

そう、これに比べれば、いつもわたしたちに向けて先輩のいいところを話していた白ちゃんの表情など、まったくしあわせの内に入りません。こんなことなら、もっと早く同じことをしていればよかったです。すこしだけ、後悔しました。

「こんにちは。来たよ」

「ありがとうございます」

そんなやりとりをするわたしたちを、白ちゃんはすこし怪訝そうな様子で見えています。

「こんにちは、衣花さん。からだの具合は、どう？」

「はっ、はい。だ、だいじょうぶです」

先輩は白ちゃんに挨拶します。自分がここに呼ばれた理由を心得ているのか、それとも自然な流れとしてか。どっちは、分かりません。

「えつと……先輩……どうして、ここに？」

きよろきよろと、わたしや先輩の間に視線を彷徨わせながら、白ちゃんは何が起きたのか分からないみたいなの顔をしています。

「先輩は、白ちゃんと話しにここに来てくれたんですよ」

すこし得意げに説明する、わたしです。

「えつ？ ……えつ？」

あ、いいです。嬉しいけど信じられないみたいな、その顔。

「ほら、遠慮なく。いろいろ、話したいこと、あるですよね？」

「えつ……うん……でも」

余りの急展開に、ついていけてなさそうです。あんまりたくさんのひとが一度に扉から出ようとすると、詰まるのと同じ理屈でしょう。話したいことが多いけど、どこから始めていいか分からないみたいな。

「いいお友達だね」

すると、先輩のほうから、声をかけてくれました。

「あつ、はい」

白ちゃんは、わたしを見て、涙末ちゃんを見て、一咲ちゃんを見ました。ゆっくりと。

「そうですね……さくらちゃんたちが居なかったら、私、寂しくて泣いてたかも。うさぎさんみたいに」

ふふつと笑って言う、白ちゃん。ちょっと冗談めかした態度でした。

「大げさですねえ」わたしも笑い返します。

「なに、うさぎって」涙末ちゃんもわたしに同じ。「白たんはかわいいなあ」

ただ、意外とそれは冗談でもないかもしれません。白ちゃんの、中学時代の話聞いた身としては。あと、わたし自分の身を省みて

も。

「それに、一咲ちゃんがいつもついてきてくれるから」

「……私は、保健委員だから」

やや早口の返答。不意打ちされたスズメみたいな顔です。

妙にうるたえた一咲ちゃんの態度を見て、白ちゃんまで慌て始めました。

「って、何言ってるんだろう、私……いますごく恥ずかしいこと、言ったような」

ちよつと俯く白ちゃん。でも元々顔が赤くなっていたので、見た目にはあんまり変わりません。

「でも、そんなふうに思えるひとがいるって、いいことだと思うよ」先輩はあくまで穏やかです……穏やかすぎというか。このひとも、たいがい動じないですね。白ちゃんが恥ずかしいこと言ったというのは、事実だと思うんですけど。

「あつ、あのっ！」

そんな雰囲気を払拭しようとしてか、白ちゃんがすこし大きな声を出しました。

「もう、ずいぶん前のことになっちゃいましたけど。あのとき、助けてくれて……ありがとう、ございました」

「ううん、いいんだよ。困ってるときはお互い様っていうし」

「でも、ちゃんとお礼、言えなかったから……」

「そんなに気にすることないよ。そんなに大したことも、してないし」

「大したことだったと、思いますよ……あつ、さくらちゃん、ちよつとー！」

そろりそろりと白ちゃんベッドのカーテンを閉めようとしていたわたしの手を、白ちゃんが掴みました。

「あれ、なんですか？」

「何してるの？」

「いえ、二人きりがいいかなあと」

カーテンが囲う、二人の世界を演出してあげようと思ったのに。

「え、うん、ちょっと……うん……」

困ったように、口をあうあうさせる白ちゃんです。

「まだ、勇気が足りませんか？」

「う、うん…… もうちょっと、一緒に居てほしいな」

そんなふうをお願いされたら、聞かないわけにも行きません。

「分かりました。じゃあ、もうちょっとだけ」

とりあえずカーテンを脇に押しやります。

「ぼく、白ちゃんと先輩の馴れ初め話が聞きたいなあ」

涙未ちゃんが寝つ転がったまま、そんなことを言います。そういえば、このひとはまだ聞いてなかったかもしれない。わたしは、聞いたことがあるんですけど。

「そうですね、わたしも聞きたいです」

先輩がいます、また違った印象になるかもですし。

「えっ、うん、」

白ちゃんはちょっと先輩を気にしたふうです。話してもいいですか、なんてお伺いを立てたりして。先輩は大らかに承諾していますが、わたしのにはだめって言うても話させちゃうつもりでした。

「えっとね……」

そうして、過去を見るように視線を上向かせて、語り始める白ちゃんです。

「入学して、すぐの頃にね」

「うんうん」

「ちよっと、学校の中で気分悪くなっちゃったことがあって……」

「ふんふん、それで？」

「これ、ちよっと静かに聴きなさい」小うるさい涙未すけを軽くはたいて黙らせませす。

「ひどいなもみじ……」涙目で訴えても知りません。

「それで、トイレとかここに行く元気もなくなっちゃって、廊下で私、もどしちやっただの。」

でも、気持ち悪くて、目の前はぐるぐるして……、掃除しないといけなかったんだけど、どうしてもダメで」

わたしにも、似たような経験があります。

できれば自分だけでどうにかしたい、けど自分ひとりではどうにもできないとき。誰も助けられなかったりすると、いつそ泣きたくなります。

いつも気をつけてますけど、どうしても避けられないときがあつて。

「そのとき助けてくれたのが、先輩」

先輩はすこし照れているのか、あさつての方向を向いていました。

「僕はただ、衣花さんを保健室に連れていっただけだよ」

「でも、私が戻したもので制服が汚れるのも、ぜんぜん気にしてなかったじゃないですか。それに、跡を掃除してくれたのも、先輩なんですよね？」

「うん……それは、そうだけど」

遠慮がちに受け答える先輩。

先輩自身は大したことないと言いますが、実際、見ず知らずのひとにそんなことができるのって、ずいぶん大したことだと思います。「ついでに言っと、汚れた衣花の顔とか手を拭いていったのも、夕足だよ」

「先生、それは」おっと、先輩がすこし動揺しましたよ。

「いいじゃないの、悪いことじゃないんだし。私がやるって言つたのに、ついでだからって言ってやってつたんだよね。もうね、こいつ惚れてるんじゃないか？ っていうくらいの献身っぷりでねえ」

言葉が炸裂するというのは、こういう感じでしょうか。

白ちゃんの顔が真っ赤に染まり、涙末ちゃんは何やら裏返った奇声をあげ、先輩は今まで見た中で最大級にうるたえました。

白ちゃんの頭のとっぺんから、湯気が見えます……。

「まあ、それは冗談だけど」

今更訂正しても、白ちゃんを夢の世界から引き戻すには足りませ

んよ。

「先輩、カツコイー」

涙末ちゃんの言葉にも、今回ばかりは同意です。そんなふうにされたら、わたしだってどうにかなってしまつかも。いえ、もしもの話ですけどね？

ふつとオーラを感じて、わたしは保健室の端を見ました。

そこにいるひと、一咲ちゃんは今にも静かです。そっばでも向いて話し聞いてないのかと思いきや、意外というか、先輩を見ていました。

ガン見です。

睨み付けてる、と言ったほうがいくらいです。

なんででしょうね、これは。ちよつと悔しそうにも見えます。白ちゃんを助けた云々の話をしているので、保健委員としてのプライドとかそんなものでも、あるんでしょうか。

彼女に関しては、ありそうな気も、しますが……。

しばらく見ていると、向うもこっちに気付いたようで、視線をついと逸らされました。なんか、あやしいです。

視線を戻せば、涙末ちゃんがいつのまにかむこうのベッドに飛び移って、白ちゃんの頭をぐしゃくしゃしていました。テンションあがりすぎたみたいで、白ちゃんに劣らず、顔真っ赤です。

わたしも何だか楽しくなって、ふふつと笑いました。

楽しくないわけ、ないです。白ちゃんがこんなにしあわせそうにしているのに。

「うへああ、涙末ちゃん、せかいが回るよお」

くるくる回る、さくらんぼのような白ちゃんの顔を見て、先輩を呼んで本当によかったなあと思うわたしでした。

+ + +

先輩も、もう何度か来てくれますが、

「あ、あの」

「うん？」

「ええと、ですね」

「うん」

「その……、ご、ご趣味は……なんでしょうか……」

お見合いですか。

未だに力たい、白ちゃんです。

「ううん、そうだね……」

すこし考え込む先輩。

「あんまり趣味らしい趣味もないけど、本を読むのはけっこう好きかな？」

「ほん」白ちゃん、ぽやつと鸚鵡返し。

「どんな本を、読むんですか？」

「あんまりこれって言うのはいないけど、たまに本屋に行つて、話題の本コーナーにあるやつとか。あとは何となく題名が気に入ったとか、表紙が格好いいとか、そういう大したことない理由で決めるよ」

「文学とかですか？」

先輩がとつぜん文学青年に見えたので、わたしはそう聞いてみました。

「いや、どっちかというと娯楽小説みたいなのが多いかな。文学も、読まないでもないけど」

そう言えば、月島さんとも何かのお話の話しをしていましたね。あれはドラマじゃなくて、もしかして小説の話だったんでしょうか。……でも話してるのが月島さんだったから違つかも。彼女、本とか読みそうには見えませんし。

「衣花さんは本なんか、読む？」

「えっと、私は」ちよつと残念そうな表情で、「漫画くらい……かな」

「僕も漫画は読むよ」

微笑む先輩に、すこしほっとした様子の白ちゃんです。

「どんな漫画を読むの？」

「ええと、少女漫画が多いと思います。ふつうの女のが、ちょっと幸せになるようなお話とか？」

シンデレラ系でしょうか。

「ふつうで、ちょっと憂鬱な毎日を過ごしてる女のが、ある日素敵な男性に出会って、色々あるけど最後は幸せになるような話？」

「そうそう、そんな感じです。男のひとだけじゃなくて、誰か素敵なひとに会って……幸せになった、っていう瞬間があるじゃないですか。開けないままに枯れかけていた可憐なお花が、一気にぱあっと咲き誇るような……せかいの開けるシーンが、すごいすきで」

「衣花さんって面白いね」

先輩がきゆうにそんなことを言うものだから、白ちゃん目をぱちくりさせています。たぶん白ちゃんの詩人部分を指していると推測。先輩、それたぶん天然です。

「でも、いいよね、そういうの」

その言葉で、白ちゃんの頬がすこし赤みを増しました。共感してもらえて嬉しそう。

「先輩は、こういうシーンがすき、ってありますか？」

「そうだね……」

ちよっと考え込む様子の先輩。

「……あ、手紙」

「手紙？」

「うん。最近ちよっといいなって思ったんだ」

「メールですか？」

「いや、紙に書いて送るほう。ちよっと前の話しなんだけど」

そう前置きして、先輩は手紙に関わる本の内容について話し始めました。

「その物語は、二人の女の子の友情を描いたものなんだ。片方は元気な感じで、もう一人は病弱な女の子」

病弱、という単語に思わず反応してしまうわたしです。

ふと見れば、白ちゃんの様子もすこしだけ真剣さを増していました。いえ、先輩相手なので元々真剣ですが、より雰囲気が鋭くなったというか……。

「二人は色々あつて親友つて言えるくらいに仲良くなるんだけど、ある日けんかをしてしまう。お互い本当は相手のことが好きなんだけど、でも口に出しては伝えられない。素直になれないんだね」

「見ていてやきもきしそうなお話ですね」

思わず茶々を入れてしまうわたしに、先輩はゆるく、そうだねと相槌を打って先を続けました。

「けつきよく仲直りできないまま、病弱な女の子の容態が変わって、専門的な治療ができる遠い病院に転院することになるんだ」

「そこで、お手紙を？」と、白ちゃん。

「うん、そう。遠く離れてしまった後で、病弱な子から、その親友のところへ手紙が届くんだね。そこに、ごめんなさい、ずっと親友でいてね、って書いてある」

手紙を読んで泣き出す女の子の姿が目には浮かぶようです。

「今だったら、メールでやりそうですね」

「うん……」白ちゃんもわたしと似たようなことを想像したのか、すこし目が水つばい気がしました。「でも、メールもふつつの会話の延長つていうかんじだし、案外むずかしいかも」

「そうだよな」先輩はそんな白ちゃんの様子を、満足そうに見ています。「手紙だと、ふだんとは違った口調……というか文体になるし、想いが伝わりやすいつていうのかなあ」

月並みな意見だけど、と笑う先輩です。

「時差があるつていうのも、いいのかもですね」

「ああ、そうだね。もう会えないと思つてたのに……つていうところに、不意打ちで来たら嬉しいよね」

意外と手紙にも、色々いいところがあるのかもしれない。

「でも私、文章書くのは苦手だなあ」

「……確かに、ちょっと面倒かもしれませんがね」

と言いつつ、ポエミイな物言いと文章力の関係について考えるわたし。

「まあ、手間がかかるだけに、価値があるのかもね」

先輩、ポジティブです。

でも確かに、そういうものかもですね。

それから白ちゃんと先輩は、ぽつぽつと、こんな本を読んだ、こんな話しが面白かった、と話し始めました。ときどき先輩が何かを言って、白ちゃんが一生懸命に頷きます。

先輩の話は、正直、わたしにとっては何てことのない言葉の連なりですが、白ちゃんにとってはきつと、その一つ一つが輝く宝石のような、甘い果物のような、そんなふうに思えているのでしょう……。

こういう時間が、白ちゃんにとっては、宝物であるに違いないのです。

第七話

「……で、検査の直前に飲んでくださいって言われた下剤の量が、な、なんと」

「なんと……？」

「二リットル！」

「え、えーっ!？」

「ふわーそんなに飲んだらお尻からお水が出るよう」

リアルに想像してしまったのか蒼くなる涙未ちゃんと、冗談なのか本気なのかよく分からないことをいう白ちゃん。

「出ますよお水。お腹の中がきれいになるまで飲むわけなので」

「うええ」

「大変だね、呉内さん^{くれない}」

「あれは出来れば、もう二度と勘弁してほしいですよ」

まあ二リットルも飲まなくていい種類もあるんですけどね。

というわけで何日か経っていますが、先輩は相変わらず保健室に来てくれています。白ちゃんはまだすこし緊張しているみたいですが、だいぶ慣れてきている様子。先輩を含めて今や生徒数は五、保健室同好会が保健室部に昇格する日も近いかもしれません。

「今日はあつたかいね」

先輩がふと、そう呟きました。

その通り、今日はとてもあつたかい日です。窓さえ開いてたりします。そこから射し込む光はふわふわと優しく、床を照らしています。

と、かつ、と硬いものを叩くような、ちいさな音が響きました。

「あ、ねこ」

真っ白で、すこし太り気味のねこが、開いた窓の隙間から保健室の中に入ってきました。見覚えのあるねこでした。

「この子」

ときたま保健室にやって来る子でした。保健室以外でもよく発見されているらしく、教室の中でもときどき話題になっっています。たぶん生徒がよくえさをやるので、住み着いてしまったのでしょうか。

「シロ」

「えっ？」

先輩がとつぜん白ちゃんを下の名前を呼んで、驚いた彼女は首がねじれそうな勢いで先輩のほうを見ました。

でも、先輩の視線はねこに向いています。

「あつ、ごめん。衣花さんのことじゃなくて、あの猫の名前なんだ」
「あつ、そ、そうだったんですか」

そう言いながら、胸に手を当てる白ちゃん。そりゃ、ときどきしますよね。

「生徒会ではそう呼ばれててね。野良だから、人によって呼び方が違うみたいなんだけど」

なるほど。猫と同じ名前というのも、何だか……。

前に犬みたいだな名前だと言って気にしていたことがありましたね。確かにペット系の名前ですけど。個人的には、かわいくて良い名前だと思うんですが。

ねこのシロは、にゃーにゃーみーみー言いながら保健室内部を闊歩しています。

「何がしたいんだろうね、この猫って。たまに来るけどさ」

「遊んで欲しいんじゃないですか？ ほら涙末ちゃん、あなたならうまく遊べますよきつと」

「どういう意味かな、それ？」

「いえ別に深い意味はありませんことよ？」

とか言ってる間に、シロは帰って行きそうです。入口にした窓の隙間のほうへ、ゆるゆる戻る素振り。

いつもはそれを、黙って見送るだけでした。

ところが今日は、先輩が一言。

「外、行ってみない？」

そんな提案は、すごく久々に聞いたかもしれません。

今まで、そんなことを言い出すひとは誰もいませんでした。それはそうです。わたしと白ちゃんは体調に不安を抱え、涙末ちゃんは引きこもり気質というか寝てるだけだし、一咲ちゃんは黙って話を聞いているのが常でしたから。

のらねこが入ってきて、思わせぶりに歩き回ったのち外へ出ていったくらいでは、誰も外に出ようなんて言わないのです。

「天気いいし、暖かいし。シロも遊んで欲しそうだし」

先輩が何を思って、そんなことを言い出したのかは分かりませんが、ただ、そうしてもいいかな、という気になったのは確かです。

それは、たまには外もいいかなと思ったとか、ねこと遊んでみるのも楽しそうだなとか、そう言ったこともありますけど、

何より、白ちゃんが、こんなに行きたそうな顔をしていたら。

わたしには良いも悪いも、ないんです。

「よし、行こう！」

涙末ちゃんが勢いよくベッドから降りて、歩き出しました。

向かう先は、一足先にシロが到達した、保健室の窓。

「涙末ちゃん？」

「ねこのシロと遊ぶんでしょ？ 見失っちゃうよ！」

シロは窓の隙間から、外へ出て行きました。確かに、今から保健室を出て、校庭側から保健室の窓に周りこんだら見失うかもしれないですけど……。

涙末ちゃんは窓を開け放つと、よっこらせとか女のこらしくない

掛け声をあげてよじ登り出しました。そして、ひらりと向こう側に着地。保健室は一階だから、べつに危険はありません。

「相坂は元気だな」

浅川せんせの、呆れたような声。でも顔は面白がってます。

「それじゃ、わたしたちも行きましょう」

「う、うん」

わたしと白ちゃんと先輩とで、涙末ちゃんとシロを追います。――

咲ちゃんは相変わらず、不参加。ちょっと行きたそうに見えたのは気のせいでしょうか。

昇降口から表に出ると、携帯が着信。涙未ちゃんでした。

『校舎裏のほうに向かつてるよ』

「分かりました。ゆつくり行くので見張っててくださいね」

『わかったよ。何とか捕まえてるから』

あつたかい空気、青空の下。校庭で歓声をあげてる運動部のひとたちを横目に、わたしたちはねこと遊びに校舎裏に向かいます。ゆるると。

すこし後ろでは、先輩と白ちゃんが、あのねこオスなんですかメスなんですか？　なんだかメスらしいよ、なんて会話をしています。今日はせかいがふわふわしてますね、と白ちゃんが言って、先輩がうんそうだね。なんて返していたり、って先輩意味わかってるんですか。

清澄な風がかすかに吹き抜け、わたしの頬を涼やかに撫で去ってゆきました。

うーん、なんだか、気分いいですね。たまには外を出歩くのも、

悪くないです。

「あれ、涙未ちゃんどこいったんでしょ」

校舎裏にたどり着いてみれば、ねこのシロはいたんですが、涙未ちゃんがいません。

滅多に人の来ないせいか、妙に寂しい感じのする場所でした。表と違って雑草生え放題で、背の高い草むらが敷地の中まで浸食しています。

うらぶれた日陰の中にいるのは、ねこのシロだけです。

しばし三人できよろきよろしますが、見当たらず。

「ま、あのひとのことですし、放っておいても大丈夫でしょう」

「う、うん」

白ちゃんの同意をもって、わたしたちはねこのシロを取り囲みました。

「かわいい」

白ちゃんがおそろおそろ手を伸ばして、シロの頭を撫でました。シロは気持ちよさそうに、目を細めてされるがまま。にゅーとか細い鳴き声が漏れてます。

わたしもしゃがみこんで、背中をなでました。ふさふさして心地よいです。太り気味だから、いつそうそう思えるのかも。

「この猫、ずいぶん人慣れしてる感じがするよね」と、先輩。

「どれくらい前から、ここにいるのかな」

「僕が入学した頃にはもう居たよ。シロって名前も、何年も前に決まったみたい」

「そうなんですか…… だったらもう、随分長いですね」

だとしたら、この妙に貫禄あるというか、どっしり構えた感も納得いくというものです。

「猫のほうからすると、人間と遊んでやってるって気持ちなのかもしれないね」

「なるほど」

そう言われてみると、小にくらいしい顔に見えてくるから不思議です。ほれもつと撫でろ、苦しゅうない。わたしの脳内でそんな音声が再生されました。偉そうです。

でもかわいいから許す。

「お、来たね」

振り向くと、涙末ちゃんが立っていました。

「どこ行ってたんですか？ 探してはいませんけど」

「ひどいなすこしは探してよ。せっかくナイスアイテムをゲットしてきたのに」

「ナイスアタイム？」

そういえば涙末ちゃんの右手には、何やら草らしいものが握られています。

「ねこじゃらしー」

国民的すこしふしぎアニメのイントローションだけ真似しながら、

涙末ちゃんはその草を掲げました。

「ほれほれ」

そしてシロの前で、それをふりふり。

シロはびくりと耳を立てると、ねこじやらしを凝視。

「ほーら」涙末ちゃんが右に振ると、右へ。

「うーり」涙末ちゃんが左に振ると、左へ。

もう完璧にねこじやらしの虜です。

右、左、上、下、とぶんぶん振り回すことに、シロの首がぐがく揺れます。

「あはは、面白いねこれ」

偉そうにしているも、ねこの本能からは逃れられないのでしょうか。それともこのねこが、実はとくべつ子どもっぽいんでしょうか。

「おいっちにーさんし、にーにつさんし」

調子に乗った涙末ちゃんが、ねこじやらしを指揮棒にして四拍子を描き始めました。余裕でついていくシロ。がくんがくんと頭が三角形に動きます。

BPMが一五〇を越えた辺りで疲れたのか飽きたのか、シロの反応がなくなりました。丸まって睡眠の体勢です。

「ちっ、もうついてこれなくなっただか。根性のないやつじゃ」

肩で息をしながら、涙末ちゃん。何そんなに疲れてるんですかあなは。

「かつ、かわいい……っ。ねこは天使さまのおどりこだよ」

意味不明なことを呟きながら、白ちゃんが代わりに近付いてシロの喉元を撫でました。目がちょっと潤んでいます。指揮棒につられるシロの姿を見たなら、無理もないと言えましょう。

白ちゃんは本当に楽しそうに、ねこのシロと戯れています。

たかがねことのお遊び、ですけど。白ちゃんにとっては、あまり経験できないことなのです。

ねこと遊んだことなどほとんどないから、新鮮で。

たまにしか遊べないから、めいっばい楽しもうとして。

だから、白ちゃんはこんなに楽しそう。

「夕足先輩も、一緒になでませんか？」

興奮気味な白ちゃんの姿を、先輩も微笑ましそうに見えています。いいかんじです。

遊んでるときって、楽しそうにしているひとが近くにいるともっと楽しくなりますよね。白ちゃんはそういう意味では、ベストパートナーと言っていると思います。

すこしずつ陽は傾き、あたたかかった気候も、段々と肌寒いものとなりつつあります。

いま先輩が、涙末ちゃんの威嚇によって逃げ出したねこを、シロ、シロ、と呼びかけながら追いかけていきました。

「はあ……」

隣で白ちゃんが、そつとため息をつきました。

見れば、軽く胸の辺りを押さえて先輩たちを見えています。ぼやっとした目付き。

先輩がシロ、と言う度に、手がぴくりと動きますね。

「やっぱり、シロって言われると落ち着きませんか？」

「えっ、う、うん……」

白ちゃんの頬は、はつきりと赤くなっています。

「ちよっと、ときどきし過ぎて胸が苦しいかな」

あはは、と照れ笑い。白ちゃんの心臓に悪いです。先輩は罪。

「いつか、ねこじゃなくて白ちゃん自身に向けばいいですねえ」

ちよっと冗談めかして言ったのに、

「……うん」

白ちゃんが真面目に頷くものだから、わたしは逆に恥ずかしくなっていました。

「そ、そろそろ寒くなってきましたし、帰りますか？」

「あ、そう、だね。うっ」

立ち上がった白ちゃんの体が、ぐらりと、揺れました。

第八話

「白ちゃんっ？」

わたしは咄嗟に支えます。

「……ごめ……」

「いいんですよ」

白ちゃんの顔は、すっかり蒼ざめていました。
迂闊です。

よく見ていれば、もっと早く気付けたはずだったのに……白ちゃんの様子が幸せそうで、わたしとしても楽しかったものですから、油断していました。

白ちゃんの体が弱いことは、十分知っていたはずなのに。

……わたしは、だめなひとです。

「白たん……大丈夫？」

「保健室に行こう。歩ける？」

異変を察した涙未ちゃんと先輩が、戻ってきました。

「だい、じょうぶ……です。これくらいなら。すこし休めば……」
「でも」

先輩は心配顔です。

「いえ、白ちゃんがそう言うなら、すこし様子を見ましょう。歩くのも負担ですし」

「そう、だね」

白ちゃんはゆっくりと、地面に腰を下ろします。草に覆われていて、土が剥き出しになっていないのが不幸中の幸いでしょうか。

「ちょっと、はしゃぎすぎたかな」

涙未ちゃんもしょんぼりと、呟きました。

「ごめん、僕が外に行こうって言ったから」

先輩の言葉に対し、白ちゃんがゆるゆると首を振ります。

「先輩は……悪くないです」

「白ちゃん」

彼女の言うとおり、先ほどよりはすこし、顔色がよくなっていました。

「私、楽しかったですから……私は、大丈夫です、これくらいならねこのシロが寄って来て、白ちゃんの隣で丸くなりました。」

白ちゃんは微笑んで、シロの頭を撫でます。

撫でる余裕があるくらいなのだから、本当に大丈夫なんでしょう。わたしはほんと、胸をなでおろしました。……まだすこし、顔色は悪いですけども。

「今度から、もう少し気をつけるようにするよ」

先輩はそう言って、白ちゃんの前にしゃがみました。目線の高さを合わせるように。

「私のほうこそ、ごめんなさい……せっかく楽しかったのに」

「気にしないで。衣花さんが楽しかったなら、良かったよ」

白ちゃんはこくこくと、頷きます。

（もみじ）

つんつんと、涙末ちゃんが小声でわたしを突付いてきました。

（なんです？）

つられてわたしも小声です。

（今がチャンス。二人つきりにしてあげようよ）

（なるほど）涙末ちゃんにしては、ナイスアイデアです。

（では、そろそろと）

そうしてわたしたちは、こっそりとその場を後にしました。いい加減白ちゃんも慣れてるでしょうし、二人きりになる時間があってもいい頃でしょう。それに、今は若干弱っていますから、わたしたちを気にする余裕はないわけです。体調のことは心配ですが、先輩がいれば大丈夫でしょう。

怪我の功名、と言っておきましょう。

校舎裏から出て、わたしたちは保健室への道を歩きます。

「あー、これで仲良くなれたらいいね」

「そうですね。なれますよきつと。看病なんて、近付くいいきつかけじゃないですか」

「体調崩したのがきつかけっていうのも、ちょっと微妙な気もするけど」

「いいんですよ。それくらい良いことあったって、いいじゃないですか」

「そっか。それもそうだね」

「ハンデ背負ってるんですから、たまに良いことなかったら不平等です。」

「あっ」

「涙末ちゃんが、とつぜん小さく声をあげて、一瞬立ち止まりました。」

わたしも同じように、声をあげそうになりました。

わたしたちの前方に、ひとりの女子がいます。

微妙な茶髪に、健康的な小麦色の肌。視線に気付いたのか、わたしたちをすこし、訝しげに見ていました。

月島沙耶子さん。

白ちゃんの恋敵。

何だか水を差された気分になったわたしは、俯き加減で、ついと目を逸らしました。

彼女は、こちらに向かっていきます。すれ違う瞬間もちょっとこちらを気にしていたようでしたが、けっきょくは何も言わずに通り過ぎて行きました。

「……はあ。何だか、へんに意識しちゃうね」

「そうですね……」

べつに彼女の何がどうというわけでもないんですけど、そもそも彼女の纏ってる雰囲気が苦手なのと、白ちゃんのこと重なうって、どうも避けてしまいます。

「……っていうか」

涙末ちゃんがきゆうに、後ろを振り向きました。

わたしも振り返ります。月島さんは、わたしたちに見られていることも気付かず、歩き続けています。

わたしたちがやって来た方向に。

つまり、校舎裏の方向に。

「もしかしてさ」涙末ちゃんが、ごくりと唾を飲み込む音が聞こえた気がしました。「あのひと、先輩探してるのかな」

そうかもしれません。いや、きっとそうでしょう。

でなかったら、わざわざ校舎裏なんて、へんぴな場所に行くわけないです。

「どうしよう」

「……戻りましょう」

月島さんが、白ちゃんたちと会わない可能性もあります。けど、もし会ってしまったら……いや、だとしても、わたしたちには何もできないかもしれませんけど。それでも、行かなければならないような、そんな気がしました。

白ちゃんが心配です。

わたしたちがシロと戯れていた場所へ戻ると、果たして、月島さんの後ろ姿が見えました。その向うに、並んで座る先輩と白ちゃんがいて、月島さんを見上げています。

その三人が一斉にわたしたちを見たので、ちょっとたじろぎました。

場は、ちょっとした緊張感に包まれていました。

たぶん気のせいじゃないと思います。振り向いた月島さんの顔は、結構険しかったですから。

先輩は、すこし済まなそうな顔。

白ちゃんは、何が起きているのかよくわかっていないような、困惑顔でした。彼女は月島さんが自分の恋敵だということを知らないのです。

これは、もしや、修羅場でしょうか？

でも、予想に反して、そうはなりませんでしたが。
少なくとも、表面上は。

月島さんはすばやく二度、先輩、白ちゃん、わたし、涙未ちゃんの顔を見渡すと、さっと踵を返してその場から去っていきました。
何も言わずに。

「白ちゃん、大丈夫ですか？」

「えっ？ …… うん、もう体調はすっかり治ったよ」

事情のいまいち飲み込めていない白ちゃんは、すこしずれた答えを返します。

「何も言われませんでした？」

「月島さんのことなら、何も。さくらちゃんたちとほとんど同時だったから」

「そうですか」

正直、すこし意外でした。

彼女なら、もうすこし攻撃的なかんじになるのかと思っていました。文句言ったりとか。

「何か、あったの？ 月島さんと」

「いえ。何にもないですよ？ 気にしないでください」

「なら、いいんだけど……」

月島さんがすぐに戻っていったのは、確かに予想外でした。

でも、もつと意外だったのは、去り際ちらつと見えた、月島さんの表情です。

てつきり怒るのかと、思っていましたけど。

まさかあんなに 哀しそうな顔をするなんて。

「それじゃ、戻りましょう？」

「うん」

まだすこし不思議そうな顔をしている白ちゃんの手を引いて、わたしは保健室へ歩き出しました。

わずかに、胸騒ぎがします。

さっきのことで、何かもつとよくないことが起こるような気が、していました。

そういう予感に限って、当たるものなのは、どうしてなんでしょうね。

+ + +

体操服のみんなが元気に歓声をあげ、体育館の中を縦横に駆け回っています。

体育の時間。

わたしと白ちゃんは、そんな喧騒を、端っこに座って眺めています。

「ねこのシロ、かわいかったよね」

「そうですね、今度保健室に来たときのために、ねこじらしを用意するときでしょうか」

「うんそうだね、そうしよう」

基本的に、見学です。

白ちゃんが隣の組でよかったと思います。体育の授業は数クラス合同で行われますが、白ちゃんがもし四組とか五組だったら一緒になれませんからね。ちなみにわたしは一組で白ちゃんは二組です。

白ちゃんがいるから、一時間も退屈しないで済むわけです。

「うわーすごい、めちゃくちゃ跳んでるよっ」

「リアルダンク……。女の子なのに」

ここ数回の体育は、バスケットボールです。いちおうチーム組んで試合ということになってるのですが、みんなあんまり聞いてません。ちゃんとやってるひともいますけど、端っこに固まって適当にパスしたりシュートしたり、座り込んでお喋りしてるひとたちもいます。

「……む」

そんな集団のうち、ひとつがあやしげな動きを見せています。

「あ、あぶない」

何を思ったのか、ひとりの女子がバスケのゴールによじ登っています。回りを数人の女子が囲っていて、ふざけ半分にボールを投げたりしていました。上の女子も、ときどき下に向かつて手を振ったり声を返したりしているので、いじめとかではない様子。罰ゲームでもしてるんでしょうか。

「ていうか……」上のひと、月島さんじゃないですか。

白ちゃんはそれに気付いているのかどうか、あ、あぶない、とか小声ではらはらしている様子。わたしは何だか微妙な気分になります。放っておけばいいのに、とか。

そのとき、てん、てん、てんでん……、と、バスケットボールがわたしたちの目の前を転がって、開きっぱなしだった体育館の扉から外へと出ていきました。

「あーもうつめんどくさいなーっ」

ボールが転がってきた先から、どうやら受け損ねてしまったらしいクラスの子が、大声でぐちりながら歩いてきます。

「あ、いいですよ、わたしが取ってきますからー」

ちよつと気分転換したくなったのと、どうせろくにするのもない気安さから、わたしはそんなことを言いました。

「あ、ほんとに？　ありがとう葉桜！」

感謝の言葉に、軽く手を振って答えるわたしです。

「というわけなので、ちよつと行ってきますね？」

「うん」

そう言って、わたしは外に出ました。

白ちゃんをひとりにするのは、わずかな間とはいえ、ちよつと忍びない気もします。涙末ちゃんが居てくれればいいんですけど、運動ギライなので体育の時間は百パーセント学校にいないか保健室で睡眠です。健康なので、見学していると怒られるのです。かわいそうな涙末ちゃん。

っていつかボールはどこまで飛んでったんでしょね。なぜか無駄によく転がりますからね、外に出てったボールって。それで茂みの中とかに好んでダイブするわけです。人間には見えづらいところに。まこと憎々しいやつばらです。

なんて、すごくどうでもいいことを考えながら、ボールを捜し歩きます。まじ見つかりません。

見捨てられた水道の影にそやつを発見したときには、もう十分くらいも経っていたでしょう。めちゃくちゃ遙かなところまで転がってますし……。

「はあ」

思わずため息も出るとゆうものです。とつとに戻りましょう。

白ちゃんお待たせー、と心の中で呟きながら体育館の入口まで戻って来たわたしは、目に飛び込んできた光景に足を止めました。反射的に、物陰に隠れて様子を伺ってしまいます。

二人の女のこが、体育館の外で話しています。

一人は白ちゃん、そして白ちゃんの前にもう一人が立っていて、彼女をじつと見つめていました。

ただならぬ雰囲気。わたしの背筋が、ひやっと粟立ちました。それは、月島さんでした。

第九話

さっきまで、友だちと遊んでたのに……。なぜ、きゅうに。

白ちゃんは、月島さんのほづを、すこし不安そうな面持ちで見えています。月島さんのおかしなオーラは察しているけど、どうしてなのかよくわからない。そんな感じでしょうか。

いえ、もしかしたら、白ちゃんも薄々感づいているのかもしれない。月島さんの気持ちに。

「最近さ」

月島さんの声が、妙にはっきり聞こえてきます。

「先輩、あんまり会ってくれないんだよね」

「せんぱい、って」

「知ってるでしょ？　夕足先輩！」

白ちゃんの肩がびくりと震えて、目が見開かれました。

「……衣花も、なんでしょ？」

「えっ」

「すぐ分かったよ。あたしとおんなじだって。あんた、分かりやすいよね」

「おんなじ、って」

白ちゃんの声は、体育館から漏れる喧騒にかき消されそうなくらい、小さくなりました。

「おんなじって……どういうこと？」

「そんなことは、どうだっていいのっ」

自分で言ったことなのに。

でも、それが乱暴な声だったから、白ちゃんは、黙りました。

「あんたたち、いつも、保健室にいるよね。放課後」

「……うん」

「そこに先輩、連れ込んでたんでしょ」

「……連れ込んでなんて」

「一緒にでしょ！先輩がいつも放課後、保健室に行ってるのは事実。違う？」

「そう、だけど」

「やっぱり、そうなんじゃない」

悪意に満ちた、声でした。ほらみる、言わんことじゃないと。

「あんたたちがそんなことしてるから、あたしが、先輩に会えないのよ」

攻撃的な調子でした。勢いで相手を黙らせる。話し合いを拒絶して、一方的に自分の意見を押し付ける、そんな声音です。

月島さんは、怒っていました。

校舎裏で見せたような、哀しげで弱々しい雰囲気は、どこにもありませんでした。

それは、いつも元気よく教室で友達と笑いあう、活発でにぎやかな彼女のイメージに重なるものでした。静かに哀しむよりは、はつきりと怒る。そんな印象そのままに、今彼女はまさしく、自分の感情をあらわにしています。

他ならぬ、白ちゃんに。

「月島さんも……先輩と？」

「そうよ。約束して、会ってたの。でもちよつと前から、って言うてもあたし的には相当長い間だけど、付き合い悪くなっちゃって。でもそんな理由聞けないでしょ？ずつとすごい気にしてたんだから。でもようやく理由がわかってすっきりしたけどね！ある意味！」

ねちっこいです。けっきょく何が言いたいのかわかりません。分りたくもないですけど。

「まって、ください」

ようやく、わたしは月島さんの前に、出て行きました。もつと早く、行けばよかった。なのに、どうしてか、わたしは動けませんでした。

月島さんは軽くおどろいたようでしたが、相手がわたしと知るや

態度を元に戻しました。

「……呉内。^{くれない} あんたには関係ないでしょ」

「なくないです」

「何がよ」

きつと見詰めてくる、月島さんの目は、すこし怖いです。

「白ちゃんはわたしの……友達ですから」

「ハッ」月島さんは、目を逸らして、わたしの言葉を鼻で笑い飛ばしました。

「トモダチのピンチに颯爽と登場ってワケ？ 大したユージョーだね」

口元こそ皮肉に笑っていましたが、目がまったく、笑ってません。

さつきよりもずっと、おそろしい表情でした。

「そうやって関係ない話に首突っ込んで、あんた楽しいの？」

口げんかなんか、わたしはほとんどしたことはありません。こんな目で睨みつけられたら、わたしは何も言えません……。

「楽しいンだろうね。ハッ。おめでたいよね。トモダチ助けて自己満に浸るんでしょ？ あーあたしいいことしたな、やっぱり持つベキモノはトモダチダヨネって。ぜんぜん周り見えてない、自分とトモダチがよければそれでいいって考え方でしょ？ やだよね本当！」

「……そんなこと」

「じゃあどうして、あたしから先輩を取り上げるような真似するのよ！」

月島さんのものすごい剣幕に押されて、わたしは目が合わせられません。

「どうしてって、聞いてるでしょ」

「私たち……取り上げようとなんか、してないよ」

白ちゃんの声は、すこし震えていました。白ちゃんにとっては、まさに晴天の霹靂。無理ありません。

「してるよ」

「違うよ……」

「違わないよ。あんたにそのつもりがなくても、結果的にそうなるの！ わかってないだけでしょ！」

「……そんな」

「あんた、体弱いんだよね」

わたしは、俯かせていた顔を、あげました。

彼女は、何を？

「大方、それをダシにして先輩の同情誘ったとか、そんなんでしょ？」

なっ。

「先輩は優しいからね。そんなふうに攻められたら、断れないよね、ぜったい」

何を……言ってるんですか。このひとは！

「そんなわけないでしょう！ 白ちゃんが、どれだけそのことを気にしてるか」

自分でもびつくりするくらい強い声が出ました。月島さんは、すこしだけびつくりした様子でしたけど、すぐに元の、攻撃的な表情に戻って反論しました。

「……どうだか。口では何とでも言えるしね。自分でも卑怯なテ使ったって、自覚あるんじゃないの？」

「何を……！ 卑怯なことなんて！」

「そういえばあんた、相坂といっしょに屋上近くにいたことあったよね。ひよつとして、覗いてたんじゃないの？ あたしたちのこと」
心臓を突き刺されたような気がしました。確かに、彼女の言うとおりです。

でも、わたしは、そこで黙るべきじゃなかった。

「……フン」

つまらなそうにわたしを一瞥すると、月島さんは白ちゃんのほうを見ました。

「……だいたいさ」

白ちゃんはかわいそうに、蒼い表情で月島さんを見えています。

「あんたが先輩と付き合えたとしてもさ」

そのとき月島さんはわたしに背を向けていて、だから、わたしには彼女の表情は見えませんでした。

「体、弱いんですよ？ 体育なんかぜったいできないくらい。毎日保健室行ってるんだし。そんなんで、デートとかまともに出来るわけ？ できないでしょ？ 行ったとしても体調崩して、先輩に迷惑かけるのがオチでしょ？」

ねえ。そんなんで、先輩は幸せって言えるの？ 楽しいことろくにできないで、あなたの世話ばかりで。それでちゃんと付き合ってるって言えるの？

ねえ、どうなのよ？」

な。

な、な、な、なっ！

何を言ってるんですか、このひとは！

白ちゃんの、

白ちゃんの気持ちも、知らないで！

「っ！」

きゆうに自分が、二人に別れたような感覚でした。

ひとりのわたしは手を振り上げ、月島さんを叩こうとしています。もうひとりのわたしは妙に冷静に、その様子を観察しています。

体の主導権は、月島さんを叩こうとしているわたしに、ありました。

冷静なわたしは思いました。あっ、叩く　ひとを、叩いてしま
う。

そしてまさに、上げた手が振り下ろされようとしたとき。

手首が、誰かに掴まれました。

はっとして振り返ると、そこには険しい顔をした　、

「一咲……ちゃん」

一咲ちゃんはわたしに向かってすこし首を振ると、手首を放して、

月島さんの前に進み出ました。

「な、何よ」

月島さんが、一咲ちゃんを睨みます。でも声の調子はすこし弱まっていた。一咲ちゃんがどんな顔してるのか、わたしからは見えませんが、そうとう怖い顔をしてるのかもしれない。

「白は好きで体弱いんじゃない」

とてもしずかで、低い声、でした。

いつも静かに語る一咲ちゃんですが、今のこれは、とりわけ風いだ声。

意志の力で、感情を抑えた声です。

「謝って」

「……何を」

「謝って。白に。さっき言ったこと」

月島さんに、迷いが現れたようでした。視線を揺らめかせ、白ちゃんのほうをすこし見て、また一咲ちゃんを見ます。

でも、彼女の答えは。

「……いやだよ。なんであたしが」

「謝る気、ないの？」

「ない。何度も言わせないでよ」

「まだ、白に何か言うつもり？」

「話、まだ終わってないからね」

「……そう」

一咲ちゃんは、ふう、とちいさくため息をつきました。そして。

一咲ちゃんは、予想外の一言を放ちました。

「先生！」

きゅうに振り返ると、体育館の中に向かって、その声を張り上げます。

「なっ？ あんた！」

月島さんが色めきたって立ち上がります。

どうした、とか言いながら体育の先生が小走りで駆け寄ってきます。

「月島さんが、捻挫したみたいで」

「なっ」

「だから、保健室連れていこうと思うんですけど」

「何言ってるんだよ！ あたしは」

月島さんの言葉を遮るように、一咲ちゃんは素早く、彼女を肩で支えるような体勢に移行しました。

「ちよっ！ あたしは何ともないってば！」

「いえ、見た感じ腫れてましたから」

一咲ちゃんは真顔で、大嘘をついてのけます。

体育の先生は、その言葉を信じたようです。おそらく、一咲ちゃんが真面目な保健委員であることが効いているのでしょう。優等生の立場を、最大限に利用した行動です。

それとも、案外、本当にケガしてたんでしょうか。……月島さん、さっきおかしいことしてましたし。

「じゃあ、行ってきます」

頼んだぞ、と言ってから、体育の先生は去って行きました。

「あんた……」

月島さんが、恨みのこもった視線で一咲ちゃんを睨んでいます。

一咲ちゃんはそれをものともせず、月島さんを連行していきました。

……一咲ちゃんに、感謝です。

彼女が来てくれなかったら、わたしたちは好き放題に言われて、どうなっていたか分かりません。

無愛想でも、わたしたちの話しに滅多に入って来なくても、一咲ちゃんは、確かに白ちゃんを大切に思っているんです。だからこそ毎日保健室に付き添って来てくれるし、連れて来るだけじゃなくて、その後も保健室に留まっているんです。

普段は言葉すくなな一咲ちゃんは、まるで、白ちゃんの守護天使

のようなひとで。

肝心なときには、必ず助けに来てくれるんです。

彼女のお陰で、当面の危機は去りましたが、

「……白ちゃん。大丈夫ですか？」

さつきから俯いて、一言も喋らない白ちゃんが心配です。

どう考えても、月島さんの言葉は酷すぎます。体が弱いから、先輩と付き合うな？ そんなばかな話が、あつてたまりますか。体弱かったら幸せになっちゃだめなんですか？ そんなはず、ないです。絶対に。

でも、白ちゃんは……。

「……さくらちゃん」

白い顔で俯いたまま、細い細い声で喋りだした、白ちゃんは。

「私……。先輩のこと、好きでいちゃ、いけないのかな」

「え？」

「そんな資格、ないのかな」

「……ごめんなさい、一咲ちゃん。」

どうやら、すこしだけ、遅かったみたいです……。

いえ、それを言うなら、わたしがもっと早く出ていっていけば。

そしてもっとうまくやって、月島さんがへんなこと言うのを阻止できていけば。

「そんなこと、ないです。月島さんの言うことなんか、気にしちゃだめです」

「でも、月島さんの言ってることは、正しいと思うんだ」

「そんなこと」

白ちゃんは、わたしの言葉が聞こえてないみたいに、喋り続けま

す。
「私は体が弱くて、すぐ体調崩して、だから外はちゃんと歩けない。すこしはしゃいだけで気分が悪くなって……この間、ねこのシロと遊んだときみたいに」

「白ちゃん……」

「そつだよね。私なんかが、先輩のこと、好きになっちゃいけないよね……。月島さんの、言う通りだよ。……あはは」

白ちゃんは、笑ったような声をあげました。

とても乾いた　笑っているような、かなしい声。

それを聞いたわたしは、強烈に思いました。

何か、声をかけたい。

慰めてあげたい。

白ちゃんは先輩を好きでいてもいいんですと、分かせてあげたい。

だけどわたしは、何も言うことができませんでした。

何故なら

わたしも、少しだけ、

白ちゃんの言葉は正しいと、思ってしまったからだと……　思います。

認めたくない。ですが、わたしも保健室に通う身。体調崩すことなどしょっちゅうで、他のひとに迷惑をかけた経験など、数え切れないほです。

だから、白ちゃんの言葉は、わたしにとっても他人事とは言えないんです。

あるいは、今はそんなこと無視して、訴えるべき場面なのかもしれません。白ちゃんは先輩を好きでいてもいいんだと。体が弱いことなんか関係ないんだと。

でも、わたしには、どうしてもそれができませんでした。

そんな、自分でも信じていないことなんか、言えませんから。ましてや相手は白ちゃん。嘘塗れの慰めなんて通じないでしょうし、したくありません。

でも……。

嘘塗れの慰めと、何も言わないことでは、どっちがマシでしょうか？

今のわたしには、分かりませんでした。

第十話

「ねえ、白たん、何かあったの？」

白ちゃんはあれ以来塞ぎこんでしまい、三日経った今日にはとうとう欠席してしまいました。

涙末ちゃんはずっと気にしていたようでしたが、白ちゃんの前では聞くに聞けず、いなくなった今になってようやく問い質せた、というわけです。

「ええ、ちよつと」

わたしは、月島さんとのことを涙末ちゃんに話しました。

「な……。どんだけ……」

真顔で、涙末ちゃんは愕然としました。

いつもへらへら笑っているか、眠そうな顔をしている彼女ですが、ときどきこんなふうにとても真面目な顔をします。

白ちゃんの一大事は、涙末ちゃんの真面目モードを発動させるには十分でした。

「酷すぎない？ 月島サンさ」

「そうですね……」

涙末ちゃんは、怒っています。気持ちはよく分かります。分かりますが。

「もみじはそんなに、怒ってそうじゃないね」

「ええ……まあ」

「悔しくない？ 好き放題言わせてさ」

「いえ、月島さんの言い方は確かに酷いですけど」

「じゃあ、どういうことなのさ」

「それよりも、今は白ちゃんに元気出してもらわないと……」

ふっと、涙末ちゃんの顔から怒気が抜けて、かわりになしげな表情になりました。

「……そだね」

「涙末ちゃんも、知ってますよね。白ちゃんが中学時代、ずっと一人だったこと」

「うん……」

白ちゃんの体の弱さは、今に始まったことじゃありません。ですから、中学時代も当然、今のように保健室常連という境遇でした。ですが、中学時代には、今のわたしたちのような友達はいなかったそうです。

ついでに、保健室の先生もいまいちやる気に欠ける人物だったようです。

白ちゃんは、とても、寂しい思いをしていたと聞いています。

「ようやく、幸せになれそうだったのに。絶対放っておけませんよ」

「そうだね……」

「このままだと、白ちゃん、もう一生恋なんて出来ません。何かなんでも、元気付けてあげなければ」

「うん」

涙末ちゃんは、力強く、うなずきました。

わたしたちにとって、白ちゃんは無二の大切な友達です。

わたしも、白ちゃんと同じで、中学時代には孤立してました。お互いが、高校になって初めてできた、友達同士なんです。

わたしは忘れません。白ちゃんと、初めて会ったとき、いきなり腹痛を起こし、憂鬱で仕方なかった入学式。保健室で出会えた、わたしと同じ女のこのことを。

それは、涙末ちゃんも同じみたいです。

彼女の場合は、中学時代不登校気味だったみたいですけど、けっきょく友達がいなかったところはわたしたちと一緒にです。

今でも半ば、不登校みたいなものですが……。

ああ、もしかして。実現不能な皆勤なんてただの口実で、じつは保健室に来ることこそが彼女の登校目的なのかもしれません。

「で、どうしよっか」

「そうですね」

わたしは思案します。でも、ここ数日ずっとそればかり考えていて、それでも答えが出なかったのですから、すぐには分かりません。

そこに、涙末ちゃんの提案。

「先輩に慰めてもらうのは、どう？」

「うーん」

わたしの頭の中で、白ちゃんの声が再生されます。

私、先輩のこと、好きになっちゃいけないのかな

「……逆効果じゃないですかね。いま、白ちゃんの気持ち的には、むしろ先輩は避けたいんじゃないですか？」

「そうかもしれないけどさ。でも先輩が言いって言えばいい話ですよ？」

「そう、ですね」

涙末ちゃんの言うことには、一理あるような気はしました。

気はしたんですが、すぐに「ゴー」というわけにもいかない気がします。

「でもそれって、先輩が白ちゃんのことをOKするのが前提になりませんか？」

「そうかなあ？ そうでもないと思うけど」

「中途半端な優しさは、逆に相手を傷つけると言いますよ？」

「……むう」

先輩に慰めてもらって白ちゃんが復活し、それでも先輩的には白ちゃんNG、ではあまりに白ちゃんがかわいそうです。

「正直オーケーみたいなもんじゃないのって思うけどね。あの態度だと」

「まあ、そうかもしれませんけどね……」

涙末ちゃんが言うことはもっともですが、どうも引かかるものがあるわたしです。

「乗り気じゃない？」

「……いえ。あんまりいい方法も思いつかないですし、お願いくら

いしてもいいかもです」

それもまた、わたしの本心です。涙未ちゃんの提案を断る、はっきりした理由があるわけでもなし。何もしないよりはいい、と思いました。

「じゃ、行ってみよ。生徒会室のほうにいるかな？」

先輩は、すぐ見つかりました。

わたしは、自分が一体何に引っかかりを感じていたのか、知るこ
とになります。

「……やっぱり、だめです。行きましょう、涙未ちゃん」

「……うん……そだね」

わたしたちは即決で踵を返し、保健室に戻りました。
歩み去るわたしたちの、遙か背後には。

楽しげに会話する先輩と、

月島さんの姿が、ありました。

「何なんですかつあれはっ」

苛立ちのまま、わたしはベッドにダイブします。

「白ちゃんがたいへんだって言うのにつ」

「月島サンのほうがいいのかなあ、先輩的には」

「何言ってますか白ちゃんのほうがいいに決まっていますし！」

「う、うん、ぼくもそう思うけどさあ」

わたしは枕でばふばふ、空気を叩きました。

「だいたい煮え切らないんですよ、あのひとは！」

「た、確かに……」

「あの人が最初からはっきりさせてれば、こんなことにはなりません
でしたし！」

「それは、そうだね……」

「悪いのは先輩です！」

「そうだ！」

「断固、断罪ですっ！」

「ダンザイだ！」

拳を振り上げ、喚くわしたち。

浅川せんせに胡乱な瞳で見られるに至って、ようやく冷静になりました。

「……ふざけてる場合ではありません」

「……そだね」

少し座る姿勢を変えて、頭を冷やします。体温にあっためられていないシャツが、おしりに心地よいです。

「ていうか、誰が悪いのかって言えばさ」

涙末ちゃんはタオルケットを抱き締めました。手持ち無沙汰だと、何かを抱えたくりますよねえ……。

「そもそも月島サンが悪いんだから、あのひとに謝らればいいじゃない」

「……それは、ちょっと」

「そう？」

「あのときの剣幕からすると、彼女がそう簡単に謝ると思えませんし。それに、今更謝ってもらったところで、白ちゃんが元気出してくれるとは……」

「ああ……そうかもね」

白ちゃんが今のようになったきっかけを作ったのは確かに月島さんですが、根本的な原因は別のところにあるように思えます。

月島さんに言われた、ということではなく、白ちゃんが月島さんの言ったことを正しいと思っている、ということが本当の原因なんじゃないでしょうか。

つまり

「白ちゃんは、体が弱いのが悪いんだ、と思っています」

「うん」

「それは、間違いですよね」

「そうだね」

「だから、それが間違いだって、白ちゃんに分かってもらえばいいんですよ」

「おお。もみじ、頭いい！」

わたしはすこし、得意になりました。

「ふふん。見習いなさい」

「うん。見習う。で、どうやって分かってもらうの？」

「あ」

わたしは硬直しました。

「……そこまで考えてなかったんだ」

「こつ、これから考えますし」

顔が赤くなってるのが、分かります……。

「涙末ちゃんも考えてくださいよ。って、何してるんですかつ」

涙末ちゃんの指が、わたしの頬をつつきます。

「いや、別に？」

にやにや笑いながら、涙末すけはつんつくわたしの頬をつつきま
す。

「真面目にやりなさいっ」

脳天チヨップ。涙末ちゃんは黙りました。

「……いたい」涙目。そんなに痛くしたつもりもないんですけど。

「さあ、考えるんですよ。白ちゃんのために！」

「う、うん……」

それからしばらく二人で考えましたけれど、けっきょくいい案は
出てきませんでした。

+ + +

「足、あげて」

「……もう少し、力抜いて」

「そう。そのまま」

保健室にときどき浮かぶ、一咲ちゃんの指示の声。

ケガした運動部のひとの、手当てをしているのです。

日は明けて、白ちゃんは今日も休み。わたしと、涙未ちゃんと、何の用事で来たのか一咲ちゃんの三人が、今日の放課後保健室メンバーでした。

そこにやってきた、怪我人の男子。折悪しく浅川先生はおらず、かと言って放置するわけにも行かないし、どうしよう……となったところで、一咲ちゃんが動いたのです。

一咲ちゃんは迷い無い動きで棚から薬や包帯などを取り出すと、「そこに座ってください。傷を見せて」

いつものような無愛想声で指示、てきぱきと傷の様子を検め、手当てを始めました。

消毒、薬の塗布、包帯。

とてもいち生徒とは思えない、流れるような動作で処置を進めていきます。

じつと手元を見詰める一咲ちゃんの視線は、いつもよりすこしだけ鋭く、つまりいつもよりすこし、格好いいです。

誰も一言も喋らない保健室には、わずかに一咲ちゃんの衣擦れだけがありません。

静かで、おだやかで、けど少しだけ傷と病のかおりがする、今の保健室はちょっとした非日常的空間になっていました。

やがてピツと包帯が巻かれ、一咲ちゃんは動きを止めます。

「終わり」

運動部男子の足から手を放し、顔をあげてそう告げる一咲ちゃん。相手の方は、硬直していました。

「……？」

怪訝そうに首をかしげる一咲ちゃんを見て、ようやく正気に返ったのか。そのひとは慌てて立ち上がると、連れ添いの方に微妙に支えられながら、そそくさと保健室から出て行きました。

「……あれは、惚れたね」

ぼそつとした涙未ちゃんの呟きを、一咲ちゃんが電光石火で否定

します。

「そんなことないでしょ」

……表情、変わってません。ストイック。

それつきり黙々と、手当てセットを元の場所に片付けます。あ、手先が微妙に震えているのは、気のせいでしょうか？

「それにしても、見事な手際でしたね」

ずいぶん、手当てするのに慣れてた様子でした。

「……そうでもないよ」

「わたしだったらあんなふうにはできないですよ。一咲ちゃんが居てよかったですね、あの男子も」

「先生に……言われたただだから」

「あ、そうだったんですか」

そつえば前も薬棚の整理なんかしてましたが、生徒にそんなことさせていいものなんでしょうか？

わたしの訝しげな表情を見てか、一咲ちゃんがすこし早口で付け足しました。

「本当は、私がそうさせてくれって、言っただけけれど」

「一咲ちゃんが？」

「うん」

「どうしてわざわざ？」

「……いいでしょ、何でも」

拒絶ではなくただの照れ隠しなことは分かっているので、わたしは更に突っ込みます。

「いいじゃないですか、聞かせてくださいよ」

「手当てマニア……？ 実は傷が好きだとか」

茶化す涙末ちゃんをはたいて黙らせます。

ずいぶんためらった後で、

「……私将来、看護師になりたいの」

一咲ちゃんはぼつりと、そう漏らしました。

「へえ……そうなんですか」

白衣姿の一咲ちゃんを、わたしは想像してみました。無愛想に注射器を構え、嫌がる患者さんに容赦なく針を突き立てる……。で、患者さんが、「あ、痛くない」とか呟くハイスکیلな一咲ちゃんの姿。

「似合いそうですね」

「ちよつと怖そうだけど」

涙未ちゃんの声はぼそりと小さなものでしたが、一咲ちゃんは耳ざとく聴きつけて視線を向けました。

「ひっ」

即座にわたしの後ろに隠れる涙未ちゃんです。怖がるくらいなら言わなければいいのに。

「一咲ちゃんなら、きつといい看護師さんになれますよ」

「……どうだろう」

「なれますって」

「でも、私には、体が弱い人の気持ちはよく分からない」

「体が弱い人の、気持ち？」

すこし深刻そうな表情で、一咲ちゃんは俯いてしまいました。

「私自身はあんまり怪我したこともないし、病気といえばせいぜい風邪くらい。だから、本当は体が弱い人がどういう風に考えているのかとか、そういうことが想像できない。」

「……だから今、白にどういう言葉をかければいいのか、私には分からないんだ」

「……一咲ちゃん」

わたしたちと同じように、一咲ちゃんの気持ちにも、白ちゃんのことはずっとのしかかっていたのでしよう。

「どうして白が落ち込んでいるのかは、私にも分かる。でも、どう言って慰めたらいいのかは、私には分からない」

一咲ちゃんは顔をあげて、わたしを見ました。

「白の気持ち、葉桜なら、分かるんじゃない？」

それはどこか、すぎるような目でした。

すこし悔しそうでもありました。

一咲ちゃんの問いかけが、わたしの胸に染み渡っていきます……。わたしに、白ちゃんの気持ちは、分かるのか？

白ちゃんの憂鬱に共感することは、できます。

でも、いま一咲ちゃんが言っているのは、そういうことではなくて。

つまり 白ちゃんを、助けてあげられるのか？

……という、ことだと思います。

できるとは、正直、即答できません。だけど。

一咲ちゃんは、わたしにならそれができるはずだと、言ってくれました。白ちゃんと同じ、わたしなら。

そうです、わたしにできなくて、誰にできるんですか。

まあ、そこまで言い切ってしまうのは、すこし傲慢かもしれないけど、でも、それくらいの気持ちになったのは確かです。気合入ったというやつです。

だからわたしは、敢えて言い切りました。

「分かりますよ。白ちゃんの気持ち」

隣で涙未ちゃんが、おお、と小さな歓声をあげました。

一咲ちゃんはちよつと未練がましそうではあったけれど、すこしだけ微笑んでくれました。

言い切ったら、それが本当のことになりそうな気がしました。

本当になればいい。

いえ、むしろ、そうならないといけないんです。

第十一話

さりとて心構えだの気合だので問題解決できるなら、苦勞は要りません。とゆうか、もし世界がそんなふうにできてたら、社会なんかとつくに崩壊してますよねきつと。

わたしだったら、気合で腹痛の治まる世界を望みます。すると腹痛患者を失ったお医者さんが儲からなくなり、失業。その他の病気が治らなくなるので、社会崩壊に至るというわけです。でもそれだと白ちゃんが困るのでやっぱりやめましょうか。

というか、そんなことはどうでもよいのです。

わたしは悩んでいるのです。

ついでに言うと、朝からお腹がごろごろしてます。

おなかいたいとまでは行かないものの、これは危険な兆候です。

いつ奈落の底に向かってまっしぐらに転がり落ちていくか分かったものではありません。いわば峠の途中にたまたまできた、平らな地面にかるうじてしがみついている状態。ちょこつと背中、というよりお腹を押されれば、あつという間に

「やあ、もーみじ」

どーんと体当たり。前かがみで歩いてたわたしは、バランス崩して廊下に転がりました。

「何するんですかつありえませんしっ」こんなことするのは涙未すけしかいけませんしっ。

「ご、ごめん。ちょっとテンション間違った」

テンションは間違ってもいいから力加減は間違えないで欲しいです。

「というかあなたの場合間違えっぱなしじゃないですか」

「えっ、そう？」

「……」そんなショック受けたような顔されると、逆に申し訳ない気になります。

「まあ」

何がしかのフォローをしようとしたわたしの下腹部に、エマージェンシー異常事態発生！

「……こっ……！」

「もみじ？ どしたの？」

涙未ちゃんが心配そうな声をかけてくれますが、正直、返事する余裕がありません。

これはっ、直下型ですう

っ！

「ね、ねえ。大丈夫？」

直下型。

それは数ある腹痛モードの中でも、最悪の部類に入るひとつです。何が最悪かというと、トイレへの緊急性はトッブクラスであるにも関わらず、動くとお腹の痛みが増すのです。

動けないのです。

これぞ、まさに地獄の苦しみ。

しかし地獄に仏と言いますが、痛みには波があるので、引き潮のときにトイレに向けて前進することが可能です。

わたしはそのときを、じっと待ちます。

「……」来たっ！ 今です！

幸いにしてトイレは割とすぐそこ、この分なら何とか……、

って、涙未すけ！ 何してるんですか！

「いや、お腹痛そうだったからさ……」

なんと涙未すけはわたしの背中をぽんぽん叩き始めたのです。

涙未すけ的にはそれは痛みを和らげる方法なのかもしれませんが、今のわたしには全くもって逆効果。うう、腸が少しうごめいています…… まじ危険ですし……。

わたしは必死で首を振ります。ほとんど涙目。

「う、ごめん……」

涙未すけを視線で退け、わたしは約束の地、すなわちトイレに向けて悲愴な行軍を再開、

あうっ！ 第二波がっ！

ああっ、この痛みと苦悩のスパイラル。これぞ地獄の苦しみという奴なのですね。もし死後地獄行きが決まったならば、こんな苦しみを永久に味わう羽目になってしまふのです。

死にたく無い！！

心の底からそう思います。

念じます。

というか、そうやって苦痛から目を背けるのです。

冷や汗流しつつ、お腹の機嫌をとりながら、ゆっくり確実にトイレに近付きます。第三波をやり過ごした後、ようやくわたしはトイレ領域に進入することが出来ました。

あとは個室に入るだけ、なのですが。

問題は、デフォルト状態では個室の扉は閉まっている、ということです。

無論鍵などかかっているわけではないですし、ノブを回す必要もありません。学校のトイレはそんなに複雑な構造になってません。

だがっ、しかし！

今のわたしにとっては、手を伸ばし扉を引く、たったそれだけの行動が致命傷となり得るのです！ 筋肉のわずかに余分な動きでさえ、お腹に伝わればカラストロフィを引き起こす恐れがあります。確率は低くても、それは絶対に避けなければならない結末。

となれば……。

「……、」

わたしは後ろで心配そうな顔をしている涙未すけを見ました。いや、見たというか、わずかに頭を傾けました。

「ど、どうしたのもみじ」

くいくいと頭を動かして、トイレの扉を示します。

「お、お腹いたいのか？」

ちがーっ！ いやさすらなくていい、いいですから！ 力強すぎですし！

「え、違うの？」

さっぱり伝わりません。わたしは首を振り、そしてまたトイレの扉を開けてくださいと、無言のサインを送りました。

「も、もみじ、何が言いたいのかわからないよ！」

涙未すけはじめんだ踏んで訴えます。なんであなたが泣きそうなんですか。泣きたいのはこっちですし！？

涙未すけ使えませんです！ ああもうっ、こうなったら電波の力で扉を開けるしか！？

いい加減第五波を数え、錯乱気味の思考の中、かろうじてわたしは扉を開けることが出来ました。正直、波の数が二ケタに達すると超レッドゾーンなのですが、今回は何とかかなりそうです。

そしてわたしの目の前に現れる約束の地、苦しい旅の終着点。
しかし！

実はこの瞬間こそが、最も気を引き締めるべき真のクライマックスなのです！

その ラスボス 敵 の名前は、気の緩み。

何故かは分かりませんが、ゴールを目前にすると、いつもお腹が急に元気になるのです。本当に気の緩みによるのかは定かではありませんが、とりあえずそれ以外に考えられないのでそういうことにしています。

ここが正念場。こんなところで決壊してしまつては、悔やんでも悔やみ切れません。

というか、わたしが死にます。社会的に。

まあ、これについてはもう慣れたもの。こやつのは真価は不意打ちによつて発揮されますが、わたしに油断はありません。気の緩みなんかにはやられませんよ。へへん。

(きゅー、きゅーっ)

油断を封印するひみつの呪文を心中で叫びながら、わたしは最後の一動作を完了します。

そんなわけで、ようやくのこと、わたしは無事にゴールに辿

り着けたのでした。

「もみじ、大丈夫？」

涙未ちゃんが遠慮がちに扉をこんこん叩きます。

「大丈夫ですよ」

ようやく、返事することができました。

「もう、あのときにお腹叩かれたら危険なんですからね！」

「ご、ごめん。よくわかんなくてさ」

平謝りの涙未ちゃんです。へへーとかって平伏しそうな勢い。いつそへんな気分になりそうなくらいかしこまっちゃって……。

「大体あなたには、相手への思いやりというものが足りないのです」「はい」

「道端のひとにいきなり体当たりしちゃいけませんで、先生に言われたでしょう！」

「言われてないけど」

「口応えしない！」

「ひいつごめんなさい！」

別に何もしてないのに、叩かれそうになった子どもみたいなリアクションの涙未ちゃん。

「まったく、これがもし白ちゃんならば……」

わたしは、すこし前に廊下で白ちゃんに助けられ、保健室まで連れて行ってもらったときのことを思い出しました。あのときの白ちゃんは気遣いに満ち、涙未すけのようにわたしのおなかをテンパらせるなどまったくあり得ませんでした。

そうです、白ちゃんならば……、

白ちゃんならば？

「もみじ？」

白ちゃんならば、もっと労わりある扱いをしてくれます。

わたしは、そう言おうとしていたのです。

「もみじつてば？」

何故、白ちゃんなら労われるのか？

それは、白ちゃんがわたしと同じだから。

わたしと同じで、体が弱いから。苦しいときのことがよく分かっているから。

他人の痛みを、分かってあげられるから。

「そうです！」

「うわっ！」

体が弱いから……優しくなれる！

わたしは目をぱちくりさせる涙未ちゃんの手を取って、ぶんぶん振り回しました。

「白ちゃんのいいところ、あるじゃないですか！」
「ばかですね、わたしは。」

そんなこと、ずっと前から分かっていたことじゃないですか。白ちゃんは、困っているひとに共感できる。宝物みたいな、優しさを持っている。

それは本当は、体が強いとか弱いとかとは関係ない、白ちゃん自身のいいところであるはずです。優しいこと、それじたいが大切なのであって、理由などは重要じゃないのです。

だとしても。

やっぱり今だけは、理屈が必要なんだと思います。

白ちゃんが自信を失くして、落ち込んでしまっている今は。

白ちゃん自身に、自分のいいところを、思い出してもらうために、体が弱いから白ちゃんはこんなにいい子になれたんですよと、励ます材料になつてもらいましょう。

「い、いたいよもみじ！」

気付けばわたしは、ずいぶん強い力で涙未ちゃんの手を握りこんでいました。わたし自身の腕も、ちよつと痛いです。

わたしは、でも、腕を放さず、涙未ちゃんに顔を近づけてにやりと笑ってあげました。

「ふ、不敵だね？」

「うふふ。そうですよ」

「白たんのこと、何とかなりそ？」

「ええ。でも、涙未ちゃんにも手伝わってもらいますよ？」

「え、ぼくにも？」

目をぱちくりさせる涙未ちゃんですが、その口元は何かを期待するように、緩んでいます。企みの香りを敏感に察知してか、それとも白ちゃんと一緒に助けられる興奮のためか。たぶん両方でしょうけども。

そう、理屈は必要ですけど、でもやっぱりそれだけじゃ弱いので。実践によって、白ちゃんには理解してもらう必要があるでしょう。

第十二話

それから二日後。わたしたちは保健室に集まって、作戦会議を開きました。

白ちゃんは未だにお休み。精神ダメージの大きさが伺えます……。まあ、無理に来られて余計に体調崩すよりはいいんですけれど。でも、わたしとしてはとても心配ですから、一度くらい顔を見ておきたいという気持ちもあつたりします。

ともかく、早く元気になって欲しい。

それがここにいるみんなの、共通の気持ちです。

「で、どうするつもりなの？ もみじ」

すこしテンションが高いのか、涙末ちゃんはタオルケットを体に巻きつけて保健室内をうろろしています。正直子どもっぽい……。そこがかわいいと言えなくも、ないですが。

「こちらを」

涙末ちゃんの様子があやしいのはいつものことなので、わたしはべつだん気にしません。とくに突っ込まず、わたしは今日の本題に入りました。

近くに座る一咲ちゃんの目の前に、一本の瓶をぶらさげます。涙末ちゃんも餌に群がるハムスターのように、駆け寄ってきました。

「なあに、これ？」

その疑問はもつともなことです。何せ、その瓶には、ラベルなど一切ないのでから。

「これはですね」わたしは精一杯もったいつけて答えます。「微妙に体調が悪くなる薬です」

「微妙に体調が」

「悪くなる、薬？」

涙末ちゃんの呟きを一咲ちゃんが引き取るという、漫画やアニメではよく見るけど実際にはかなりありえないことを二人はやっての

けました。息のあったコンビネーションです。このひとたち、本当は仲良くなれるんじゃないですかね？

「てゆうか、体調悪くなったらそれ薬って言わくない？」

「まだ話は終わっていませんよ。それにこういう言葉もあります、『死ねない薬は薬じゃない』」

「ええー……。じゃあ薬飲むのやめようかな……」

あなた何か飲んでたんですか。見たことないですけど……。

「まあ、ふつうは気にすることはないと思いますが……要は、何でも使えようだということです」

「どこからそんな薬を」

一咲ちゃんは、そのビール瓶みたいな中身の見えない入れ物を一生懸命睨みつけながら、ぼそっと呟きました。真剣すぎてすこし怖いくらいです。看護師志望だから、薬マニアだったりもするんでしょうか？

「はい、何を隠そう、浅川先生に作ってもらいました」

「浅川先生が？ 体調の悪くなる、薬を？」

一咲ちゃんは、机に座って何やら事務仕事をしている先生を見ながら呟きました。

「てゆうか、せんせ、薬なんか作れるんだ……」

「浅川先生作っていうところがポイントなんですよ。お二人とも、あの方のスキルはご存知でしょう？」

こく、と頷く二人。

その腕、正に適剤適所。先生が選んだ薬を飲めば、どんなに具合が悪くてもたちどころに元氣を取り戻すという、生ける都市伝説それが浅川瞳という先生です。

「ひとを治せるということは、すなわち思い通りに具合悪くさせることもできるという理屈です」

「なるほど、それで『微妙に』体調が悪くなるんだね」

「その通り」

「先生が、そんな薬を……？ そんな薬、作ってもらえるとは思え

ない。いくら微妙って言っても」

「はい、そこはですね」

想定内の疑問です。

「これを使って、白ちゃんに元気を取り戻してもらって言いましてから」

「体調悪くなるのに、元気……？」

涙末ちゃんの頭上にはてなマークが浮かびます。

やがてそれが電球マークに変わりました。

「わかった怪しい薬だ！ それを白さんに飲ませて、元気いっぱいだ！」

「違いますし！？」

精力増強剤か何かと勘違いしてるんじゃないですか、このひとは。「だいたい薬でむりやり元気にしてどうするんですか。何にも解決になってませんでば」

「いや、そういうのが必要なこともあるよ？」

ふいに真顔でそんなこと言われても困ります。

「ま、まあそれはそうかもしれないけどね」調子狂っちゃいますよ。

「うふふん、でも元気になるけど体調悪くなるってことはアッパー系……？」

と思っっていたら何処か別の世界にこんにちはし始めました。なんですかアッパー系って……っていうか話聞いてないですよこのひと。

もう怖いので放置です。

「白に飲ませるわけじゃないよね。それで、どうするの？」

一咲ちゃんのまともさが、今は何よりありがたいです。

「これを飲んで体調悪くなってですね、白ちゃんに助けさせるんですよ」

「それが、作戦？」

「はい。そうすれば白ちゃんは、体が弱いがゆえに身に着けることができた自分の優しさを自覚でき、元気になれるというわけです」

「……」

あれ、なんか不発です？

「そんなにうまく行くかな？」

「だめですかね？」

「だめっていうことは、ないけど」そんな不安そうな顔で言われると、自信なくなってきました。

「それで、誰が飲むの？ その薬」

「それは、涙末ちゃんしかいないでしょう」

「ぼくなんだ！？」

肝心なところだけちゃんと聞いているひとですね。

「何を言ってるんですか当然でしょう？」

「当然！？」

「驚くところじゃないですよ。一咲ちゃんには『介抱するけどうまくいかないひと』の役をやってもらうんですから」

「そんな役が」

「ええ。一咲ちゃんがやってもうまく行かない、だけど白ちゃんがやったらうまく行った！となれば、白ちゃんもずっと元気になれるはずなのです」

「……なるほど」一咲ちゃん、微妙にほっとしてるように見えるのは気のせいでしょうか。

「いや納得しないでよ！ ぼくが体調悪くなってもいいの？」

「白ちゃんが元気になれなくてもいいんですか！？」

「逆ギレ！？ ねえこれって逆ギレだよね？」

「大丈夫ですよ、浅川せんせが作った薬ですから。ちよこつと頭がぼーっとして悪寒がして、もしかしたら熱が出るかもしれないくらいですから。ええと、マックス七度五分でしたっけ？」

「十分イヤだ！」

「飲みなさい！」

ぐいと薬瓶を涙末ちゃんに突き出します。ひいとお間抜けな声を出し、タオルケットを翻して涙末ちゃんは逃げ出します。追っ

ったらタオルケットでひっぱたかれました。ぜんぜん痛くはないですけど、なんか子どもに叩かれたみたいで屈辱。

「もみじが飲めばいいじゃないか！」

「わたしが飲んだらだめでしょう」

「なんで？」

「だって、わたし、体弱いですし」

「まあ、……そうだね」

納得しちゃった。

「あれ？ リアルにぼくしかないの！？」

「ようやく自分の置かれた立場が分かってきたようですね。さあ！ 部屋のすみっこに追い詰めてやりました。もうやつに逃げ場はありません。」

「ひいーいやだー」

タオルケットかぶってもだめです！

「やつやめてえ」

「往生なさい！」

「ひっひとでなし！」

「何ですとう！ 白ちゃんを見捨てるっていうんですか！」

「それずるい！」

「ずるくても正義！」

タオルケットを引っぺがしては取り返されるという、一進一退の激戦です。

「はあ、はあ」

いつまで経っても勝負がつきません。疲れました。

これ以上やってたらわたしの身が、もちません……。

「かつ、一咲ちゃん、この薄情者に何か言っちゃってくださいよ」

一咲ちゃんは無言で、こっちに歩み寄ってきました。

どこか思いつめたような、すこし険しい表情。

「一咲ちゃん？」

「……しが飲む」

「え？」

「それ、私が飲む」

「ええっ」

によつと手を差しだす一咲ちゃん。予想外の展開です。

「で、でも」

「それ飲めば、白が元気になれるんでしょ？」

い、いつものクールな一咲ちゃんはどこ行っちゃったんでしょう。ついさっきまでまともだと思ったのに、なんか言ってることへんですよ。

「誰かが飲まないといけないなら、私が」

じりじり近寄ってくる一咲ちゃんは、やたらと威圧感があります。今度はわたしが、部屋の隅っこに追い詰められました。

ぺたんと座り込むと、隣にはタオルケットを頭からかぶった涙未ちゃんが。

「涙未ちゃん、涙未ちゃん」

「な、なに？」

「入れてください！」

返事も聞かず、わたしはタオルケットをめくって中に入り込みました。

「ちよつ狭っ！ いきなりどうしたの、もみじ」

「緊急避難です！ 一咲ちゃんが壊れました！」

「ええっ！」

もぞもぞごそごそ。暗闇の中で二人、タオルケットの取り合いです。更に外側には、薬を奪い取るうとする一咲ちゃんが存在。

絶対絶命！？

「さっ、さっちゃんも意外と面白いね！？」

「わたしだつてこんなの初めてです！」

いや待ってください。なんでわたし逃げてるんでしょう。べつに一咲ちゃんでもいいはずです。わたしでなければ。

頭は冷静になってしまいましたが、一度始めてしまったものは止

められません。なんでこんなことしてるのかも分からないまま、わたしたちは三つ巴の陣取り合戦を繰り広げました。

そんなとき、扉が開くがらがらとした音が聞こえた気がしました。が、誰だろうとか気にする余裕ありません。というか見られたら恥ずかしいので止めて欲しいんですけど、他の二人はそれすら分からないほどヒートアップしちゃってるんでしょうか？

「白のためなら薬飲んで体壊すくらいなんでもない！」

こんな状況でなければ格好よかったに違いない台詞を叫びながら、一咲ちゃんが一際強くタオルケットを引っ張りました。

するりとわたしたちの手を抜けて、取り払われる掛け布。

開けた視界に移るのは、肩をいからせて立っている一咲ちゃんと

「……白ちゃん？」

今日は休んでるはずの白ちゃんが、いました。

第十三話

「え？」

わたしの眩きに、他の二人も一斉にそちらを見ます。
痩せたちいさな体。すこし曲がった背中。蒼白い肌。確かにそこにいたのは、見慣れた白ちゃんでした。

「白……、今日は休んでたんじゃ？」

一咲ちゃんがぼうつとした様子で話しかけますが、白ちゃんはとうしたのか、返事をしません。

そう、それは確かに見慣れた姿の白ちゃんでしたが、ひとつだけ、見慣れないところがありました。

表情が。

なんだか、怒ってる？

「……どうしたの？ 具合悪いの？」

「さっき言ってたのって、どういうこと……？」

一咲ちゃんの言葉を遮るようにして、白ちゃんは言いました。いつもより低い声。白ちゃんらしくないけれど、今の表情にはぴったりの、抑えた声。

「白ちゃん？」

「私のためなら体壊すなんて何でもない、って、どういうこと？」
聞かれていました。

白ちゃん本人にはれてしまっていては、意味がありません。これは計画練り直し……。

いや、それよりも、白ちゃん自身の様子が気になります。
どうしてこんなに、不穏な空気なんでしょう。

わたしは白ちゃんの言ったこと、自分たちの言っていたことを思い返しました。

白ちゃんのためなら、
体壊すくらい

「……あ」

ああ、これは。

「大変なんだよ？ 体壊すのって」

白ちゃんが怒るのも、無理ないです……。

「動けなくなっちゃって……ご飯もちゃんと食べられないし。おいしくないし……苦しいし。病院に行ったら、お金だってかかるんだから」

「し、白。これは、白のためを思って」

「そんなふうになされても嬉しくないよ！」

顔を真っ赤にして叫ぶ白ちゃんなんか、初めてみました。

「私のこと考えてくれてるのは嬉しいけど……でも、それでみんなが体壊しちゃうのは、いやだ」

「白……」

ものすごい迫力でした。

白ちゃんのからだは小さいし、声も大きくありませんし、ぜんぜん怖くはありません。

でも、とても心のこもった声。

「体壊して学校来れなくなったら、みんなとも会えないのに……」
そんなに怒ったら体に毒だ、と思いはするものの、口を挟むことさえできません。

「分かっていると思ってたのに。みんななら、知っていると知っていたのに……」

胸が苦しいです。白ちゃんに怒鳴らせてしまったこととか。白ちゃんののためとはいえ、おかしいことを考えてしまったこととか。たぶん、みんな同じ気持ちだと思います……、

白ちゃんも含めて。

「ばかつ！ みんなのばかつ！」

だって、白ちゃんが一番、苦しそうな顔してますもの……。
すこしの間、誰も喋れませんでした。

その沈黙を破ったのは、浅川先生の声。

「衣花。そんなに怒らないでやってくれるか」

「……でも」

「まあまあ。こいつらも衣花のためだと思ってやったことだし。それに」

ああ、先生。ここでねたばらしちゃいますか。
でも、こうなってしまうては仕方ないですね。

「その薬な、ただの塩水だから」

『え？』

涙末ちゃんと一咲ちゃんの声が重なりました。

「体調悪くなんかならないから。考えたのはハザだけど、流石に本当に体壊すようなことは出来ないからってね。ちゃんと考えてるんだよ。だからそう、怒らないでやってくれるかな」

二人、気の抜けた声を出します。

「……なんだ、もみじ。それならそうって言うてくれればいいのに」
「うん」

「ええまあ……でも、プラセボ効果が狙いだっただので、言うに言えず」

偽薬効果プラセボというのは、薬でも何でもないものを「薬ですよ」と言うて与えると、ありもしない治療効果が現れるというふしぎな現象のことです。病は気からとゆつのを地でいく効果です。眉唾ではなく、実際の医療現場でも使われている方法だそうです。

まあ、普通は治すために使うわけですけど。

「本当はコトが終わった後、わたしが飲んで何ともないですよーって言うつもりだったんですよ」

「……なあんだ。やつぱり。信じてたよ、もみじ！」
あれだけ必死に逃げてた癖に。

一咲ちゃんは、ちよつと慥然としています。いつものような顔ですが。

「……そういうわけなので、白ちゃん。そんなに怒らないでくださいよ」

「……」

白ちゃんはもう、怒っていなそうでした。
かわりに、なんだかしゅんとしていました。

「怒ってなんかいいよ。でも……私」

俯いて、すこし泣きそうな様子で……。

「けつきよく、さくらちゃんたちがそういうことしようとしたのも、私のせいなんだよね」

「え……」白ちゃんのせい？

「私の体が弱いから、さくらちゃんたちに心配かけて、体壊そうっていうことになったんだよね」

「それは」違います、と言おうとしたわたしは、白ちゃんの一言で動きを止めることになりました。

「私なんか、いなければ」

「なっ」

それは、わたしの大切な場所を抉る一言でした。

「私がないほうが、みんな元気に……」

自分否定を続ける白ちゃんに対して、なにか、とげとげしてるような、熱い、でもやわらかいような、よく分からないものが湧き上がってきます。

それは、叫びになって、わたしの口から出ていきました。

「何言ってるんですか！」

白ちゃんが、みんなが、驚いてわたしを見たのが分かりました。
でも、止められません。

「いないほうがいいって、そんなことないですよ！」

白ちゃんが目を丸くしています。そうですよ、分かってなかったなら、もっと驚いて、もっと目を見開いて、はっきりとわたしたちを見ればいいんです。わたしたちたちの声を聞けばいいんです。二度と、そんなこと、言えないように。

「どうして、そんなこと言うんですか。わたしたちの気持ちも、嘘だっていうんですか？」

「ちがう……そんなこと」

「だったら、そんなに自分をけなすのはやめてください。哀しくなりますよ。白ちゃんが自分を否定したら、わたしたちの気持ちも一緒に否定されちゃうじゃないですか。そんなのいやですよ、わたしは……」

ひよっとしたら、押し付けがましいのかもしれませんが。

一方的に好意を押し付けて　わたしがしていることは、白ちゃんの気持ちを踏みにじっているだけなのかもしれません。

でも、わたしは信じてます。

白ちゃんも、わたしと同じ気持ちだと。

だから、分かってもらえるはずです。きっと。

お互いに一人だった日々。寂しかった頃。白ちゃんと会えて、わたしは学校に来るのが楽しくなりました。白ちゃんがいなかったら、わたしは今頃不登校になってたかもしれません。

だから、わたしの中の大切な場所に、白ちゃんがいる。

そして、わたしと同じだった白ちゃんの中にも、きっと、わたしが……。

……いたらいいな、としか言えませんが……。……だめです。考えすぎるとだめです。勢いが重要です。そう、だから、早く言ってしまえです。

「わたしは、白ちゃんが大好きなんですから！」

「えっ！」

「白ちゃんは、どうなんですか!？」

「わっ、私はっ」

顔真っ赤にしてうるたえる白ちゃんを見て、わたしも何だか

「わ、私も、好きだよ。さくらちゃんのこと」

恥ずかしいとかいうレベルじゃないですね。

それ以上白ちゃんの顔を直視できなくて、わたしは俯いてしまいました。

「わ、私も、好きだよ。白のこと」

何故か慌てたように、一咲ちゃんまでそんなことを言い出します。
「ぼくもだよ！」

涙未ちゃんまで。

どんな追い討ちですか。

「……あ、ありがとう……みんな」

呆然とした白ちゃんの表情は、微妙に状況についていけないことを示しています。

みんな、どうしちゃったんですか。

あ、悪いの、わたしです？

「あ……キミたち……青春してるねえ」

浅川先生の一言が、とどめになりました。

顔から火が出るとはこのことです……くらくらして倒れそう。
というか、何の話でしたっけ。何でこんな告白合戦みたいなことに？

……。

ああ、そう、白ちゃんが元氣失くしてるって話ですよ！

「え、ええと。白ちゃん」

「はっ、はいっ！」

かしこまらないでください。

「げ、元氣に……なりました？」

そういうと、白ちゃんは、ちいさな胸に手を当てて、ほっと息をつきました。

「う、うん……ありがとう。なんだか、安心した気がする。みんなと一緒にいてもいいんだって」

また顔を赤くして、俯く白ちゃんです。

「そう、それですよ！それが言いたかったんです」

体が弱いとか関係なくて、白ちゃんは白ちゃんだから……何言ってるか分かりませんが、ともかくそういうことです。

「一緒にいてもいいんですよ。体が弱いくらい、迷惑でも何でもなくて。むしろ迷惑かけて欲しいくらいですよ」

「うん……え？」

意表を突かれたのか、驚く白ちゃんに、一咲ちゃんと涙未ちゃんが次々と声をかけていきます。

「白を助けられると、私は嬉しい。だからもっと、迷惑かけてもいいよ」

「そ、そうかな……」

「ぼくが学校来るようになったのって、白たんが保健室に居るからだよ。白たんのおかげ。体弱いのだって、悪いことばかりじゃないって」

「……うん」

頷く白ちゃんの顔は、晴れやかなように見えました。

白ちゃん風に言うと、せかいが開けた笑顔。雨上がりの青い空虹のような、ぼんやりとしているけれどきれいな微笑みです。

「ほんと……ありがとう……みんな」

分かってくれたんだ……と、思います。ようやく。

これで、ひと安心ですね。保健室に、どこかほんわりあったかい空気が流れました。

では。

忘れちゃいけない、本題を。

「相手が先輩でも、一緒ですよ」

「えっ！」

きゆうに先輩の話になってびっくりしたのか、白ちゃんはすこし飛び上がって後ずさります。

「要は先輩が白ちゃんを好きになればいいんですよ」

「そ、そうかなあ。でもそこが、一番の問題だよ」

「それは、これからの白ちゃん次第」

「うつつ」

「大丈夫だよ。先輩、白たんに気ありそうだったし」

「そっ、そんなことないよう！」

頬を桃色に染めて否定する白ちゃんの様子に、すこし前のような

悲愴なものは、ありません。からかう涙未ちゃんにぽかすかしているその姿は、わたしたちがよく知っている白ちゃんそのものでした。「よかったですね。白ちゃん元気になって」

仏頂面でその様子を眺めている一咲ちゃんに、わたしは話しかけます。このひとは先輩と白ちゃんの話になると、なんだかいつも面白くなさそうな顔をしていますね。

「うん」

でも、白ちゃん自身の話になると、いつもからは想像もつかないほど、柔らかい表情になるんです。見た目には分かりづらいけれど、一咲ちゃんも白ちゃんのことを好きなのだあと分かります。

けつきよく、初めに考えてた筋道とは、ぜんぜん違うものになっちゃいましたけど……というか、薬飲んで嘘でも体調悪くなるなんておばかなことしなくて済んで、むしろ良かったですけど……ともかく、白ちゃんが元気になって、結果オーライということだ。

「お前ら、優しいよなあ。衣花も幸せ者だ」

傍観者に撤していた先生が、そんな感想を述べました。

自覚できない幸せに、意味はありませんから……とか、思いまいたけど、流石に恥ずかしいので口には出しませんでした。

+ + +

「というか、白ちゃん。体は大丈夫なんですか？ 今日はお休みだったはずじゃ」

とりあえずの落ち着きを取り戻し、保健室はいつもの空気に戻りました。わたしも、白ちゃんも、一咲ちゃんも、涙未ちゃんも、いつもの配置です。

もうそろそろ陽も沈みそうな頃合でしたが、何だか疲れたのです。こし休んでいこうということになりました。

「うん、みんなに心配かけてるかなあとって。今日も休もうかなと思ったんだけど、体調はそんなに悪くなかったから」

いいこですねえ……。

「無理しなくてもよかったのに」

「ちよっと、せかいが狭くなるようになってきたっていうのもあるんだけどね」

寂しかったらしいです。

えへ、とはにかみ笑い。どうしましょう。

「ま、今日白たんが来なかったら、もっとややこしいことになってたかもだし。いいんじゃない？」

「そうですね」

晴天の霹靂、のち雨降って地固まるという感じでしょうか。

「あの」

「何です？」

白ちゃん、ちよっともじもじした様子。

「夕足先輩のことなんだけど……何か、言っていたり、しなかった？」

「あ、それは気になりますよね」

「うん。その……」

「大丈夫。ちゃんと白ちゃんのこと、心配してくれてましたよ」

これは本当のことです。詳しい事情は話してませんけれど、白ちゃんが休んでいると知ったときの先輩の態度じたいは、是非白ちゃんに見てもらいたいくらいでした。ずいぶん心配そうで。

「そっか」

ほっと息をつく白ちゃんです。安心成分が主みたいですけど、心配かけて申し訳なさそうな色も混じってるのは、ご愛嬌でしょうか。白ちゃん自身が元気になったのは良しとして、しかしもう一つの問題、先輩とのことは何にも進展してないんですね。

保健室に先輩を呼んで、白ちゃんとの距離を縮める。その作戦はとりあえず、うまく行きました。

でもその成功に気をよくして、わたしたちはだいじなことを忘れてしまっていた気がします。

それはすなわち、月島さんの存在。

恋敵がいるんですから、のんびりじっくり、というわけにはいかないはずですよ。

となれば。

「先手必勝」

「ふえ？」

白ちゃんのほうを向いたわたしの目に、おかしなものが飛び込んできます。

いつのまにか涙未ちゃんがそこにいて、白ちゃんに妙なかたちのカチューシャをつけていました。ねこみみカチューシャ。ちょうど装着、整え終わったところのようで、二人して白ちゃんの頭に手をやったままこつちを見ています。

「……それ、かわいいですね」

意外とカチューシャのねこ耳はリアル志向です。もこもこというか、毛つぽいというか。白ちゃんは小動物系の雰囲気なので、やたら似合ってます。涙未ちゃん一体どこからそんなもの出したんですかとか、そんなどうでもいい疑問が吹っ飛んでしまう愛らしさ。

「似合うでしょ？　ぼくの目に狂いはないのだ」

ぼむぼむと白ちゃんの頭を撫でながら、やたらと誇らしげな涙未ちゃんがすこし、にくらしいです。

「さくらちゃん、先手必勝、って何？」

白ちゃんの声で我に返ります。うつかりねこみみ白ちゃんに心奪われました。あやうい。

「え、ええ。先輩のことなんですけど」

「う、うん」

「単刀直入に言いますけど」

「うん」

「告白しません？」

一瞬の空白の後、白ちゃんの頭が耳まで桜色に染まりました。「そうだねえ……。いけると思うし、やっちゃいなよ」

陽気な涙未ちゃんの、天然援護射撃。

白ちゃんはぷるぷる震えながら、ようやくといった感じで声を絞り出しました。

「むっ」裏返ってます。「む、むりだよう」

「……やっぱり不安ですか？」

「それもあるけど」

「恥ずかしい？」

どうでもいいですけど、涙末ちゃんが引っ張ってる耳、わたしも引っ張りたい。

「う、うん……」

白ちゃんはぎゅっと、掛け布を抱きしめました。

「もし断られたらって思うと、やっぱり」

「でも」

あんまり言いたくはないですけど、仕方ないです。

「あんまりゆっくりも、していられないですよ……」

「う、うん……そう、だよね」

白ちゃんは案の定暗い表情になってしまっ、わたし、すこし後悔。

でも、気持ちはよく分かります。直接言うのは勇気が要ります、とても、とても。わたしが白ちゃんの立場だったとしても、恥ずかしくてすぐには言えないでしょう。好きなひととか、いませんけども。

何か、いい方法はないものでしょうか……。

「じゃあ、プレゼント攻撃だ」

「なるほど」涙末ちゃんの言葉を、わたしは素早く脳内で検討します。

「それは、いい考えかもしれませんが。涙末ちゃんらしく、ちょっと短絡的な気がしますけど」

「二重にバカにされた気がする……」

「何言ってるんですか、誉めてるじゃないですか。短絡的っていうのは、分かりやすくていいっていう意味なんですよ」

「へえーそうなんだ。……今考えたでしょそれ」
「てへっ」

「いや、かわいくしてもだめだから。とうかつちろ舌で軽く自分の頭小突いてもだめだから!」

「さて、何をプレゼントするかが問題ですね」

「わあ、無視しないでよ!」

「白ちゃん的にはどうですか? この線は」

「完全無視!?^{スルー} せんせえー」

涙末ちゃんはついに、先生に泣きつきに行っちゃいました。ちょっとやりすぎたかも。

「え、えーっと……それなら、すこし、言いやすいかも。でも、何がいいのかなあ」

「そうですねえ……」

このテの問題は、いつそ相手に聞いてしまうのがいいとわたしは思っているんですが、この場合それも何か違う気がします。何となくですけど。

しかし、何か、足りないような……。

「うーん」

プレゼントですから、先輩の好きなものがないですよええ。

それでいて、告白に相応しいもの。

何気にわたしも結構先輩と話してますから、とうか白ちゃんと先輩の会話を横で聞いてましたから、先輩情報は結構持ってます。

その中から、以上の条件に合致するものは何かないかと脳内検索です……

……あ。

「あーっ!」

「どっとうしたのもみじちゃん」

「ありましたよ! ピッタリなのが!」

「えっ?」

ああ、ベッドの分だけ離れてる距離が、今は遠すぎます。白ちゃんの手を取ってぶんぶんしたいくらいな気分なのに。

「ね、ねえ、ピツタリって、何？」

「ふふん、それはですね」

無駄にもったいつけて、わたしは白ちゃんを焦らします。

「それは……？」

「それはっ、すなわち！」

びしーんと人差し指を突きつけて、わたしは高らかに宣言しました。

「恋文です！」

白ちゃんはぱちぱちと、十度くらいわたしの指先を目前に瞬きした後、本曰いちばん大きな声で絶叫しました。

「らっ、らぶれたー！？」

第十四話

恋文。

恋い慕う心を打ち明けた手紙。

新明解国語辞典、第六版より。

「どんだけ古風？」

「涙未すけうつさいです。確かに古風ですけど、先輩がいいって言うんだからこの場合はこれがベストなのです。古風ですけど」

「む、むりだよ」

「そんな弱気でどうするんですかッ！」

「ひっ」

一喝です。めーです。

「心のこもった文章が、先輩の心の扉をガンガン叩いてこじ開けるんですよ！そしてその手紙は大切に保管され、二人がケンカしたときに仲を取り持ってくれたり」

「ケンカなんかしないよう！」

「倦怠期に付き合い初めのうぶな心を教えてくれたり！」

「けっ、倦怠期？」

「そして結婚式で読み上げられて、みんなの話のネタになるんです
うううっ！」

「けっこんー！？」

白ちゃんは目を回し始め、頭のでっぺんからゆげを吹き……。ぽ
てんとタオルケットの上に倒れこんで、動かなくなりました。

「……実際、どうですか？無理そうですか？」

「ううん……どうかな」

何事もなかったように起き上がって、ふつうに受け答え。白ちゃん意外とノリがいいです。

「書いてみたことなんかないし……。やってみないと、分からない
よ」

書いたことあつたら、逆にびっくりですけど。

「まあ、白ちゃんなら大丈夫でしょう。ノートに詩書き溜めてますし」

「えっなんで知ってるのっ」

「え」……冗談だったのに。

「え」

フリーズ
時間凍結。

わたしは時を巻き戻し、気を取り直して話を先に「白たんのポエム、後で見せて！」

涙未すけー！

「空気読めですっ」

「あいたっー！」

白ちゃんに詰め寄るおばかさんの後頭部に、わたしはチョップを叩き込んで黙らせませす。

「やってみます？ 恋文」

そして何事もなく、話を進めます。黒歴史とか触れないのが大人のマナーですし。

「う、うん」

白ちゃんは、こくこくと頷きました。

「……恥ずかしいけど、でも、私もそれがいいのになって思う」

顔は、桜色満開。

ひみつを暴かれたせいなのか、それとも恋文書くのが恥ずかしいからなのかは分かりませんが、

「はあ……、せかいがゆれてるよ……」

そう言って両手を胸に当てて、ほっと息をつく姿は、まさに恋する少女です。俯いてちいさなまつげをふるふる揺らし、くちびるをゆるく結んで考えに沈む白ちゃん。いま、白ちゃんの頭の中は、出会ってから今までの先輩の姿と自分の気持ち、そしてそれらぜんぶを、どうやって固めて文字の形にするのか、で一杯いっぱい膨れてるんです。

ちょっと切なそう。

どうやって伝えていいか、よく分からないに違いないのです……。できるならば、代わりに書いてあげたい、けれど。

こればかりはできません。

世界でたった一人、白ちゃんにしか書けない手紙ですから。

「こっ、国語の授業もつと真面目に受けておけばよかったよ」

「ぼくも、まともに受けたことないなあ……」

いや、国語の授業は関係ないと思いますよ……あんまり。

「ラブレターに必要なのは、国語力じゃないと思う」

一咲ちゃんの声です。きゆうに背後からぼそつとラブレターとか言われると、びっくりしますね。

「必要なのは、……」

なぜ、そこで口ごもるのですか。

「なのは？」

「……………愛」

うわ。

真顔で……………じゃないですね。いきなり顔真っ赤になりましたよ。

「……………なんでもない」

そこで逃げますか。

「さっちゃん、もしかしてあるの？ 書いたこと」

「はは、涙末ちゃん。まさかそんな」

……………寒気を感じて振り向くと、一咲ちゃんが逆に不安になるほど顔真っ赤にしてこつちを睨んでいました。地雷。地雷踏みましたよわたしたち。

一咲ちゃんは手にした枕でぶつぶ、涙末ちゃんとわたしを滅多打ち。わたし関係ないですし……………。

「すごい！ 誰に書いたの？」

地雷踏んだ足を上げずにいれば助かるかもしれないのに、涙末ちゃんはお構いなしです。このまえ、一咲ちゃんが壊れたタオルケット防衛戦以来、二人の間にあった妙な遠慮はすっかり消えています

た。

「出したの？ 結果は！？」

「出してないっ！ 書いただけ！」

「やっぱり書いたんだ！」

「……！！」

一咲ちゃん、ちよつと涙目。

最終的に先生に止められるまで散々涙未ちゃんをおっかけ回した後、一咲ちゃんは保健室を出て行ってしまいました。かわいそうに……。出際に白ちゃんをちらりと見た視線が、何やら色々と複雑そうでした。

「涙未ちゃん、ちよつといじりすぎですよ。気持ちは分かりますが」
普段なかなか、こんな機会ないですし。

「誰に書いたのか、気になるよね」

涙未ちゃんは、叩かれすぎて酷い有様です。髪の毛の乱れは寝起きをゆうに超えるレベルだし、めがねはズレてますし……。

「まあ、……そうですね」

「一咲ちゃんに今度、どういう風に書いたか教えてもらおうかなあ」
白ちゃん、それは……やめたほうがいいのかどうか。

わたしにはいまいち、判断つかないです。白ちゃんならば、喜びそうではありますけども。

「わたしだって、相談くらいには乗れますよ」

白ちゃんには忘れず、自分アピールです。

「ぼくもぼくも」

「う、うん。ありがと……」

白ちゃんは、ぎゅっと拳を握り締めて、ガッツポーズめいたものを取りました。

「よし、がんばろうっ」

+ + +

白ちゃんがまた学校に来るようになって、保健室は以前の風景を取り戻したようでした。

いつもの挨拶だってしちゃいます。

「こんにちは、白ちゃん」

「あ、さくらちゃん。こんにちは」

「調子はどうですか？」

「うん。いつも通りだよ」

そう言って、白ちゃんは青白い顔で微笑みます。こほ、とちいさく咳をして、一本いっぽんとても細い髪の毛が、肩の上で揺れました。

「こんにちは。呉内さん」

「先輩も、こんにちはです」

先輩も前のように、白ちゃんに会いに来てくれています。

変わったことと言えば、白ちゃんの先輩を見る目ででしょうか。

夢みる乙女チックなのは相変わらずですが、今はまるで、獲物を狙う猛禽のようです。明らかに恋文を意識した、するどい眼光。先輩のいいところを、というより白ちゃん自身が好きなところを、もう一度心に刻み直そうとしてるんでしょう。

目付きは真剣だけれど、怖いとか険しいとかいう雰囲気はぜんぜんないです。

むしろ、かわいい。

まるでうさぎとかねことかの小動物が、一生懸命になって狩りをしてるかのよう…… 本人的には真面目なんだろうけど、見てるこっちは和む様子です。

恋文の進み具合とか、聞きたいんですけど。流石に先輩がいたら、むりですね。

ちなみに、今日は涙未ちゃんはいません。昼休みに来たと思ったら、わたしの顔を見るなり「今日は大規模アップの日だった！」とか叫んで脱兎の如く出て行きました。意味が分かりません。なんでわたしの顔を見て。そんなだから寝すぎなんですよあのひとは。

涙未ちゃんが帰った理由はどうでもよくて、今だいじなのは、わたしの話し相手がいないということです。

一咲ちゃんは、いつものように……というか、恋文の話が出てからこっち仏頂面がブーストされていて話しかけづらいですし、先生は何だか忙しそうです。

仕方ないので、隣のベッドに意識を集中するわたしです。

白ちゃんと先輩は、何だか甘いものの話で盛り上がっている様子。うちの高校周辺はなぜだかやたらと甘いお菓子の店が多く、女子の間では常套の話題となっています。

「やっぱり黒蜜きなこパフェが人気なんですネ」

「うん。でも若干、とりあえず黒蜜きなこにしておけばオツケーみたいなのがあるかもしれないね、あそこって」

「あ、確かにそうかもです。本日のオススメが、黒蜜きなこパフェ、プラス黒蜜きなこラテになってたときはちよつと笑っちゃいました」

これはどうやら、創作菓子「まじやーる」の話みたいです。あそこは黒蜜きなこが必殺技なんですよね。創作菓子と言うだけあってしよつちゅう新作を出してはいるけれど、割りと前衛的なのが多いところが特徴、らしいです。好き嫌いが別れるタイプですね。さつまいも納豆パフェとか、どうなんでしょう。

「意外とあの納豆の食感が、ぎゅうひのもっちり感と合うんだよ」「へえ……」

ここに愛好家がありました。

とゆうか、ぎゅうひなんか入ってたんですかアレは……。アートです。

前衛アート系メニューはともかく、黒蜜きなこ系はふつうにおいしいのでたくさん食べたいんですが、残念ながらわたしはほとんど味わったことはありません。ゆえに今の白ちゃんと先輩の話には、ちよつと生殺し感があって苦しいです。

はあ。

だいたい先輩、男性なのに甘党ですか。しかもお店巡るほどって、

一緒に入る相手とか必要なんじゃないですか。それとも一人で食べ歩いてるんでしょうか。謎です。

あと白ちゃんもあんまり食べに行けないだろうから、おなか減るだけじゃないんでしょうか、この話題は。

でも白ちゃんは心底楽しそうで……。だから、まあ、いいんでしょうか。

わたしは何となく、一咲ちゃんにアイコンタクトを送ります。

(いいんですか。このままで)

一咲ちゃんは初め眉をひそめていましたが、わたしの必死の想いが通じたのか、ゆっくりとこちらに歩み寄って来ました。

側まで到達すると、一言。

「あとで葉桜も一緒に行こう。まじやーる」

「え。あ、はい」

一咲ちゃんは言い終えると、元の位置に戻って行きました。軽におなかをさすりながら。そういえば一咲ちゃんも、割と甘党でしたね。

一咲ちゃんはそのまま、窓の外の夕暮れを眺めます。ちょっと目が、遠い感じがしました。

+ + +

「か、書けないよう」

恋文を書こう！と言ってから四日経った頃、白ちゃんは弱音といつしよに保健室に現れました。

「だ、だめそうですか……？　ところで、それは？」

白ちゃんは胸に、B5サイズの封筒を抱えていました。

「うん。下書きなんだけど」ドサッ。

やたら重厚な音を響かせて机上に置かれた封筒からは、ルーズリーフの束がはみ出ています。

見た感じ……五十枚くらいありそうですけど……。

「それ、全部ですか……？」

「うん。そうだよ」

書けてるじゃないですか。

というか、書きすぎです。

「うまく書けなくって……」

「そ、それなら分かりますけど」

文字通り、想いが溢れちゃってます。すごいなあ。

「ねえ、お願いがあるんだけど」

「何ですか？」

「これ、見て欲しいんだ……」

「えっ」

恋文を？

白ちゃんの？

「い、いいんですか？」

確かに興味はあります。ありすぎるくらいあるんですけど、いいんでしょうか。

「うん。どうしてもうまく書ける気がしないし、それに、みんなならいいかって」

「そういうことなら、ぼくらに任せて！」

「うおわ！」涙末ちゃんがきゅうに後ろから声かけるから、思わず女のこらしくない悲鳴を上げてしまったわたしです。

「ついさっきまで、寝てたのに。わたしのベッドで」

「ぼくのね」涙未すけめ。いつかベッドの真の所有者を巡って決闘しなければ。

「イベントの香りには敏感なのさ。ぼくは」

「遊びじゃないんですよ？」

「分かってるよ。ちゃんと見るから」にやにやしながら言っても説得力ないです。

ここは、一咲ちゃんに何とか言ってもらわねば。

「一咲ちゃん、何とか言っ」

……言えそうもないですね。彼女の視線はルーズリーフに釘付けです。ガン見です。可愛さ余って憎さ百倍みたいな、いえ、この場合はむしろ逆……？

「しっかり見させてもらうよ。白たんの、愛情をね」

愛情の部分だけ当然のように強調する涙未ちゃんを、白ちゃんは真っ赤になってばかり叩きます。まったく、遊びじゃないって言うてるのに。

さて、不真面目な涙未すけは放って置いて、じっくり見させてもらいましょう。

とつぜんこんなお手紙を出して、驚かれるかもしれません。でも、どうしてもお伝えしたいことがあって、書きました。

書き出しはふつうですね。

思い起こせば、四月十九日のお昼休み。私は気分を悪くしてしまい、廊下に蹲っていると……

その次には、先輩との出会いのくだりが来ています。日付がきちり書いてあるところが、印象の強さを物語っていますね。

そこからは、そのときの先輩の格好良さ、そしてどれだけそれに感動したか、といったことが延々十枚以上に渡って書き綴られていました。

私をおぶって保健室まで運んでくれた先輩の背中はとても広く、暖かく、私はまるでふわふわとした羽毛にくるまれて運ばれているような、夢のような気持ちでした。せかいがまるで、天国のような。

超。ホエミイ。さすがです。しかもこの辺りは、とくに入念に消し

ゴムで修正した跡があります。その前のふつうに書いてるところはぜんぜんそんなの、なかったのに……。こだわってます……。

その辺りから段々テンションが上がってきたのか、ポエミイと言うにも生ぬるい、少女趣味のメルヘンセンテンスが連なり始めます。というか、すごい。夕足王子と白ちゃん姫の一大ラブロマンス。そのまんま少女漫画にしてもよさそうです。

ゆりの花畑に囲まれて、私の口もとに先輩の甘い蜜が触れようとしたときの私の気持ちといえば、大ぜいの動物たちが一斉にあられ出したみたいで、

もはや何のことだかさっぱり分かりません。しかもちよつと、えろちつくです……。

真夜中に書いていて、見直さなかったに違いありません。やつぱりそのままお話にするのはむりかも。

「白、ここはもつと情熱的に」

一咲ちゃんの口から、彼女がいちばん言いそうもない言葉が出たのに驚いて振り返ると、二人で一枚のルーズリーフを見詰めながらうんうん頷いていました。

どんな感じかと思って覗いてみれば、

先輩のことを考えると、ときどき死んでしまいそうに胸が熱くなります。

いや、死ぬしかないですし。これ以上情熱的にするならば。ルーズリーフから顔を上げると、二人と目が合いました。

「……まじですか？」主に一咲ちゃんに問いかけますが、

「何が？」どうやら彼女は大まじです。

「……」

二の句が継がないわたし。

すると、

「わ、白たん大胆！」

今度は、向うで後半部分を読んでいた涙未ちゃんが奇声をあげました。

「ねえみて、ここすごい！」

「何ですかいったい、落ち着いて」

甘いもの好きな先輩を食べてしまいたいくらいです。

「……」

「ね、すごいでしょ？」

わたしは軽くこめかみを押さえました。たしかに……すごいです。けどもね？

「……白ちゃん」

「は、はい」

「ここ、削除」

「えーっ！」

むしろそんなにびっくりされることにびっくりです。

涙未ちゃんからルーズリーフを引たくって見てみれば、最後のほうはまさにカオスの樂園です。日本語の新境地、文学への挑戦、一迷文以外の存在が許されていません。恋文を遥かに超えて、幻想文愕へと飛翔しています。

「これじゃ、ちょっと……。あたかも青空妖精が星の海で水浴びするときに飛び散るきらきら銀貨のように曖昧もこととしていて……何というか、せかいがあやふや……」

……感染りました。

「……ともかく。さすがに五十枚は多すぎます……先輩も、疲れちゃいますよ」

「そ、そうだよね」

「せめて二枚くらいにまとめましょう。ええと、とりあえず最初は

いいとして」

ひたすら茶化す涙末ちゃん、不思議な情熱理論で文章量を増やそうとする一咲ちゃんとやりあいながら、わたしはすこしずつ恋文を直していきました。

「……今日はこのへんでしょうか」

何度か全部直してくださいと言いかけてましたが、かるうじて思いとどまり、分量を当初の十分の一くらいに圧縮することに成功しました。疲れた。もうすっかりお外は真っ暗です。

「……短い」だまらっしゃい。

「面白文章が消えちゃった」自分で書きなさい。

「あ、ありがとう、みんな……これで何とかなるかも」

白ちゃんが今日の成果、数枚の真っ黒なルーズリーフを握り締めて言いました。

確かに何とかかなりそうな感じです。けれど。

何か、足りないような気がするんですね……。

「さくらちゃん？」

恋文に必要なもの。相手を恋い慕う心。

先輩のことが、好きですという気持ち。

現在バージンの恋文には、それは溢れんばかりに書き込まれています。そこはもう、十分すぎるくらいに十分と言えるでしょう。

でも、それだけで、果たしていいんでしょうか。もっと書くべき何かを、わたしたちは忘れているんじゃないでしょうか。

「どうしたの？」

わたしは、選別の結果切り捨てられたルーズリーフの束、元恋文候補たちの墓場を暴きました。

きゆうに真顔で没恋文を漁り始めたわたしを、みんな怪訝な表情で見えています。

やがてわたしは、そのうちの一枚に書かれた文章に目を留めました。

皆がふつうにできるようなことも、私にはできないことがあります

「……これです」

悟りました。

今の恋文に、足りなかったもの。

わたしはみんなに向けて、ニヤリと笑ってやりました。

第十五話

足りないものが分かったからといって、即完成というわけでもなく。ゆえに今のわたしの頭の中は、白ちゃんの恋文でいっぱいなわけです。

だからなのか。

「……あれ」

次の日の放課後、わたしは気付くとひとけのないところまで歩いてきてしまいました。

「むっ」

ちよっと、考えごとに集中すぎたようです。

今日はこんなことばかりです。朝は教室を通り過ぎましたし、昼休みはトイレで延々過ごしました。とうぜん授業なんかさっぱり覚えてません。むしろ、わたしならこう書きますみたいな妄想恋文を一生懸命したためていました。我ながら笑っちゃいます。誰かに見られたらどうしよう。

とゆうか、ここ、どこでしょう。そう思って、わたしは周りを見回しました。

どうやら、学校の敷地の隅のほう、以前わたしたちがねこのシロと遊んだ場所のようです。

ずいぶんへんなところまで、歩いてきてしまいました……。すぐ保健室に行かねば。

と、わたしは踵を返しかけたのですが、奥からふと人の声が聞こえた気がして、わたしは建物の影から顔を出しました。

月島さんと夕足先輩がいました。

びったーんと音がする勢いで、わたしは顔を引つ込め背中を壁に張りつけます。びっくりしました。無駄に心臓がドキドキしてます。いや、べつに隠れる必要はないんですけど。どうもこの間の体育のとき以来、月島さんとは顔を合わせづらいです。何か言われそう

で。

しかも、今は先輩と一緒にですし……。白ちゃんをあんな目に合わせたひとと、まだ一緒にいるとは。煮え切らないひとです。

当然の流れとして、わたしは影から様子を伺います。

なんだか前にもこんなシチュエーションがありましたね。涙未ちゃんが、先輩が女子と二人っきりで話しているという情報を持ってきたとき。校舎の屋上で。あときは涙未ちゃんと二人で覗いてましたが、いまは一人。妙な心細さを感じます。

月島さんと先輩は、どうやらねこのシロと遊んでいるようです。

なんと、わたしたちと同じことをしているとは。悔しい気分。

先輩め。いつか問い詰めてやろうとわたしは心に誓いました。

さて、わたしがいる位置からはすこし遠いですが、月島さんがどんな表情がしているのかは、よく分かります。

向うは自分たちのことに集中していて、つまり、いわゆる二人の世界というやつで、わたしには全然気付きそうもありません。

そのことに助けられて、わたしはすいぶん長いこと、彼女たちのことを見ていました。

というのも、月島さんの様子が、すいぶん楽しそうだったからです。

いえ、楽しそうなのは当たり前かもしれませんが。月島さんも夕足先輩のことがすき。先輩と二人きり、人気のないところで遊んでる。楽しくないといったらうそな状況です。

そう、すこし遠くて表情がよく見えなくてもわかるくらいに、彼女は楽しそうで、幸せなオーラを出しているのです。

似たオーラを、わたしは知っていました。

このところ毎日のように、最近はすこし間が空きましたが、保健室でそんなオーラを出していた女のこをわたしは知っています。

白ちゃん。

いま、月島さんが周囲に振りまいている空気は、白ちゃんと同じでした。

桜色で花の香りがするようなしあわせ気分。いわゆる「恋する乙女」の気配。

だから、わたしは、目が離せなかったのです。恋敵とは、どういうことか。

それを、わたしは今、ようやく理解した気がしました。月島さんも白ちゃんと同じで、先輩のことが、すきなのです。

あのとき体育館の外で白ちゃんを責めたひとと、今先輩の前で幸せそうにしている女のこは、同じ人物なのです。

わたしたちが必死になっているように、月島さんもまた、必死だったのかも……しれません。

しばらくすると、急に月島さんの様子が変わりました。幸せそうな感じが薄れて、別のものに。

怒ってそうな？ それとも、困ってそうな？

どうしたんだろう、と耳をそばだてていると、彼女はひときわ大きな声を出しました。

「だって、あれは、衣花が！」

白ちゃんの話。

それで分かりました。

前に月島さんが白ちゃんに言ったことについて、先輩は注意してくれているのでしょう。

夕足先輩、煮え切らないばかりじゃなくて、やることはやってくれますね。すこしだけ見直しましたよ。

月島さんは、顔を赤くして反論している様子。彼女にとってもよほど譲れないことなのか、ずいぶん剣幕です。

でも、やがて、その勢いは萎んでいきました。

先輩が根気よく諭してくれたおかげなのか、彼女はだんだんと言葉少なになり、今はついに黙ってしまいました。

その様子、表情は。

ぐっと両のこぶしを握り締めて、唇を強くかみ、くやしそうな視線は地面に落ちて動きません。もしかしたら、震えているのかもし

れません。眉根に深くしわをよせ、じつと、先輩の前に立ち尽くしています。

その頬が、何かすこし違うかんに赤くなっていき、だんだんと目元が……。

それを最後まで見届けずに、わたしはその場を、そつと後にしました。

何だか複雑な気分でした。もしかしたら、見ないほうがよかったかもしれません。

+ + +

「でっ、できたよ!」

「やりましたね!」

「白たん、おつかれさま!」

「……短い」

保健室に、歓声がこだましました。

約一名未だに不満そうなひといますが、今、ようやく、白ちゃんの恋文が完成したのです。十回を超える改稿をくぐり抜けてきた、歴戦の一筆です。

「あ、ありがとう、みんな、本当に」

いつそ泣きそうなくらい、白い頬を桃色に染めて、白ちゃんは完成した想いの結晶を抱きしめます。

「いえいえ。というか、まだお礼を言うのは早いですよ。先輩に手渡して、無事付き合うことが確定したときが真の勝利!」

「つつ、付き合っ」

目をまんまるにして湯気をふき出す白ちゃんです。

「ね、それ、けっきょくどうなったの?」

涙未ちゃんがそんなことを言いました。彼女は途中から直しに参加しなくなったので、最終形を知らないのです。

「興味あるなあ。見せて!」

でっ、デリカシーのないひとです。いくら最初、白ちゃんのほうから直してと頼んだとはいえ、

「う、うん。いいよ」

いいんですか。おおらかですね。

「ありがとうございます！」

涙未ちゃんは嬉しそうに便箋を受け取ると、

「どんな面白文が書いてあるのかなあ」

などと失礼なことを呟きながら、恋文を読み始めました。

夕足先輩へ

とつぜんこんなお手紙を出して、驚かれるかもしれません。でも、どうしてもお伝えしたいことがあって、書きました。

初めて先輩と出会ったのは、私が具合を悪くして、廊下で動けなくなってしまったときのことでした。

あのときは、助けてくれて、本当にありがとうございました。うれしかったです。私、あんな風に助けられたこと、初めてでしたから。

それから先輩は、ろくにお礼も言わなかった私に、会うたびきちんと挨拶してくれたり、声をかけてくれました。名前も覚えてもらえて、申し訳ない気持ちになっちゃったくらいです。

毎日、先輩のことを考えています。

今何してるんだろうとか、

休みの日は何してるんだろうとか、

どんな女の子が好みなのかなとか。

先輩のことを考えると、夢の中にいるみたいに体がふわふわして、ぼんやり温かい気持ちになります。

私は、先輩のことが好きです。

「ふえー……」

そこまで読んだ涙未ちゃんは、微妙に顔を赤くして、へんなため息をつきました。

まあ、そうですね。恥ずかしくもなりますよね。わたしだってそうですし。

まだ微妙にポエミイな部分が残っていますが、むしろ白ちゃんの独自力ラーとして有効に機能している、といいんですが……。

「まさに、ラブレターだね」

「というか、涙未ちゃん。もう一枚あるので、読むならそっちも」

「あ、うん」

そして涙未ちゃんは二枚目を読み始めました。

先輩も知っていることだと思いますが、私は体が弱いです。

先輩のことを考えるとき、どうしてもそのことを思い出してしまいます。

最近、先輩は、よく保健室に来てくれました。

だけど、本当は迷惑なんじゃないかなって思うことがあります。

本当は、私のほうから会いにいきたいです。でも、それはできません。

こんな私に好きだと言われても、先輩は困るかもしれません。でも、私にだって、ひとに負けないことがあります。

それは、楽しいことを、楽しいこととして受け止めることです。

体が弱い私だから、みんながふつうにやっていける楽しいことを、私はあまり経験できませんでした。

だから、みんなにとって平凡で、何でもないことでも、わたしに

は幸せだと感じられたりします。

みんなが知らないちいさな幸せを、私はたくさん知っている、つもりです。

私は夕足先輩と一緒に、そんな幸せを感じたいです。

だから、こんな私でもよかったら、付き合ってください。

衣花 白

これが、白ちゃんの恋文です。

二枚目は最後を除いてあんまり恋文っぽくないかもしれませんが、でも、必要な一枚だと思います。やっぱり一枚目だけでは、片手落ちというものでしょう。

これが、初めての恋文に足りなかったもの。

二枚目には、白ちゃん自身の、けてして目を逸らしてはいけない大切なことが書いてあるのです。さらに、そのことを逆手に取っていいところをアピール。かんぺきです。

「……」

涙未ちゃんは、言葉もなく便箋を見つめています。読み返しているようです。とくに二枚目を。

その目は、ずいぶん真剣になっていました。

「……うん。いいね、これ」

やがて目を離すと、一言だけ、感想を述べました。白ちゃんは安堵のため息をもらします。

一咲ちゃんは便箋を一瞥し、

「……短い」まだ言いますか。

「いいじゃないですか。長さよりも内容ですよ」

「それは、そうだけど」

「これじゃだめそうですか？ 一咲ちゃん的には」

「そんなこと、ないけど」

すこしずるい言い方かもしれないけどね。だめなんて、口が裂けても言えないでしょうし。でも、そうじゃなくても、だめ出しはしないはずです。

「よしっ」

みんなが見終わったのを確認した白ちゃんは、便箋の封入を始めました。

薄い桃色地に、ちいさな花がたくさん散ったかわいらしい便箋。

その上に整然と並んで先輩の目に触れるのを待つのは、白ちゃんが想いを込めてひとつずつ綴った、手書きの文字たちです。

いま、二枚の便箋が、対となる封筒に収められていきます。

それが終わると、花を象ったシールで、白ちゃんはそっと封をしました。

すると出来るのは、正真正銘白ちゃん謹製、伝統的な乙女結晶。

すなわち恋文です。

「あとは、渡すだけですな」

白ちゃんは不安と緊張と期待と決意と……、とにかく色々なものが混じり合った表情で、大切な封筒を抱きしめて、頷きました。
はつきりと、力強く。

+ + +

次の日のこと。

「う、う、う、うつ……」

わたしの目の前には真っ白に塗られた木の扉。

「うつっ」

その場に満ちるのはすこしきつめの、シトラスの香り。

「うーっ！」

足元には清潔感のあるタイルが敷き詰められています。

「……はあ」

おなかいたいです。

ゆうべの食事が原因です。白ちゃんの恋文完成記念で、調子に乗ってお肉を食べ過ぎました。ちよつとくらい大丈夫だろうと思ったんですけど、やっぱりだめ。この体質が恨めしい。

今日は白ちゃんが先輩に恋文を渡す、大切な日。

なので無理して来ましたが、けっきょく朝からトイレに引きこもりっ放し。もうお昼休みです。保健室登校ならぬトイレ登校。何者ですか。

この学校のトイレはとても素敵なので、助かってますが……。掃除のおばちゃんが潔癖らしく、常に極めて清潔なのです。流石に我が家の城には及ばないものの、十分に及第点と言えるでしょう。まあ、その辺りも含めて学校選びしたんですけども。

進学するときも絶対トイレはきれいなところにしよう、とわたしが決意を新たにしていると、数人の女子が話し声が聞こえてきました。

第十六話

「あーっもーサイアク、来週もテストってどうゆうこと？」

「ホントだよなー、まとめてやれっての。まあべつにどうせ何もしないからどうでもいいけど」

「はは、ま、そだね。テキトーにね、テキトー」

扉を開ける様子がないので、どうやらお化粧直しか何かしに来たようです。

彼女たちはお喋りしながら、がそこそやっています。
すると、

「ん、沙耶子、何それ？」

「うわあ、月島さんがいるようです。何だかちょっと微妙な気分になるわたしです。」

「何が？」

「これだよ」

その場の皆が、月島さんの持っているらしい何かに興味を示したようです。

「手紙？　ってうわっ！　ラブレターみてー！」

なるほど、ラブレター！。

……え？

「えっマジ？　沙耶子、ラブレター！？」

「ちっ違っって！　あたしじゃないって！」

月島さん。ラブレター！。

何か、嫌な予感が。

彼女も夕足先輩に、恋文を書いて渡そうとしてるんでしょうか。
でも、今日？　白ちゃんが渡そうとしてるこの日に？

そんな偶然、あるんでしょうか。

「ま、そりゃそうだね。やらないよなあ普通」

「すっごいねこれ。乙女チックってゆうか……存在自体が恥ずかし

くない？」

いえてるー、と盛り上がる女子たち。何だかいたたまれない気分になってきます。

「つてかこれ、何？ どしたの？」

「とりあえず中身見ようぜー」

誰かがそんなことを言い出しました。

背筋を、寒気が駆け下りました。

まだ、白ちゃんのだと決まったわけじゃありません。でも。

「よし、見よう見よう」

その場に誰も、それを止めようとするひとはいませんでした。

「えー、いいのー、そんなことしちゃって？」

そう言うひともいましたが、声が笑っています。本気では、ありませんでした。

ぴりぴりとシールが剥がされ、かさりと封筒が開かれ、紙が擦れる音が、やけにはつきりと聞こえてきます。

「『夕足先輩へ』」

ああ。

「『とつぜんこんなお手紙をだして……』」

読み上げられる、手紙の文面。内容は、よく知っているものでした。

間違いなく、それは、白ちゃんの書いた恋文でした。

朗読は、残酷に、続きます。終わるまで、わたしは固まって動けませんでした。

どうして？

白ちゃんの恋文が、こんなところに？

いや、それよりも、白ちゃんは今頃恋文がなくなって困っているのでは？

告白は？

「すっすっげー」

「ラブレターだ。マジラブレターだ」

「どうする？ どうするよこれ？」

しばらく、そんな騒ぎが続く、

誰かの放った言葉が、わたしの心臓を一瞬、止めました。

「さらしちゃうのとかどう？」

さらす？ 白ちゃんの、恋文を？

何を言っているのか分かりません。いえ、分かりますが、分かりたくありません。

この世でたったひとり、先輩にだけ向けられている白ちゃんの大切な気持ちを、みんなの前に曝け出す？ たった今ここで読み上げられただけでも最低のことなのに。

「うわっ、鬼！」

「それはヒドイ！」

「ね、どうよ？ 沙耶子」

誰かの声が、月島さんに問いかけます

「え？ あ、ああ、そうね」

そのとき、わたしの脳裏に、先輩の前で俯く月島さんの様子が浮かんできました。もしかして、月島さんなら止めてくれるんじゃないか。こんなばかなこと、やめさせてくれるんじゃないか。先輩にたしなめられて、改心した月島さんならば。

「じゃあちよつと、あたしにやらしてよ」

はっ？

いま、このひと、なんて言いました？

「うっわー沙耶子つまジ？」

「こんな恥ずかしいのさらしちゃうなんて、ヒトデナシだ！」

……そうですか。

そういうことですか。全然、反省なんかしてませんでしたか。ただの勘違い、わたしの早とちり。期待したわたしが、ばかでした。そうですよね、あれだけ、白ちゃんにひどいこと言っておいて。反省するなんてありえないですよ。

……つきしまさん。

あなたと、いうひとは　　！

（　　うつ！）

勢いのままに席を立とうとしたわたしは、おなかを襲う激痛に着座を余儀なくされます。半端じゃない痛みでした。こんなときに、一大事だというのに。意思とは関係なしに、顔が白くなるのが分かります。へんな汗が出てきて、きもち悪いです。ああもう、昨日お肉なんかむさぼるんじゃないかった！

「じゃっ、じゃあ、これ預かつとくからさ。もう行こうよ」

月島さんがそう言くと、女子たちはトイレから出て行きました。まずい。

早く、追いかけないと。

白ちゃんの恋文、取り返さないと……。

だけど、まだおなかの痛みがおさまりません。うつつ、とつと静まりなさいつわたしの胃腸。いいこれから！

信じられません。月島さんめ。つきしまさんめ！　そんなに、そんなに嫌がらせしたいですか。そこまで白ちゃんが嫌いですか。邪魔したいですか。

ゆ、ゆるさないです。

絶対つかまえて、恋文返させた上に今までのこと洗いざらい謝ってもらわないと、もう、腹の虫が治まりません。ぜったいに。ぜったいです！

わたしはようやくトイレから脱出して、左右に伸びる廊下を見渡しました。

月島さんの姿は、見えません。

当たり前です。もう二十分は経ってますから。わたしの胃腸は心底、だめなやつです。

というか、実はいまだにおなかいたいです……。

「うつ」

いつまでもトイレにこもってるわけにも行かないので、無理矢理中断して出てきました。

そんなことは、でも、どうでもよくて。早く月島さんを、探さねば。

「うわ、もみじ。顔色悪いよ」

ああ、そんなわたしに声をかけてくれるのは誰？
と思ったら涙未ちゃんでした。

「涙未ちゃ……」

「だ、だいじょうぶ？ 保健室まで連れてこようか？」

「いえ、それより。一大事、です」

「えっ、なに？」

わたしは痛むお腹を必死になだめつつ、かいつまんで事情を説明しました。

最初はいつものお気楽表情だった涙未ちゃんも、説明が終わる頃には、ときどき見せる真面目顔に変わっていました。

「……やばいじゃないか」

「やばいです。早く、月島さんたちを」

「う、うん。いま、昼休みだし……教室にいるかな？」

「そうですね……わたしは、ちよつと、動けそうにないので、お願いです……」

「う、うん。あっそうだ、白たんに教えとかないと」

いっしゅん頷きかけたわたしでしたが、

「待ってください。もし手紙なくなつたことに気付いてなかったら、無駄な心配をかけることになります……先に一咲ちゃんにかけましよう」

歩き回って体調崩されたりしたら、コトです。気付く前に取り返して、問題じたいを消滅させてしまうのが一番です。

「わかった」

「白ちゃんにはとりあえず何も伝えないで置いて、保健室に避難してもらうことに」

頷き、涙未ちゃんは携帯を取り出して、電話をかけます。

わたしがかけてもいいんですが、おなか痛すぎて正直携帯いじるのさえ億劫です。

一咲ちゃんは無事捕まった様子。

「さっちゃん来てくれるって。白たんも一緒だったみたい。ちょうど保健室にいたから、薬も持ってきてくれるって」

「それは、ありがたいです……」

飲んですぐ効くものでもないですけど、ないよりあったほうが遥かにマシです。

「あと、さっちゃんも月島サンのこと見てないって」

「そうですか……」

「じゃ、じゃあ、ぼく行くよ。まず三組に行ってみる」

「分かりました。お願いします……」

そう言って涙未ちゃんは、心配そうな顔をわたしに向けつつも、

三組 月島さんのクラスへと駆けて行きました。

わたしはわたしで、よろよろと廊下を歩き始めます。とにかく動いてないと気が済まない状況です……うう、本当は涙未ちゃんと一緒に三組に行きたいのですが、あそこはトイレからやたらと遠い位置にあるのです。今のわたしには、この校舎のおかしな構造を全力で呪うことしかできません。

「葉桜」

おばあさん以下の鈍足行軍を敢行するわたしの背後から、一咲ちゃんに来てくれました。

「これ」そう言って差し出してくれたのは、胃腸のお薬と、スポーツドリンク。

一気にそれを飲み干して、わたしは一息つきます。

「大丈夫？」

「はい、すこし落ち着きました。ありがとうございます」

まだしくしく痛みますけど、だいぶマシになりました。たぶん正確には「なった気がした」だけなんでしょうけど、薬飲むとその瞬

間から体が楽になります。これもプラセボ効果の一種なんですか。

「白、いま保健室にいるよ。とりあえず保健室から出ないように言っておいた。手紙なくなっただこと、まだ気付いてない」

「ナイスです。じゃあ、わたしたちも探しましょう。……涙未ちゃんから連絡がないってことは、たぶん三組にもいないんでしょうが……」

その瞬間、一咲ちゃんの携帯に着信。

「やっぱり、三組にはいないって」

涙未ちゃんの報告だったようです。

「葉桜は、保健室行っただろうが」

一咲ちゃんはそんなことを言いますが、

「……いえ。この状況でそんなこと、言ってられません。手分けして」

「でも」

聞き分けのない一咲ちゃんを、わたしはキッと睨みつけました。

「わたしの体のことなら、今無理して体壊しても、薬飲むなり、最悪病院行けば治ります。でも白ちゃんの恋は、ここで終わってしまったら、元には戻せないです」

それでも一咲ちゃんは動きません。

「わたしの体と、白ちゃんの恋と、どっちが大切か。そんなの決まってるじゃないですか」

一咲ちゃんの瞳が、一瞬 とても哀しそうに、ゆがみました。

「……ごめん、葉桜。私行く」

「はい。凶行、断固阻止です」

一咲ちゃんは振り返り、駆けて行きました。

その背を見送りながら、わたしは思います。動けないので、考えるしかないのです。

月島さんは、どこに行っただんでしょう。

教室にはいない。

でも、月島さんの目的は手紙を晒すこと、です。だったらひとがたくさんいるところ、すなわち教室に行くのが筋ではないんでしょうか？

いえ、待ってください。今は昼休み、となれば、人がたくさん集まってるところは他にもあります。学食とか。校庭　には、あんまりないかもしれませんが……。

ともかく、昼休みの間は、割と皆さん散らばっています。授業が近付くと戻ってきますが……。とすれば、その頃までは彼女も何もしないかもしれません。

いや、時間的余裕があるのはいいですが、けっきょく月島さんを見つけられなかったら無意味です。じゃあどこにいるのか、というと、正直見当が付きません　。

うう、ループです。けっきょく、しらみ潰しに校舎内を探し回るしかないのかも。

連絡がないということは、涙末ちゃんも一咲ちゃんも、まだ発見できていないんだと思います。焦ります。どうしよう。

と思った瞬間、

わたしの携帯に着信がありました。

どきつとして、慌てて携帯を開きます。

かけてきたひとの名前を見て、わたしは更にびっくりしました。

液晶に表示された、そのひとの名は　、

衣花、白ちゃん。

第十七話

わたしは、ようやくの思いで保健室の前に辿り着きました。なんと、保健室に月島さんが来たというのです。

それが白ちゃんからの電話の内容でした。とにかく早く来て、という声だけ残して電話は切れました。

白ちゃんの声、ちよつと震えてた気がします。

それはそうでしょう、相手は月島さん。体弱かったら幸せにならないとか、酷いことを散々言われた相手なんですから。トラウマにだってなるうというものです。

緊張した面持ちで、わたしは扉を睨みます。この向うに、月島さんがいる。言い合いになるかもしれないし、場合によってはもっと酷いことになるかもです。何を思っただけで保健室にやってきたのか、知りませんが、

わたしには、心強い味方がいます。

それも二人。

「二人とも、準備はいいですか。心の」

「うん」

「いいよ」

白ちゃんの連絡の後、心配してわたしのところに来てくれた涙未ちゃんと一咲ちゃんです。どっただけでも先に行ってくれば、とも思いましたが、でもわたし一人では心細かったのも事実。今はこの味方の存在に、素直に感謝すべきでしょう。

「……先輩にも、メール入れておきましたから」

わたしは移動中に、夕足先輩に短く状況を伝えておきました。あんまり頼りきりにはなりたくないのですが、状況が状況です。もしものときは、あのひとが対月島さん最終兵器になってくれるはずで

す。
でも、わざわざ待つてる余裕はありません。

「……では、いざ」
低く呟き、二人も頷き、わたしは保健室の扉を、おおきく開け放ちました。

「……見つけました」

ひとつを除いて、いつもの保健室。白い床と天井。薬棚。書類の散らかった先生の机。ベッドのカーテンは開け放されていて、そこには白ちゃんが座っています。

そして部屋の隅には、白いイメージの保健室からは浮いた存在、
「……月島さん」

微妙な茶髪に褐色肌の、月島沙耶子さんが立っていました。
じっと見つめると、わたしたちの剣幕に気圧されたのか、月島さんは目を逸らして俯きました。

まず口火を切ったのは涙未ちゃんです。

「月島サンさ、白たんの手紙、持つてるんでしょ？ 返しなよ。つていうか、嫌がらせにも程があると思うよ？」

「……え」

月島さんは顔をすこし上げて、ちいさな声を出しました。

「白に、何するつもり？」

次に一咲ちゃんが、聞いたこともないくらい低い声で糾弾します。
「あれだけ酷いことを言っておいて。まだ気が済まないの？ これ以上、白に何かしたら、許さないから」

「……う」

月島さんは、一咲ちゃんの迫力に押されてか、一歩あとずさりしました。

「白ちゃんの手紙、返してください」

続いてわたしは、前に出て、手を差し出しました。

「だいじな手紙なんです。あれが、白ちゃんにとってどれだけ大切なものか……。あれは、あなたの軽々しい気持ちで、他のひとたち

の目に触れていいものじゃないんです。

あなたは知らないでしょうけど、白ちゃんは、ずっと大変な目に会ってて……。最近ようやく、先輩というひとを見つけて幸せになれそうだったんです。なのに、あなたのせいだ」

後ずさる月島さんを追うように、わたしは一步、また一步、詰め寄ります。

「白ちゃんの気持ちも分からないくせに！ あなたに、白ちゃんの幸せを壊す権利なんか、ないはずですよ！」

返してください！ 白ちゃんの手紙、早く、返してください……！」

白ちゃんのために。白ちゃんの幸せを願って。

わたしは、力いっぱい手を伸ばして、月島さんに突きつけました。できる限りの意志を込めて、月島さんの両目を見据えます。

簡単には返してくれないかもしれません。でも、手を伸ばして、キツと見つめれば、すこしだけでもこの気持ちが伝わるかもしれないと思って。

わたしだって、必死です。緊張しています。じつはちょっと、泣きそうです。

でも、ここは絶対、退けません。退いたら、白ちゃんが。

「そうだ、返してよ」

涙末ちゃんも一咲ちゃんも、わたしに加勢してくれます。そのことに勇気を得て、わたしはまた一步、月島さんに詰め寄りました。

わたしたちが一步進むと、月島さんは一步後退します。

何度か、それを繰り返ししていると。

「う、」

月島さんの顔が、すこし赤くなりました。

「あ、あ、」

眉根に深く、皺が寄ります。

「あ、あ、あたしだって」

くちびるが、わなわなと震え始めました。

そして。

「せつ、先輩のことが、すき、なんだよう……、うつ。うえええん

……、」

「!?!」「!!」「んえっ?」

……なっ。

泣いた!?

「うつう、あ、あたしだって、あたしだってえ……」

わたしは、うろたえました。

だって、これは、反則です。反則ですよね!?

月島さんは子どものようにその場に座り込んで、本気モードで泣き始めました。心の汗がぼろぼろです。涙の粒とか見えています。まじです。まじ泣きです。

「え、えつとね、みんな」

今まで黙っていた白ちゃんが、おずおずと声をかけてきました。

「あの……、もう、手紙、返してもらったよ」

「えっ」

「手紙、落としちゃったみたいで。月島さんが拾ってくれて、ここに届けに来てくれたの」

え。

「だから、えつと。さくらちゃんたち、なんで怒ってるの?」

……。

わたしたち三人は、お互いに顔を見合わせました。

なんで怒ってるの、って。

「……一咲ちゃん。白ちゃんに事情、説明してなかったんですか」

「え、あ、うん。言っていないって、もう言った」

「……言うなって言ったの、もみじちゃん」

思わずそんな、意味のないやりとりだってしちゃいます。

理解不能ですみたいな顔の涙未ちゃん。

困惑した様子の一咲ちゃん。

白ちゃんは月島さんを何だか憐れみの目で見ていて、

月島さんは、子どもみたいにまじ泣きです。

えっと……。これは、もしかして。

「あー、キミたち」

傍観者だった浅川先生が、わたしたちに止めを刺そうと立ち上がりました。

やめてくださいもう分かりましたから、と言う間もなく。

「勘違い、ってやつね。……悪者だな、今回ばっかは」
うわー。

何だかいたたまれなくなつたわたしは、

（ うっー！ ）

今更のようにお腹痛かったのを思い出して。

保健室備え付けのトイレに、逃げ込んでしまいました。

ようやくみんなが落ち着いた後で、わたしたちは色々と話しました。

「わたしはてつきり、本当にさらす気なんだとばかり」

月島さんは泣き腫らした目はそのままに、先生に淹れてもらった珈琲を飲みながらぼつぼつと話します。来なれていない場所だから、居心地だいぶ悪そうです。わたしたちに囲まれてるからかもしれないが。

「ああでも言わないと、あいつら収まんないからさ」

あいつら、というのはトイレで一緒にお化粧直しをしていた彼女たちのことでしょう。

「さらす気なんてなかった。本当だよ」

赤い目でそんなこと言われると、責める気が起きません。だから泣くのは反則なんですよ。

……いや、早とちつたわたしが一番悪いのかもしれないけど。

「みんな……さっきはちよつと怖かったよ」

白ちゃんの言葉に、心を抉られるわたしたちです。

「うっ、すいませんです」「ごめん」

わたしと涙未ちゃんは、一緒になって月島さんに謝りました。
一咲ちゃんだけは、仏頂面で無言。まだ警戒してるんでしょうか。
「いや……元はといえば、あたしがへんなこと言っただのが悪かった
んだろうし」

月島さんは、意外なくらい縮こまった様子です。

「その、衣花。色々ひどいこと言っただけで、ごめん……」

白ちゃんの目が、驚きに軽く見開かれました。

わたしも驚きました。あれだけ物凄い勢いで白ちゃんのこと、責
めてたのに。

「……うん」

白ちゃんは、複雑な表情で頷きました。

「あの後で、先輩に怒られてさ……。あたしずいぶん酷いこと言っ
ちゃったなって、かなりへこんだよ。衣花もあたしとおんなじだっ
て、自分で言っただけなのにね……」

「謝ってくれただけでも、十分だよ」

いつもの白ちゃんからすれば、だいぶ平板な声でした。怒ってい
るみたいなの。

「でも、もうあんなことは言わないで欲しいな。私だけじゃなくて、
他の子にも」

わたしたちが白ちゃんを元気づけようとして、うそではあるけれ
ども体調を崩そうとしたとき。あのときも、白ちゃんは怒りました
ね。

他人への共感が強い白ちゃんだからこそ、余計に許せないのかも
しれません。

「うん……分かってる」

ちいさくなつて、泣きそうになつてる月島さん。

ふとわたしは、ねこのシロと遊んだときのことを思い出しました。
いま目の前にいる月島さんは、校舎裏でわたしたちを見つけたとき
と、似た表情をしています。

哀しげで、すこし気弱そうなお。

もしかして、こっちこそが、普段の彼女なのかもしれません。体育館でのことは、必死になりすぎてしまったことが生んだ、ちよつとした過ちみたいなもの、だったのかも。

月島さんも、我を失うくらい、先輩が好きなのですわね。

「……前から思ってたんですけど」

だから、わたしは問います。

「何？」

「正直、月島さんと先輩って、イメージ合わないんですけど……どこが好きなんです？」

「なっ」

月島さんは仰け反って、顔をぱつと赤らめました。恥ずかしいことをきくやつだな、と小さく呟きます。そりゃ、そうかもしれないけどね。

「……イメージ合わないってのは、自覚してるよ。けど、これは、実はちよつと作ってるから」

「作ってる？」

月島さんは、もう色々恥ずかしいとこ見られてるからぶっちゃけるけど、と前置きして続けます。

「付き合いのためにね。ほんととはあたし、もっとおとなしいとか……本とか物語とか、そういうの好きだし……って何言わすの！」いきなり逆ギレされました。おとなしいとか嘘です。

「中学のときとか、あたし自慢じゃないけど友達いなくってさ。だから高校になったら茶髪にして、派手にすれば、友達できるかなあって」

……、どこかで聞いたような話です。

「じつさい、できたけど。でも何か違う気がしたんだよね……」

わたしは、白ちゃん、涙未ちゃんを見ました。二人とも同じ気持ちだったのか、すぐに目が合います。すこし哀しそうな雰囲気目付きでした。

「……で、先輩とは素で話せた、というわけですか」

もう何となく分かってしまったわたしは、先回り。

「まっ、まあね。話ちゃんと聞いてくれるし、簡単に否定しないし、あと……」

「ノロケ出した」

涙未ちゃんの一言で黙る月島さん。白ちゃんのオーラもやや、剣呑な方向にシフトです。

すこし、緊張した空気が流れます。

「え、えっと」

それをほぐそうとしたのか、涙未ちゃんがわざとらしく陽気な声を出しました。

「ま、まあ、とりあえずよかったよね。手紙も戻ってきたし、月島サンのことも分かったし」

その言葉に、白ちゃんの雰囲気是和らぎます。

「うん……手紙、持ってきてくれて本当によかったよ。ありがとう」

「い、いいってば。こんなの、全然」

柄にもなく、……と言ったら失礼ですが……照れた様子の月島さんです。

「白たんが落としただけなんて、気が抜けるオチだよねっ」

涙未ちゃんがそう言った瞬間、月島さんの顔色が変わりました。

「う、うん……そうね」

目があっちこっち、泳いでます。

拳動不審。

「何か、あやしいですね」

「えっ」

「本当に、拾っただけなんですか？」

「ほ、本当だよ」

目が泳いでます。あっちこっち……一咲ちゃんのほうを見ないようになっているのは、彼女が怖いからでしょうか。

「白状したほうが身のためですよ？ 今なら許してあげますから」

「わっ、分かったよ！ 言うよ、本当のこと言うから
初めからそうしておけばいいのです。」

「手紙、ほんとうは」

そのとき、五時間目の予鈴が鳴りました。

わたしたちのお昼休み……憩いのときの終わりを告げる、騒々しい鐘の音。

妙に長く感じられる、その音が鳴り終わった後、いちばん初めに喋り出したのは、わたしでもなく、月島さんでもない

「……手紙、ほんとうは、私が月島さんに渡したの」
とてもつらそうな顔をした、一咲ちゃんでした。

第十八話

「……えっ？」

驚き声は、白ちゃんのもの。だけど、わたしも、涙未ちゃんも、同じ気持ちでした。

「白の手紙、月島さんに渡したのは、私」

「何、言ってるの」

白ちゃんの顔は、半分笑ったままに固まっています。

「うそだよね？」

「うそじゃない」

一咲ちゃんはまったく笑っていないくて、それどころかいつもよりずっと険しい顔をしていて、だからわたしたちはみんな、はっきりと理解してしまいました。

一咲ちゃんは、うそを言っていない。

白ちゃんの手紙を盗み出して、月島さんに渡したのは、一咲ちゃんだと。

「なんで。どうして」

かすれた声で、白ちゃんは問いかけます。

ありえない。一咲ちゃんが白ちゃんの害になるようなことをするなんて、ありえません。そのはずでした。

なのに、何故？

「……私、白には、先輩と付き合って欲しくなかった」

「え」

「さっちゃん的には、先輩じゃだめだってこと？」

「ちがう」

涙未ちゃん言葉を、一咲ちゃんは、はっきりと否定します。

「先輩だから、ということじゃなくて。誰とも、付き合って欲しく……ないの」

意味が分かりませんでした。誰とも付き合うな？ どうしてそん

なことを。

（ まさか ）

ふと、わたしは、ここ最近の一咲ちゃんの態度を思い出しました。先輩と白ちゃんの関わりに関する、ちいさな違和感の数々。その結果としての、根拠の薄い推測。

「応援してくれてるって、思ってたのに。どうして、そんなこと、言うの」

「白たんを元気付けようとするときも、すごい必死だったし、ラブレター書くときだって、あんなにノリノリだったのに」

涙未ちゃんの言う通りです。一咲ちゃんは、確かに、白ちゃんのことを大切に思っているはずです。

でも、もしわたしの推測が正しいとするならば……、

白ちゃんを助けようとするのと、先輩と付き合っただけで欲しくないという気持ちは、決して矛盾するものではありません。

「一咲ちゃん……ほんとうは、私のこと、きらいなの？」

「ちがう！」

聞いたこともないほど大きな声で、一咲ちゃんは、とつぜん叫びました。

「嫌いなんてことない。ぜったい、そんなことない」

「じゃあ、どうして」

「私は」

頬を桃色に染めて。きつと白ちゃんを見すえて。つり目気味のせいで睨みつけるようになってしまってますが、そんな状態で、一咲ちゃんは自分の思いを吐露します。

「しっ、白のことが、好きなんだ」

それに対し、白ちゃんはただ、困惑を顔に浮かべただけ。

「えっ、よ、よく分からないよ、じゃあ、なんで……」

「友だちとして、っていう意味じゃなくて」

「えっ」

「その、……恋愛の、対象として」

「え」

……やっぱり。

白ちゃんは……、目をいっぱいに見開いて、口半開きの状態で、固まってしまってます。

五秒くらい、そうしていただでしょうか。

「え、ええーっ!？」

「さっ、さっちゃん……!？」

白ちゃん涙未ちゃん、大慌て。

「えっ、一咲ちゃ、好き？ わたし？」

あたふたと、自分を指さして、それから一咲ちゃんをさします。
頷く一咲ちゃん。

「ええーっ？」

白ちゃんまで頬を桃色に染めて、両手を当てて俯きます。「一咲ちゃんが……私？ ええっ？」ぶつぶつと。「あっ、だから、私と先輩が……なるほど……じゃなくて。ええっと」状況に思考がついていってません。

「じゃ、じゃあさ、昔さっちゃんが書いたラブレターって、もしかして白さんに？」

一咲ちゃんは、答えません。ただ、俯いて、耳まで赤くしています。

それが答えでした。

「う、うわあ……」

おののいているのか感心しているのか分からないような声をあげて、涙未ちゃんは後ずさります。

状況が混沌としてきたので、わたしは聞きたいことを聞きます。
いつからなんですとか、色々質問はあるけれど、

「一咲ちゃん。どうするつもりですか。これから」

けっきょく重要なのは、そこだと思います。

一咲ちゃんは、長いあいだ、黙っていました。

白ちゃんも、他のみんなも。一咲ちゃんが口を開くのを、じつと

待ちました。

やがて彼女は、口を開きます。意外と落ち着いた口調でした。

「白のことは、諦める」

「……そうですか」

それは、予想範囲内の答えでした。

けれど、その次は。

「保健室にも、もう来ない」

「えっ」

「もう、ここには居られない。私は、自分の気持ちを優先して、白の気持ちを台無しにしようとしたんだから…… 白の側にいる資格なんか、ない」

「そんな。一咲ちゃん？」

慌てたのは白ちゃんです。でも、一咲ちゃんは、堰が切れたように言葉を重ねていきます。彼女じしんが、してしまったこと。罪を。「私は、白が失恋すればいいと思った。白のラブレターがなくなつて、月島さんと先輩が付き合えば、白は先輩のことを諦めざるを得なくなる。そうなったとき、慰めてあげれば、もしかしたら　　つて思った」

一咲ちゃんは月島さんを見て、続けます。

「そのうえ、ラブレターを月島さんに渡せば、勝手に捨ててくれるだろうし盗んだのを彼女のせいにできる、と思った」

「う、黒い」

わたしは呟いた涙末すけを睨みつけました。茶化す場面じゃないのです。

「そう、私は、腹黒くて……汚いんだ」

ほら見なさい、と言って涙末すけをはたきたい気分になります。

「だから、もう……ここには、来ないよ」

ぎゅっと引き結んだくちびると、固く握り締めた両手のこぶしが、彼女の心中を表現しているようでした。じっと、耐える心。後悔と、後ろ向きの決意。

「ごめん、白。本当に、ごめん……でも、本当に、白のこときらいなわけじゃないから」

白ちゃんは、答えませんでした。

「ごめん……」

一咲ちゃんが二度目に謝って、すこしだけ黙ったあとで。

白ちゃんは、ようやく口を開きました。

「……私こそ、ごめん」

「え……」

顔をあげた一咲ちゃんの目は、すこし、潤んでいました。

「私、やっぱり、先輩のことが好きだから。一咲ちゃんの気持ちは、うれしい、けど……やっぱり、受け止められない、と思う」

「うん」

一咲ちゃんの目からは、今にも涙が溢れそうです。

「でも、……わがままかも、しれないけど」

すこしだけ、言いづらそうに。白ちゃんは続けます。

「一咲ちゃんが保健室に来なくなるのは、私、いやだな……、ひとりでここに来るのは、ちょっと不安だよ」

ぴたりと、涙が止まりました。数度の瞬きに押し出された、ごく小さなしずくが頬を伝って落ちただけ。

「でも、私」

「それとも、一咲ちゃんはもう、私がいるところには来たくない……？」

白ちゃん、その聞き方は……すごくいい感じですよ。

案の定、一咲ちゃんは慌て始めました。

「ちっ、ちがう。それは違う」

「だったら、いいんじゃない、そんなに気にしなくても。手紙は戻ってきたんだしさ」

畳み掛ける涙未ちゃんに、うんそうだよ、と白ちゃんが相槌を打ちます。

「結果オーライってことでね。さっちゃんだって、もうこんなこと

しないでしょ？」

「そう、だけど……でも」

それでも納得しない、一咲ちゃん。

段々わたしは、じれったくなってきました。

誰も、一咲ちゃんに保健室から出て行けなんて言ってます。でも彼女のには何か引つかかる様子。どうすればいいんでしょうね。

「私は、こんなに、悪いことしたのに」

その言葉で、わたしはピンとききました。

単純な話し。悪いことしたなら……

「償えばいいです」

「つぐない？」

一咲ちゃんは、本来まじめです。

だから、正論で攻めればオーケーなのです。

「罰を与えます」

「罰つて、もみじ」「さ、さくらちゃん？」

驚いた二人が、わたしを制止しようとしています、が。

「いい」

一咲ちゃんは、じつに真面目な様子で頷きました。立派な、覚悟の表情です。

「何でもする。それだけのことを、私はしたから」

「……では、いまから言うこと、ちゃんとやってくださいね」

「さくらちゃん、罰なんか」

「いいんですよ、白ちゃん。これは一咲ちゃんが望んでることなんですから。まず、最初に」

「いくつがあるのっ？」白ちゃんの声を無視して、わたしは続けます。

「毎日、白ちゃんをしっかりと保健室まで送り届けること」

「はっ？」

「次に」「待って、葉桜。それは」「涙未ちゃんもっと仲良くすること」

「えっ！」というのは一咲ちゃんの叫び声。

涙未ちゃんは微妙に傷ついた表情で、

「……いや、もう仲良くしてるつもり、だったんだけど。ひどいなさっちゃん」

「ご、ごめん」

「あとは」

「まだあるの……」

「ここにいるときは、もうすこし喋ってください。さみしいので」
うっ、と詰まる一咲ちゃん。今言った罰三つの中ではいちばんきつそうな反応です。

「……ぜ、善処する。でも、私、無口だから」

「十分です」

わたしはわざとらしく、頷きました。

「……というくらいなんですけど、白ちゃん涙未ちゃん。他に何かありますか？」

二人に流し目を送って皮肉げに笑い、煽るわたしです。

「私からも、お願いしたいな。もうちょっと喋ってほしい」

「お願いじゃないですよ。罰です」

「え？　じゃあ、えっと。喋りなさい！」命令になりましたし。

「わ、わかった……白がそう言うなら」

「じゃあぼくの罰は、白たんに向けて書いたラブレター公開！」

わたしは無言で涙未すけの頭にチョップを入れました。

「な、何するの」

「リアル罰は禁止です」

「うう、チャンスだと思ったのに……じゃあ、」

「今ので罰権利は終了です」

「うそっ！？」

「まじです。発言権は一回のみです。言ってませんでしたか」
「ひどい」

そんな心底残念そうな顔しないでほしい。

「……と、いうわけで。以上の罰を受けるなら、わたしたちはあなたを許しましょう。ね？」

うん、と頷く二人です。

「あ、ありがとう……みんな。ごめん」

一咲ちゃんはどこことなくほっとした様子で、彼女には珍しい表情つまり、微笑み、を浮かべます。もう保健室にこないなんておかしいことは、言いませんでした。

それが、いちばんです。

「なんか、よく分かんないけど……よかったね」

収まりかけた空気に混じる、月島さんの、一言。

「……まだいたんですか。すいません、正直忘れかけてました」

「ひどっ！ あたし、罪かぶされそうになったのに」だって悪者ですし。「……まあ、手紙のことがあったから、ここに来やすくなったのは確かだけどさ」

「そうですか。一咲ちゃんに感謝しないですね」

「それもどうなの……？」

「まあ、それはともかく」

白ちゃんの手紙が返って来て、月島さんと一咲ちゃんが本心を打ち明けはしましたけれど。そもその問題は、解決してないのです。「あなたはどうするんです？ 先輩のこと」

「あ、あたしは」

「やっぱり好きだって？」

わたしと涙末ちゃんは、二人して月島さんに詰め寄ります。諦めないと言うならば白ちゃんの恋敵、イコールわたしたちの敵です。そのへん、はつきりさせねばなりません。

「うう、すきだけどさあ……」

「けど、何ですか。分かりませんし」

「ちょ、ちよっと、落ち着いて」

問い詰めモードのわたしたちを制止したのは、意外にも、白ちゃんでした。

「そんな風に言ったら、月島さんだって正直な気持ちで話せないよ」
「でも」反論しようとしたわたしを、白ちゃんはすこし強い調子で制しました。

「でもないです」

なぜか丁寧語で。

「それじゃ、無理やりみたいだよ。月島さんと、同じになっちゃうよ」

うつ、それは。

「たしかに……」

「……いや、そこで納得されると、あたしとしてもグサツと来るんだけどさ」

「でも、事実だよな」ばつさりと白ちゃん。ちょっと怖いです。……こんなキャラでしたっけ。

「う、まあ。ごめん」

「私はぜったい、月島さんの邪魔はしないよ。けど、月島さんも、私の邪魔はしないでほしい」

「うん……」

「月島さん。私、この手紙、先輩に渡すよ」

「……むっ」

「月島さんも先輩のこと好きだってよく分かったけど、私だって好きだから」

「あ、あたしだって」

その言葉を聞くと、白ちゃんは、なぜか妙に満足そうな表情で頷きました。

そして、真剣な瞳で月島さんを見つめて……

「私、」

はつきりと、言いました。

「負けないよ」

月島さんは、はっと目を見開きました。
宣戦布告。

わあ白たんなんかカッコイイ、と涙末ちゃん。

わたしも、同じ気持ちでした。

白ちゃん、なんだか、強くなりましたね……。

月島さんのことは、この分だと、もう心配いらないですね。先輩への恋についてはまだ決着してませんけど。

（あれ？）

わたしは心に引っかかりを感じました。何か、忘れてるような。

まさにその瞬間。

がらりと、保健室の扉が開く音がしました。すこし切羽詰ったような、テンポの速い開閉音。

唐突に、わたしは思い出しました。

何事、と振り返るわたしたちの前に現れた、そのひとは　夕足先輩。

そついえば、保健室に入る前、連絡入れてたんでした。

「い、衣花さん、だいじょうぶ？」

ずいぶん急いで来たらしい先輩は、一息つくなりそう言いました。白ちゃんといえば、そんな様子を怪訝そうに見ています。当然といえば、当然ですが。

「ええと、先輩。何をそんなに急いでるんですか？」

「ついさつき、呉内さんからのメールに気付いて」

……遅っ。

ああなんだ、みたいな空気が流れます。せつかく授業抜け出してまで助けに来てくれたのに、いざ到着してみればとつくに事件は終了後。遅れてきた王子、姫はもう助けを必要としていません　うわあ、先輩ちよっと、かわいそう。

「いや、」

なにか慰めの言葉でも、と思ったわたしに、女のこふたりの声がかぶさります。

『先輩っ、来るの、遅いです！』

白ちゃんと月島さん、完全なハーモニクス。

「ええっ？」

驚いた先輩の顔はちよつと間が抜けていて、
だからなのか、白ちゃんと月島さんは、声をそろえて笑い出しま
した。

最終話

白ちゃんの恋文が消えて、また戻ってきた日の翌日。

「こんにちはー」

いつものようにわたしたちが保健室で憩っていると、女生徒がひとり、挨拶しながらやって来ました。

「いらっしやい。どうかした？」

「はい、ちよつと」

浅川先生に曖昧な返事をするところからして、どうやら病人怪我人の類ではないと知れます。

はて、とわたしは思いました。それならば、彼女は一体何の用で来たのかと。

見覚えのないひとでした。黒髪。前髪はおでこの真ん中あたりで切り揃えた姫カット。すこし日焼けした肌と一緒にになると、すこしアンバランスなかんじがしました。

彼女、すなわち小麦姫力ちゃんは、とてとてと迷いない足取りで、わたしたちが座るベッドのほうに歩いてきます。

その視線の先にあるのは、白ちゃんのベッド。

白ちゃんと夕足先輩が話している、二人の世界でした。

小麦姫力ちゃんは、先輩からすこし離れたところで足を止めます。

「こんにちは、先輩」

「ああ、こんにちは。月島さん」

ええっ！

「来ちゃった」

うふふ、とか笑ってどこからともなく奪ってきた椅子に腰掛ける小麦姫力ちゃん。

確かに……よく見ると、そしてよく声を聞くと、それは確かに月島さんでした。

「なっ、何しに来たんですか」

わたしは思わずそんな声をかけます。

「何しに、って」月島小麦姫力さんは、まるで当然ですみたいな顔で言い放ちます。

「先輩に会いに来たに決まってるじゃない」

「大事です!？」

うるたえたわたしは白ちゃんを見ますが、彼女は妙に落ち着いたもの。どうやら、何かひみつの談合が彼女らの間でなされたものと思われました。

「よろしくね、衣花」

「よろしく、月島さん」

うふふ、と笑い合う二人の笑顔。こわいですが目が笑ってませんから。

昨日、放課後。白ちゃんは改めて、先輩に恋文を渡しにいきました。

ところが、どうやらそこに、月島さんもついて行ったようなのです。

そのときどんな会話が交わされて、彼女たちの恋にどんな結論が出たのか。それは、まだ、分かりません。

でも、白ちゃんと先輩と、あと月島さんがふつと一緒にになって話してみたいなこの状況。

これを見るに、ひよっとしたら、結論なんか何も出てないのかもしれません。

保留、だとしたら。

先輩あなた、煮え切らなすぎです。

+ + +

一咲ちゃんについて、すこし。

あの場では一応丸く収まったものの、実はわたし、本当にちゃんと「罰」を受けてくれるかはちょっとだけ心配していました。だって、保健室に来てくれたなんて、一咲ちゃんの気持ちというよりわたしたちのわがままですし。

でも、幸い、彼女はちゃんと約束を守ってくれています。

それどころか、以前よりだいぶよく話しをしてくれるようになりました。

どうも、これまであんまり話しをしなかったのは、白ちゃんが好きだという感情を抑えるためでもあったみたいです。

吹っ切れた、ということなんでしょうか。

だったらいいな、すっきりできたらいいなと、わたしはそう願います。

+ + +

ある日の放課後。わたしはいつものように、保健室に入ります。

二つあるベッドのうち、手前側……すなわちわたしの場所には、今日も涙未ちゃんが寝ています。ベッドからすこし離れた場所、保健室の隅っこには、定位置に陣取る一咲ちゃんの姿。白ちゃんのベッドは、カーテンが引かれていて中の様子は分かりません。

そして。

「まったく、なんであなたが来てるんですか」

保健室の真ん中には、最近よく来るようになった、月島さんの姿が。

「ここは保健室ですよ。病人怪我人あるいは保健委員以外は立ち入り禁止です！」

白ちゃん派のわたしとしては、月島さんが毎日のようにやってきては先輩と白ちゃんの間割って入るのが面白くありません。

「いいじゃん。っていうか、相坂だって病人じゃないでしょ？」

「涙未ちゃんは」

今日もわたしのベッドでぐうすか寝ています。よだれ、……あとおなか出てますし。

「……病人なんですよ。たぶん」
「……なるほど」

神妙な顔で納得する月島さん。

「納得したなら、出てお行きなさい」

「えーっ、でもあたしだって病弱だったよ。貧血持ちだった、中学の頃」

「過去話は不許可です」

「えー」

わざとらしい声を出して頭を抱える月島さん。顔笑ってますし。前髪さらに刈りますよ。

「だいたい何ですかその髪型は。雰囲気変わりすぎですし」

茶髪で今風のパーマだったのに、今は若干お菊モード。

「だから前のは作ってたって言ったじゃん。元々こっち系が趣味なんだよねあたし」

「むうっ。褐色のお仲間たちの元に帰りなさい！」

「何よ褐色って。てゆうか、あたし抜けたしあのグループ！」

そんなかんじでやりあっていると、月島さんは切り札を出してきやがりました。

「ってゆうか、あたし、保健委員だし」

見たことないですし！？

わたし、素早く一咲ちゃんに目配せ。うなづく一咲ちゃん。なんてこっただです。

「さっ、サボリの癖に、権利主張だけは一丁前ですか」

「これからはちゃんと仕事するし。だから、問題なし」
小憎らしい。

「どうなんですか、一咲ちゃん。この態度」

「……仕事するなら、いいんじゃない」

一咲ちゃんは、月島さんに対しては妙に甘い気がします。逆に夕

足先輩に向ける視線は、若干厳しいような……。やっぱり、完全に白ちゃんが好きだという気持ちが消えるわけではないでしょう。開き直って、逆に露骨になった感もありますが。

月島さんは勝ち誇った顔でわたしを一瞥すると、白ちゃんのベッド領域に闖入しました。

「こんにちは、先輩」

「こんにちは、月島さん」

「こんにちは月島さん。今日も来たんだね」

「あ、衣花、こんにちは。いたんだね。体弱いんだから、家で寝てればいいのに」

「月島さんこそ、物語が好きならこんなところに来てないで、図書室で本読めばいいのに」

「あたしより自分の体の心配したほうがよくない？ ほら、今も顔ちよつと赤いよ熱あるんじゃない？ 今すぐ帰ったほうがいいよ？」

「自分の体のことならよく分かるよ、心配しないでね。それにここ保健室だから、へんに帰ろうとするより安心だし。月島さんこそ顔ちよつと赤いよ。ベッドもう埋まってるし、歩けなくもなさそうだから早く帰ったほうがいいと思うよ？」

「はは、ありがとう衣花、心配してくれて」

「月島さんこそ、気遣ってくれてありがとう」

「まあまあ二人とも……」

『先輩は黙っててください』またハーモニクス。

二人とも顔だけは和やかです。

白ちゃん、キャラ変わってるし。

「衣花も詩とか好きなら図書室いつて本よんだら？」

「私はいいいよ、先輩とお話してるから。月島さんだけでどうぞ」

「なんだよ、じゃあ後で一緒にいく？」

「はいはい、あとでね」いくんですか。

何がどうなったのか、この二人、あれから妙に仲がいいようです。いえ、本人たちに言うとは全力で否定されるのですが。けんかするほ

ど仲がいいと言ってあげたらすごい剣幕で怒られました。

正直、ちよつと妬けるかも。

ほら、今もけつきよく、白ちゃんが横たわるベッドの端に月島さんが横座り。先輩と三人で和やかに話し始めました。

いったいどんな落ち着き方ですか、まったく。

と、いう感じで。

わたしが脳内設立した謎部活である保健室部に、一人新入部員が増えてしまったようです。新人というか侵入ですが。

先輩も交え、これまでよりもすこしだけ、にぎやかで楽しくなった保健室。まあ、わたしとしてはちよつと引つかかるところもありますけれど、白ちゃんがとても楽しそうなので良しとします。

わたしたちは、体が弱くて。

それで憂鬱になることも、ありますが。

みんながいる、この保健室さえあれば、そんな憂鬱すべてを受け容れられる気がします。

テンダーブル
優しい憂鬱。

この場所には、そんな言葉が似合うような気がしました。

願わくは、この場がいつまでもありますように。

白ちゃん風にいえば

せかいが、きれいでありますように。

わたしはじぶんのベッドに腰掛け、白ちゃんがいるほうに目を向けます。仕切りの白いカーテンは閉じられていて、その向うから話し声が聞こえてきます。

カーテンをめくると、すこし背中が曲がった、ちいさく細い肩が見えます。

振り返る、白ちゃん。

その顔には、とても楽しそうな笑顔が浮かんでいました。
そうして、わたしは挨拶します。

「白ちゃん、こんにちは」

「こんにちは、さくらちゃん。今日はせかいが明るいね」

「そうですね」

ほほえんで頷き、わたしはいつものように問いかけます。

「今日の調子は、どうですか？」

白ちゃんは、今日もすこし蒼白い顔に、とてもきれいな笑顔を浮かべます。

「うん」

そして、はっきりとした声で、答えてくれました。

「いつもよりちょっと、元気だよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1333e/>

てんだーぶるー。～せかいがきれいでありますように。

2010年10月8日15時02分発行